博　多　119

－博多遺跡群 第158次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第989集

2008

福岡市教育委員会

博　多　119

－博多遺跡群 第158次調査報告－

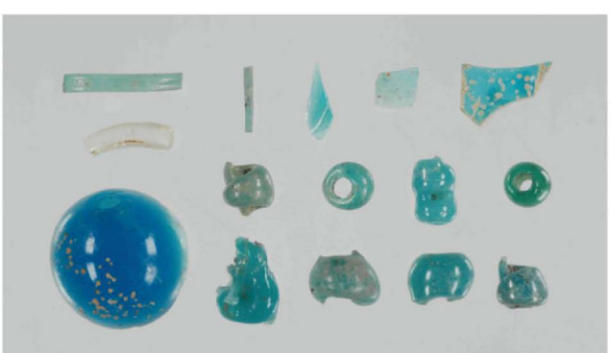
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第989集

調査番号：0564
遺跡略号：HKT-158

2008

福岡市教育委員会

SK1353 獣骨出土状況（北東から）



第158次出土　ガラス製品

290　289　292　293　357
291　282　281　280　279
443　288　287　286　283

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを保護するとともに、活用し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な務めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成17年度に実施したビル建設に伴う博多遺跡群第158次調査の成果を報告するものです。博多遺跡群は、古代から中世を通じて、中国・朝鮮半島との貿易で繁栄した都市遺跡です。古くからアジアの拠点都市としての役割も果たしてきました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの意を表します。

平成20年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　山田　裕嗣

例　言

1．本書は福岡市教育委員会が博多区店屋町66番1,66番2,67番,68番におけるビル建設に伴い、発掘調査を実施した博多遺跡群第158次調査の報告書である。
2．本書に掲載した遺構実測図の作成は星野惠美、名取さつきが行った。
3．本書に掲載した遺物実測図の作成は名取さつき、遠藤茜、楠瀬慶太、星野が行った。
4．本書に掲載した遺構・遺物写真の撮影は星野が行った。
5．本書に掲載した挿図の製図は星野が行った。
6．本書で用いた方位は磁北で、真北より6°21′西偏する。
7．遺構の呼称は竪穴住居跡をSC、井戸をSE、溝をSD、土坑をSK、ピットをSPと略号化した。
8．本書で記述する輸入陶磁器の分類、説明については以下の文献を参考とした。
太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』(太宰府市の文化財第49集)2000年
9．遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
10．本書の鋳造関連遺物・金属器・ガラスの保存科学的分析は福岡市埋蔵文化財センター 比佐陽一郎、銅銭の保存処理を片多雅樹が行った。
11．本書に関わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
12．本書の執筆は付編を除いて星野が行った。
13．付編として埋蔵文化財第1課 屋山洋による獣骨、埋蔵文化財センター 比佐による坩堝類の報告を掲載している。
14．本書の編集は星野が行った。

遺跡調査番号	0564		遺跡略号	HKT-158	
地番	博多区店屋町66番1,66番2,67番,68番			分布地図番号	千代博多 48
開発面積	551.01㎡	調査対象面積	331.6㎡	調査面積	331.6㎡
調査期間	平成18年1月16日～3月17日				

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 5
　1．調査の方法と経過 …… 5
　2．調査の概要 …… 5
　3．遺構と遺物 …… 8
　　1）中世・近世の遺構と遺物 …… 8
　　2）古代の遺構と遺物 …… 50
Ⅳ．まとめ …… 84
付　編
　1．博多遺跡群第158次調査出土の動物遺存体について …… 86
　2．博多遺跡群第158次調査出土坩堝類の分析 …… 88

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

2005年８月30日、スエヒロ産業株式会社より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に博多区店屋町66番1,66番2,67番,68番（敷地面積:551.01㎡）におけるビル建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けて埋蔵文化財課では、2005年10月27日確認調査を行った。その結果、古代・中世の遺構と遺物を確認した。その後、両者で協議を行った結果、建物建築部分の331.6㎡を対象として記録保存のための発掘調査を実施することとなった。博多遺跡群第158次調査は2006年１月26日から３月17日まで行った。

2．調査の組織

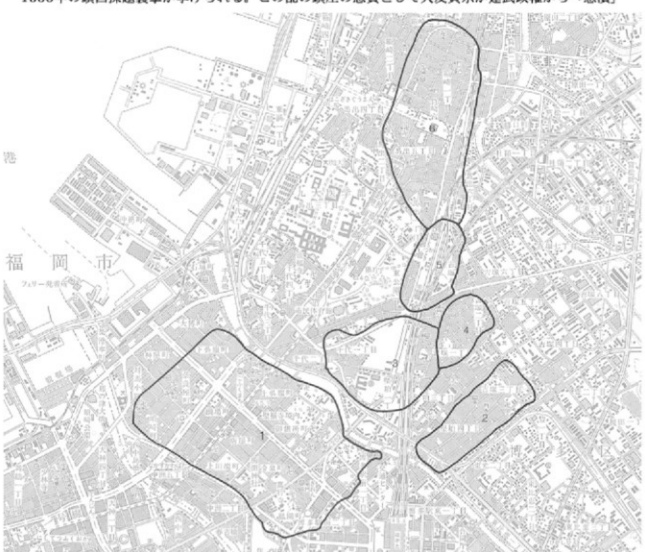
調査委託：スエヒロ産業株式会社
調査主体：福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課（現 埋蔵文化財第１課）
調査総括：埋蔵文化財課長（現 埋蔵文化財第１課長）山口譲治
同課調査第２係長（現 埋蔵文化財第１課調査係長）池崎譲二（前任） 米倉秀紀（現任）
調査庶務：文化財整備課管理係（現 文化財管理課管理係）鈴木由喜
事前審査：埋蔵文化財課事前審査係長（現 埋蔵文化財第1課事前審査係長）濱石哲也（前任）
吉留秀敏（現任）
同係（現 埋蔵文化財第1課事前審査係）主任文化財主事 吉留秀敏（前任） 宮井善朗（現任）
同係（現 埋蔵文化財第1課事前審査係）文化財主事 本田浩二郎（前任） 上角智希（現任）
調査担当：埋蔵文化財課調査第２係（現 埋蔵文化財第１課）文化財主事 星野恵美
調査作業：石橋テル子　近藤澄江　村田敬子　浦伸英　長野嘉一　本郷満子　関哲也　尊田絹代
宗像正勝　中村桂子　徳山孝恵　遠山勲　原勝輝　黒木三千男　更級成人　片岡博
三浦まり子　芹川淳子
整理作業：加集和子　山本良子　樋口三恵子　木本恵利子　小畑美紀
調査・整理協力：埋蔵文化財センター　比佐陽一郎　片多雅樹

発掘調査から報告書作成に至るまでスエヒロ産業株式会社をはじめとして、多数の関係者の皆様には多大なご理解とご協力を賜りまして、ここに謝意を表します。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

博多遺跡群は地理的にみると、博多湾に面した砂丘列の上に立地している。西を博多川、東を石堂川に、南は那珂川に流れ込む旧比恵川に挟まれ、地理的にも独立した一角をなしていた。この砂丘は縄文海進以降に形成されたもので、３つの砂丘列からなり、内陸側の２つの砂丘は「博多濱」、博多湾側の砂丘は「息濱」と呼ばれている。今回の調査地点は「博多濱」の北側に位置する。

博多は古来より対外交渉の拠点として発展してきた町である。その中心は海岸線の後退や人工的な干拓によって、「博多濱」から「息濱」へと拡がっていったことが、発掘調査等により確認されている。「博多濱」では夜臼式土器が包含層から出土しており、この頃から人々の痕跡がうかがえる。弥生時代中期になると竪穴住居跡や甕棺墓などが営まれ、古墳時代前期には方形周溝墓、中期には前方後円墳も造られている。一方、これらの時期のものは「息濱」では確認されていない。「息濱」で確認されている遺構は古く遡っても11世紀である。鎌倉時代の13世紀後半、２度にわたる元寇で、博多の街は焼かれ、「息濱」には元寇防塁が築かれる。発掘調査では焼土層が多く見られ、その一つとして1333年の鎮西探題襲撃が挙げられる。この乱の鎮圧の恩賞として大友貞宗が建武政権から「息濱」



1 博多遺跡群　2 吉塚遺跡群　3 堅粕遺跡群　4 吉塚祝町遺跡群　5 吉塚本町遺跡群　6 箱崎遺跡

Fig.1　博多遺跡群位置図（1/25,000）

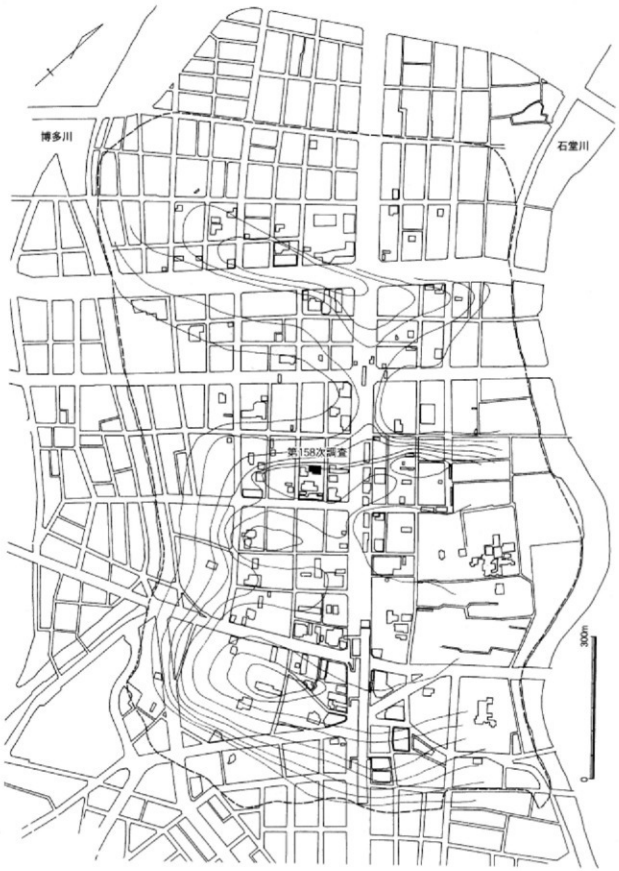


Fig. 2　博多遺跡群内調査区位置図（1/8,000）

を与えられている。その後、1348年、室町幕府は博多を官領所在に指定し、九州の在地勢力を抑え、1371年、今川了俊が鎮西探題として赴任する。しかし、1395年、了俊は解任され、渋川満頼、義俊父子が探題となる。父子は1420年朝鮮使節を迎えるにあたって、市街整備を行い、博多の道路を整備する。しかし、鎮西探題も長続きせず、1429年までに「息濱」は再び大友氏の支配となる。大友氏は「息濱」を拠点に、朝鮮との貿易を積極的に繰り広げ、莫大な利益を得るが、博多の入港公事に関する権利は筑前守護台の大内氏が持っていた。そのためこの権利を巡って、大友氏と大内氏は度々対立し、1532年、戦火を交え、大内氏が「息濱」を奪っている。「息濱」は勘合貿易によって大きな利潤を産み出す地域であったため、戦国時代になると諸大名の争奪の的となる。当時の博多は商人達による自治都市が形成され、繁栄を極めていたと伝えられる。しかし、度重なる戦火の末、1586年立花城を攻めあぐねた島津氏が博多の町を焼き払ってしまう。この博多の町が復興するのは、翌年の豊臣秀吉による九州制圧後である。博多商人の神屋宗湛、島井宗室らの手によって新しい町割りが作られる。17世紀初めには「息濱」と「博多濱」を隔てていた湿地が埋め立てられ、博多は近世都市として誕生する。

今回の調査地点の周辺では発掘調査が既に行われている。これらの調査から本調査地点周辺の遺構の初現が7世紀後半であることが確認されている。弥生時代・古墳時代初頭の遺物は出土しているが、その時期の遺構は検出されていない。8世紀には集落が営まれ、竪穴住居跡、井戸、土坑が検出されている。11世紀前半までは遺構数としては減少気味であるが、緑釉陶器や越州窯系青磁などの遺物の出土量は卓越したものがある。そして、再び11世紀後半から遺構は急増する。今回の調査では8世紀中頃から後半、12世紀から近世にいたる遺構を検出している。遺物としては、弥生時代中期のものが最も古い。これまでの調査成果と大差ないものとなっている。

Fig.3　第158次調査区位置図（1/1,000）

Ⅲ．調査の記録

1．調査の方法と経過

調査に先行して、事業主による矢板設置と現地表面より発掘調査開始面（GL－200㎝前後）までの鋤取りを行った。表土鋤取りによる廃土は場外搬出を行っている。また、申請地には４階建てのビルが存在しており、この基礎杭を撤去すると遺構を破壊するため、杭を抜き取らずに調査を行うこととなった。現地表面は標高約5.1ｍを測る。試掘の結果、調査区の南側は既存のビルのため、GL－210㎝前後まで攪乱されていた。建物のない箇所でもGL－210㎝前後まで、近世以降の攪乱層であったため、発掘調査はGL－210㎝以下を対象とした。砂丘面までは20～30㎝程度の包含層が部分的に残る程度であったため、基本的に遺構面は砂丘地山面での１面の調査であった。

まず、南西側3/4の発掘調査を行い、その廃土を北東側の1/4に仮置きし、溜まった段階で、場外搬出を行った。南西側の調査を終了した後、廃土置場として使用していた北東側1/4の調査へと移った。予定建物床面積は269.56㎡であったが、実際の調査対象面積は付帯工事範囲を含んだ331.6㎡であった。

2．調査の概要

本調査地点は博多遺跡群を構成する３列の砂丘のうち、中央の砂丘に位置し、「博多濱」の北縁に立地する。北側の第40・61次調査では砂丘は北側へ落ちており、第40次調査では12世紀後半、第61次調査では13世紀前後に湿地を人為的に埋め立てて生活を営んでいる。本調査区とこれらの調査区の間で、砂丘の急激な落ちが存在すると思われる。

本調査区は既存建物により地山付近まで大きく破壊されていた。遺構検出面（砂丘地山面）まで、重機による鋤取りをおこなったため、土層図は採っていない。地山直上まで、現代・近世による攪乱であった。北東側の第38次調査では標高4.2～3.1mまで３面、第43次調査では標高3.6～2.8mまで４面の調査を行っている。南西側の第126次調査では標高3.6～2.8mまで３面、第85次調査では標高4.3～3.0mまで５面の調査を行っている。このように周辺の調査区では遺構の遺存状況が良好であったため、時代毎に３～５面の調査を行っている。しかし、本調査区では、ビル建設等によって、上面が破壊され、地山面での１面の調査であった。時代毎に上面で掘削できるものが、最下層（地山面）１面での調査となり、すべての時期を１面で検出することとなった。そのため遺構は重複しており、切り合いが複雑なものとなってしまった。遺構検出面は砂丘上面にあたる、標高約3.0mの黄褐色砂層で行った。

検出した遺構は主に奈良時代の８世紀中頃から後半、中世・近世の12世紀から16世紀の井戸、溝、土坑、柱穴である。遺物では、弥生時代中期の甕の底部片が最も古いが、これに伴う時期の遺構は検出していない。８世紀代の遺構は調査区北東側に集中しており、北西側では遺物は出土するが、遺構は確認できなかった。廃棄土坑２基、土坑、柱穴を検出した。廃棄土坑のうち１基は鍛冶炉であり、ウマ・ウシの頭部を含む獣骨がまとまって出土した。廃棄土坑からは多量の須恵器、土師器とともに、鍛冶に伴う鍛造剥片・粒状滓・鉄滓、製塩土器、墨書土器が出土している。また、他の土坑、包含層中からは、この時期の銅製造に関連する坩堝類が出土する。９世紀になると遺構は検出されず、次に確認されるのは12世紀になってからである。まず、土坑が検出され、12世紀中頃から後半になって井戸・溝も確認できるようになる。遺物では、12世紀前半の土坑からガラスの小玉とともに未製品や失敗品が出土しており、近くに工房があったことがうかがえる。この土坑からは五銖銭も出土している。14世紀になると遺構は減少傾向にあり、その傾向は近世にいたるまで続く。

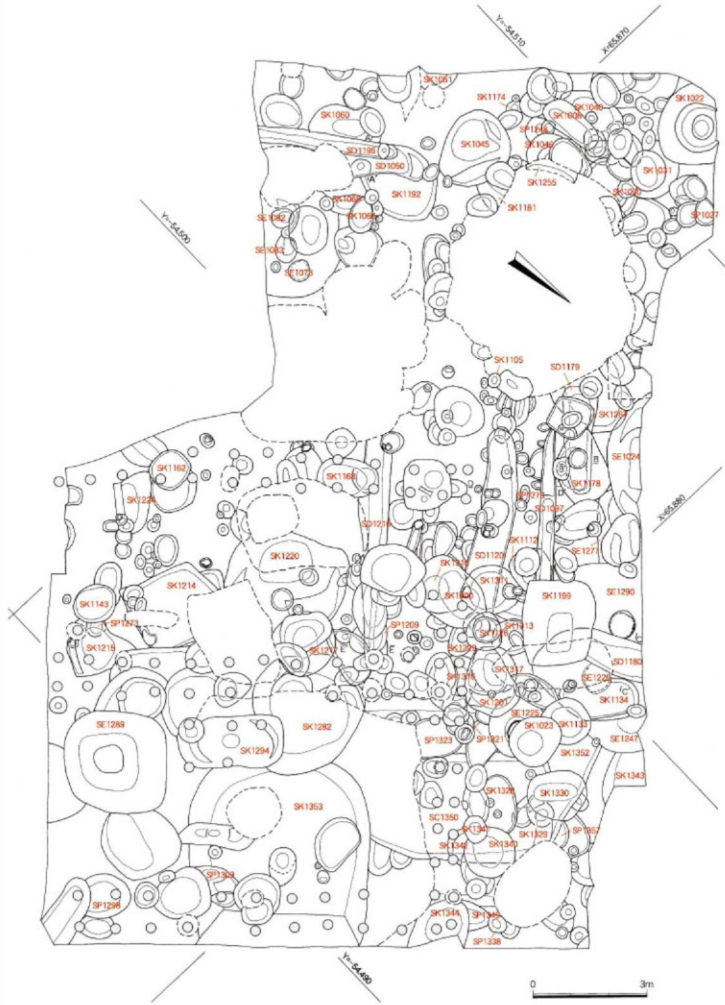


Fig.4　全体図（1/100）

Ph.1　調査区全景（北東から）

Ph.2　北東側全景（北西から）

Ph.3　北東側全景（古代）（北西から）

3．遺構と遺物

1）中世・近世の遺構と遺物

（1）井戸

SE1024（Fig.5　Ph.4）　調査区の中央北西壁面で検出した。掘り方のみの検出で、井側は調査区外へと延びる。掘り方は円形を呈しており、現存で東西方向が3.9m、深さ約2.0mを測る。東側と西側に段を持ち、中央部が深くなる。覆土は灰色砂と黄褐色砂が層状に堆積する。

出土遺物（Fig.5）　1・2は回転糸切り底の土師器の小皿である。口径はともに8.4cmを測り、外底部に板状圧痕を有する。3は須恵質土器の椀の底部片で、外底部は回転糸切りである。4は白磁碗Ⅷ類の底部片である。他に瓦質土器の鉢、格子目・縄目叩きを有する瓦、滑石片、鉄釘、鉄滓が出土する。井戸の時期は13世紀後半以降と考えられる。

SE1073（Fig.6　Ph.5）　調査区の西側南東壁で検出した。近世の井戸で、直径約60㎝の円形の井側が、2.5m以上ほぼ直線的に延びる。標高約0.5mで湧水したためそれ以上掘削できなかった。

出土遺物（Fig.7）　20・21は手持ちの砥石片である。20は部分的に敲打痕がみられる。重さは20が105.45g、21が52.92gである。他に肥前系陶磁器、鉄滓、砥石片が出土する。

SE1082（Fig.6　Ph.5・6）　調査区の西側南東壁で検出した。南側を現代の撹乱で壊され、南東側は調査区外へと延びる。平面プランは円形を呈し、東西方向約3.0m、南北2.0m以上を測る。井側は南西寄りに取り付けられ、標高1.8m付近から直径50～60㎝の楕円形の井側を確認した。高さ40㎝を測るが、木質等は確認できなかった。底面の標高は1.3mを測り、湧水はしない。

Ph.4　SE1024（南東から）

出土遺物（Fig.7）　5は口径8.8㎝を測る土師器の小皿である。外底部は回転糸切りで、板状圧痕を有する。6は瓦器椀の口縁部片で、体部は直線的に延び、口縁部でやや内湾する。口縁部は横方向のナデ、体部内外面は雑な磨きで調整される。7は白磁碗Ⅵ－2b類で体部外面下半は露胎である。8は同安窯系青磁皿の底部片である。9～12は龍泉窯系青磁で、9は碗Ⅰ－1a類、10は碗Ⅰ－2類、11は碗Ⅰ－4b類、12は碗Ⅰ－4a類である。井戸の時期は13世紀前半と考えられる。

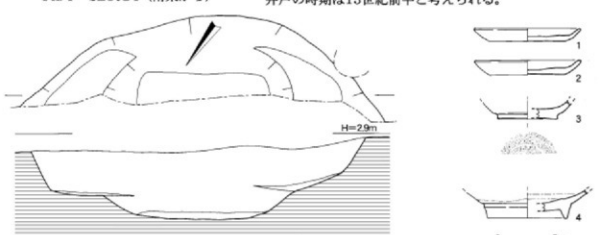
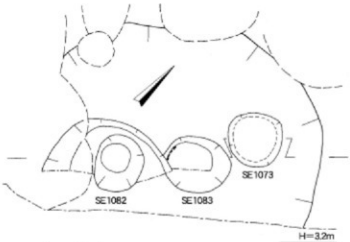


Fig.5　SE1024実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）



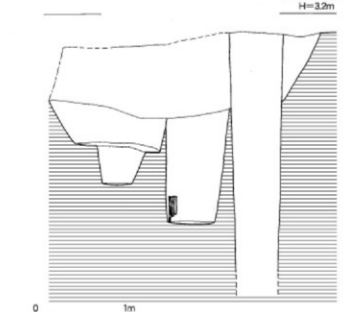
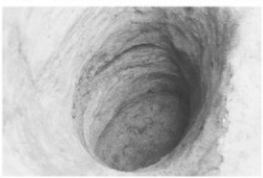


Fig.6　SE1073・1082・1083実測図（1/40）

Ph.5　SE1073・1082・1083（北西から）



Ph.6　SE1082井側検出状況（北西から）

Ph.7　SE1083井側検出状況（北から）

SE1083（Fig.6　Ph.5・7）　調査区の西側南東壁に位置し、SE1082の掘り方床面で検出した。標高2.1m付近から直径約60～70㎝の楕円形の井側を確認した。深さは約1.1mを測り、縦方向に走る木質を検出した。井側には桶を用いており、遺存状況は悪いが、高さ20㎝ほど残る。底面の標高は1.05mを測り、湧水はしなかった。

出土遺物（Fig.7）　13は回転糸切り底の土師器の坏である。口径は15.6㎝を測る。14～16は白磁である。14は皿Ⅶ－２c、15は碗Ⅵ－１類、16は碗Ⅳ類である。17～19は中国の陶磁器である。17は無釉陶器の擂鉢の口縁部片である。胎土は白色砂粒を多量に含み、器面は茶褐色を呈する。18は磁器の口縁部片である。口縁部はL字形をなし、口縁部下位に１条の沈線が巡る。胎土は白色砂粒を少量含み、色調は灰色を呈する。灰緑色を帯びた白色釉がかかり、内面に鉄絵を有する。19は陶器の盤である。黒色粒を含む灰色の胎土に化粧土が施される。露胎部の色調は褐色を呈し、口縁部は一部化粧土を拭きとる。体部内面にはオリーブ灰色の釉がかけられる。時期は12世紀後半と考えられる。

SE1225（Fig.8　Ph.8・9）　調査区の北東側で検出した。北側を近世のSK1023に削平される。

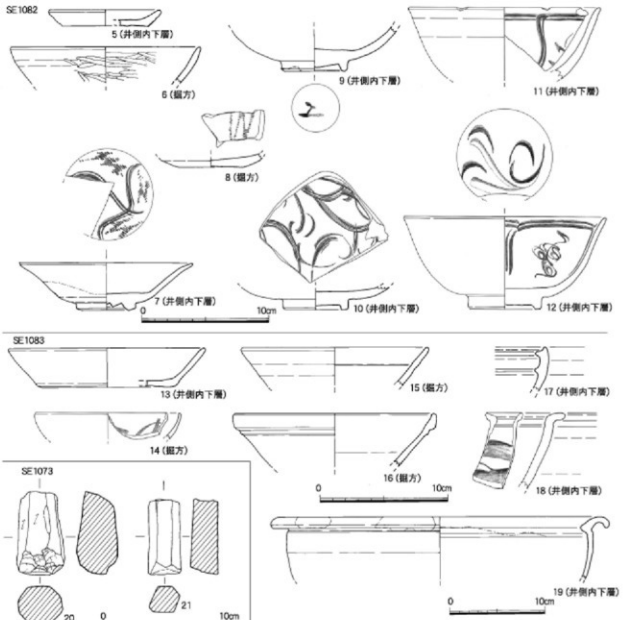
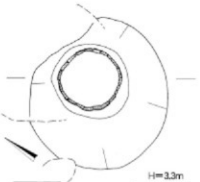
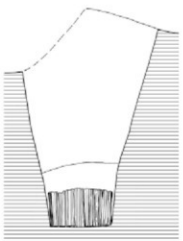


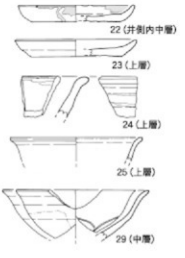
Fig.7　SE1073・1082・1083出土遺物実測図（1/3・1/4）

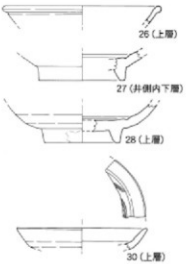
掘方は約1.6mの円形を呈する。井側はやや北東寄りに据えられ、標高1.25m付近で、幅12cm前後、厚さ約1.0cmの板材20枚を用いた木桶が高さ40cmほど遺存していた。木桶の径は約67cmである。底面の標高は0.8mを測り、湧水はしなかった。

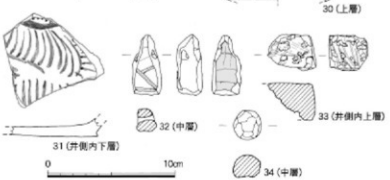
出土遺物（Fig.8）　22・23は回転糸切り底の土師器の小皿である。復元口径は22が9.2cm、23が9.6cmを測る。23の外底部は板状圧痕を有する。24は瓦器椀の口縁部片で、端部は強く外反する。内外面ともに雑な磨きで調整される。25は陶器の口縁部片で、端部は外反する。灰色の胎土に灰緑色の釉がかかる。26～28は白磁である。26は皿XI－6類、27・28はV類である。29は同安窯系青磁の小碗で、体部中位で内湾し、口縁部は緩やかに外反する。内面にはヘラ状の施文具で文様を施す。体部外面下半は露胎である。30は龍泉窯系青磁皿I－2類である。31は中国陶器の盤の底部片である。黒色、白色砂粒を含んだ灰色の胎土で、露胎部分の色調は褐色～灰褐色である。内面は灰オリーブ色



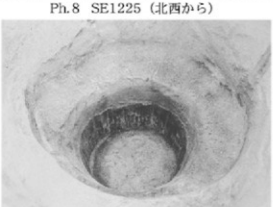








Ph. 8　SE1225（北西から）



Ph. 9　SE1225井側検出状況（南西から）

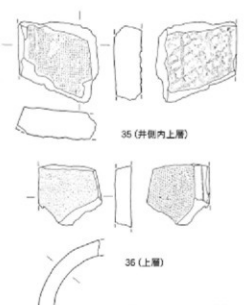


Fig. 8　SE1225実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

の釉が施され、鉄絵を有する。32は滑石石鍋を転用した石錘である。石鍋の外面にあたる部分には煤が付着する。また、内面にあたる部分に横方向・斜方向の溝を有する。横方向の溝は分割する際の擦り切り痕とも考えられる。上部には径6.0㎜前後の穿孔を両面から施す。高さ4.8㎝、厚さ2.0㎝、幅2.3㎝、重さは30.77gである。33は滑石の砥石である。石鍋転用の可能性もあるが、煤の付着はみられない。砥面として利用された部分は４面遺存し、擦痕も残る。現存で長さ2.8㎝、厚さ3.0㎝、幅3.8㎝、重さは39.23gである。34は石球である。砂岩製で、雑に整形されている。直径は2.2㎝前後を測り、重さは10.71gである。35・36は瓦である。35は瓦質の平瓦で、灰色を呈する。凸面には斜格子の叩きを施し、凹面には細かい布目が残る。36は土師質の丸瓦で、橙色を呈する。凸面は横方向のナデを施し、凹面には細かい布目が残る。37は混入品の土師器の坏である。内外面には丁寧な横方向の磨きが施される。他に越州窯系青磁、粘土塊、鉄釘が出土し、12世紀後半と考えられる。

SE1226（Fig.９　Ph.10～12）　調査区の東側北西壁で検出した。北西側は調査区外へ延び、西側をSE1290、東側をSE1247に削平される。掘方は南北方向が現存長3.0m、東西方向が2.2mを測り、平面プランは楕円形を呈する。井側はほぼ中央に据えられ、標高2.35m付近で、直径80㎝の井側を確認した。標高1.7m付近で、石が集中して検出され、そこから約25㎝下で木桶を確認した。幅12㎝前後、厚さ約2.0㎝の板材21枚を用いた木桶が高さ42㎝ほど遺存していた。木桶の径は約70㎝である。底面の標高は0.9mを測り、湧水はしなかった。

出土遺物（Fig.９・10）　38は中国陶器の壷である。遺存状況は悪く、図上で復元した。底径は17.4㎝、現存高は65.6㎝を測る。肩部に縦形耳を有し、口縁部は外方向に開き、端部は欠損する。体部上位には粘土を貼り付け、龍の文様が立体的につくられる。龍の下には凹線で波を描く。波は部分的に途切れるが、上は３条を１単位、下は２条を１単位とする。胎土は黒色粒、白色砂粒を含み、灰色を呈する。口縁部内面から体部外面は化粧土が施されており、露胎部の色調は褐色である。体部内面は灰オリーブ色を呈する。濃緑色の釉が外面は体部下半までかけられ、下半では厚く重れる。内面は口縁部中位までかけられ、下半は横方向に帯状に塗布される。39～43は土師器である。39・40は回転糸切り底の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。口径は39が8.0㎝、40が8.6㎝を測る。41・42は回転糸切り底の坏で、42は板状圧痕を有する。口径は41が12.4㎝、42が14.0㎝を測る。43は丸底坏で、口径は13.8㎝を測り、内面は研磨で調整する。井側内からの出土であるが、混入と思われる。44は須恵質土器の鉢である。45～53は白磁である。45は皿で、見込みには段を有する。46は皿Ⅲ－１類である。47は小壷の底部片で、内底部は施釉され、外面は底部付近まで釉がかかる。48は碗Ⅶ－b類、49は碗Ⅳ類、50は碗Ⅴ類、51は碗で見込み部分は釉が施されず、露胎部分は研磨されているようで、滑らかである。52・53は壷で、53は縦方向に沈線が施され、青みを帯びた釉がかかる。54・55は同安窯系青磁碗で、54は碗Ⅰ－1c類である。56～58は龍泉窯系青磁である。56は皿Ⅰ－2c類、57はⅠ－2b類、58は碗の底部片で、見込みには「金玉満堂」の印文を有する。59～64は中国陶器である。59・60は盤の底部片で、胎土は黒色粒・白色砂粒を含み、灰色を呈する。内面にオリーブ灰色の釉がかかり、鉄絵が施される。61は盤の口縁部片で、外面には化粧土が施されるが部分的に拭き取り、露胎部分は褐色に発色する。内面と一部外面に灰オリーブ色の釉がかかり、口縁部上面は拭き取る。また、口縁

Ph.10　SE1226（北西から）

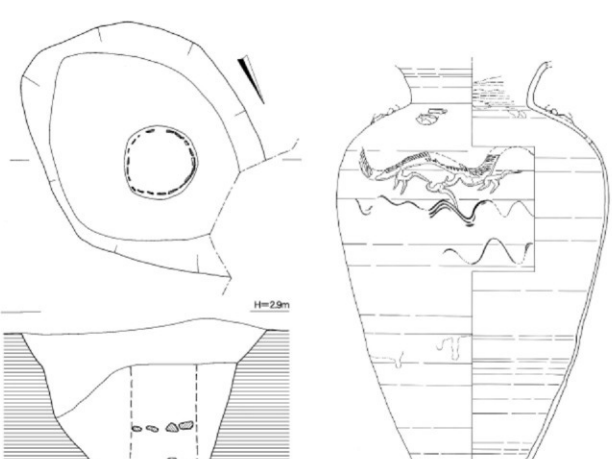
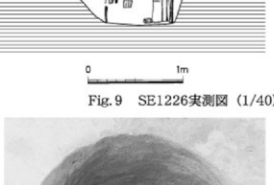
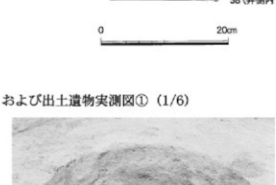


Fig.9　SE1226実測図（1/40）および出土遺物実測図①（1/6）



Ph.11　SE1226井側内石検出状況（西から）



Ph.12　SE1226 井側検出状況（北西から）

部上面には胎土目が残る。62・63は壺の口縁部片で、茶褐色の釉が施釉される。64は壺の底部片で砂粒を少量含む橙色の胎土に灰緑色の釉がかかる。65は土錘で、1/3を欠損する。重さは7.56gである。66・67は混入品である。66は須恵器の坏蓋で、天井部外面1/2に回転ヘラ削り調整を行う。67は土師器の坏で、外面は横方向の研磨、内面は横・斜方向の刷毛目調整を行ったのち、暗文を施す。他に

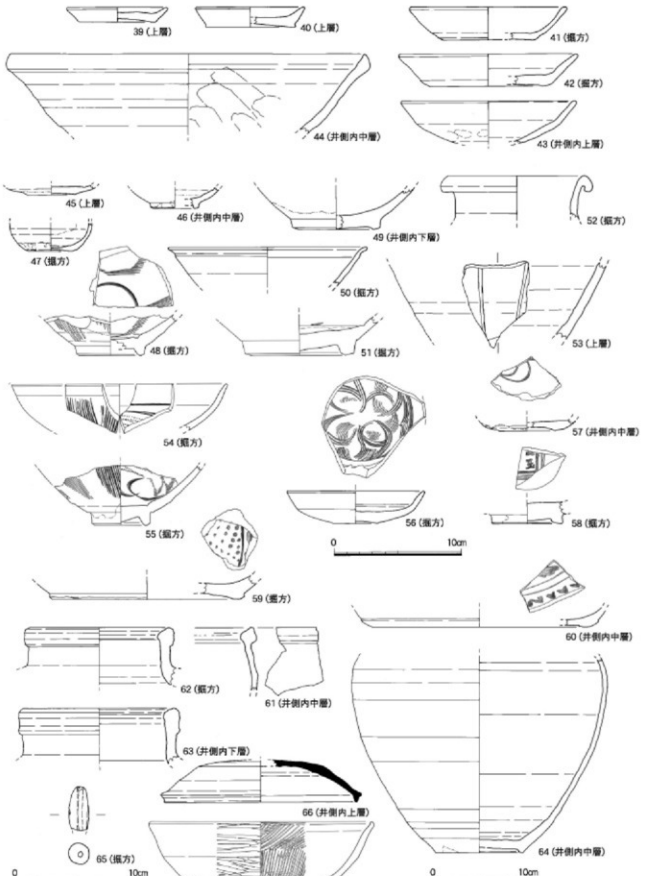


Fig.10 SE1226出土遺物実測図② (1/3・1/4)

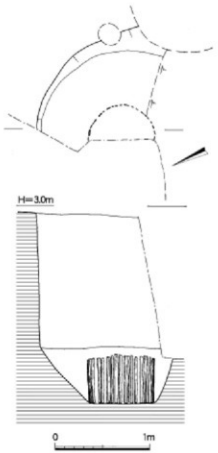


Fig.11 SE1247実測図（1/40）

Ph.13 SE1247（北西から）

Ph.14 SE1247井側検出状況（西から）

滑石片、鉄滓が出土する。井戸の時期は13世紀前半と考えられる。

SE1247（Fig.11 Ph.13・14） 調査区の東側北西壁面で検出した。北西側は調査区外へ延び、西側をSK1134に削平される。掘方は直径2.0m以上の円形の平面プランを呈すると考えられる。掘方の北東側壁面は標高1.5m付近まで直線的であるが、その下は緩やかな傾斜で底面にいたる。覆土の違いから標高1.7m付近で、直径70㎝の井側を確認した。その30㎝下から木桶を検出した。高さは50㎝を測るが、遺存状況は良好ではない。底面の標高は0.9mを測り、湧水はしなかった。

出土遺物（Fig.12） 68～71は土師器である。68は丸底坏で、口径は15.6㎝を測る。内面にコテ当て痕が残り、平滑に仕上げる。外面は部分的に指押さえが残るが、粗いナデを施す。69は回転糸切り底の坏で、外底部に板状圧痕を有する。70・71は椀で、内外面ともに研磨調整を施す。72～74は瓦器椀である。72・73は内外面に粗いヘラ磨きが施される。74は楠葉型瓦器椀で、見込みには連結輪状文が研磨で描かれ、低い逆台形の高台が付く。75は緑釉陶器の皿で、口縁端部が強く外反する。砂粒を含む灰色の胎土に濃緑色の釉がかかる。76は製塩土器の口縁部片で、内面には細かい布目が残る。77は石硯で、砂岩製である。砥面は浅く窪む。78～85は白磁である。78は皿Ⅵ－２類、79は皿Ⅷ－１a類、80は皿Ⅷ類、81は口縁部が外反し、輪花、内面には縦白堆線を有する皿である。82は小碗で、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は強く外反する。輪花を有する。83は碗Ⅴ－１a類、84は碗Ⅴ－２類、85は碗Ⅳ類である。86～90は中国の陶器である。86は天目茶碗で、灰色の胎土に黒色釉がかかり、口縁端部は褐色に発色する。87は壺の口縁部片で、灰色の胎土に褐釉と灰オリーブ色の釉がかかる。88は鉢で、底部を欠損する。体部は丸みをもち、口縁部は肥厚させ、「ハ」の字形に外側

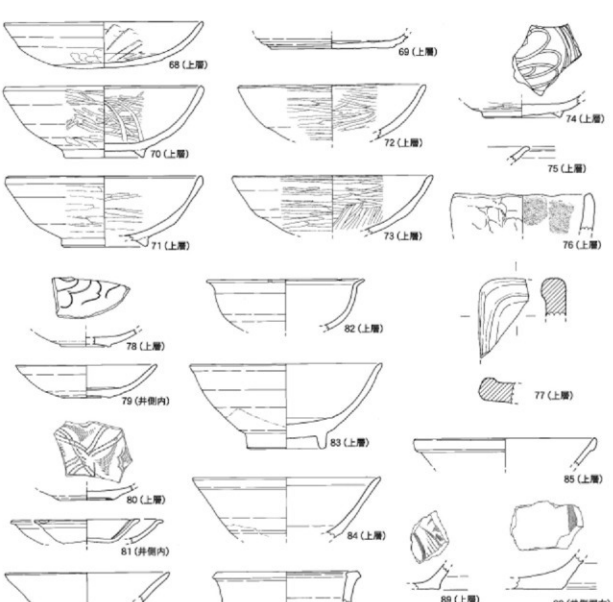
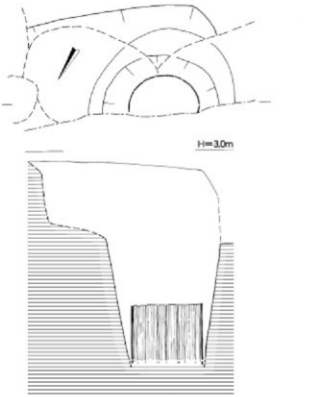


Fig.12 SE1247出土遺物実測図 (1/3・1/4)

に開く。胎土は白色砂粒を含み、色調は橙灰色を呈する。内面全体と体部外面下半にかけて光沢のある暗茶褐色の釉がかかる。口縁部付近は横方向に釉を拭き取り、露胎部は暗赤褐色を呈する。口縁部内面には目跡が残る。89・90は盤の底部片で、89は橙色、90は灰色の胎土である。ともに、内面に灰オリーブ色の釉がかかり、鉄絵を有する。91は磁器の口縁部片で、口縁部はL字状を呈する。灰色の胎土に内外面に灰オリーブ色の釉がかかり、内面に鉄絵を有する。他に滑石石鍋片1点、鉄滓4点、鍛滓、獣骨が出土する。井戸の時期は12世紀中頃と考えられる。



Ph.15　SE1277（北から）

Ph.16　SE1277井側検出状況（南西から）

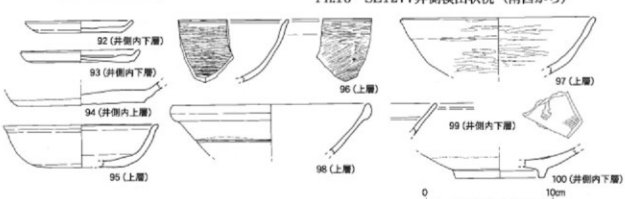


Fig.13　SE1277実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SE1277（Fig.13　Ph.15・16）　調査区の中央北西壁面で検出した。北西側は調査区外へ延び、西側はSE1024、東側はSE1290に削平される。掘方の平面プランは南西側のコーナーから方形に近い形と思われる。井側は西寄りに取り付けられ、標高1.4m付近から直径75㎝の木桶を確認した。幅12㎝前後、厚さ約0.5㎝、現存で板材11枚を確認した。高さは60㎝を測る。標高0.8mまで掘削したが、土砂崩壊のため、深さを確認できなかった。

出土遺物（Fig.13）　92～95は土師器である。92～94は回転糸切り底で、外底部に板状圧痕を有する。92・93は小皿で口径は8.6㎝、9.4㎝である。95は回転ヘラ切り底の坏で、口径は12.2㎝、器高3.4㎝を測る。口縁端部は凹状に窪む。96は楠葉型の黒色土器B類である。内外面に密な研磨調整を施し、口縁内面の端部付近に沈線を巡らす。97は瓦器椀で、内外面に粗な磨きを施す。98・99は白磁で、98は碗Ⅳ類、99は碗Ⅴ類である。100は越州窯系青磁碗の底部片である。他に中国陶器片、鉄滓４点が出土する。混入品がみられるが、井戸の時期は12世紀中頃から後半と考えられる。

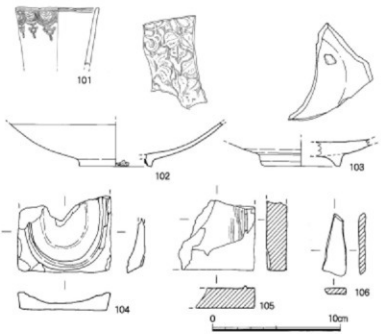
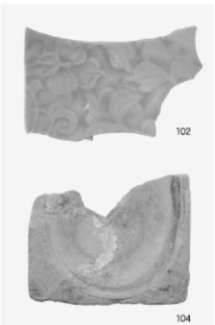


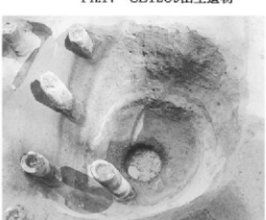
Fig.14 SE1289出土遺物実測図 (1/3)



Ph.17 SE1289出土遺物

SE1289 (Fig.4 Ph.18) 調査区の南東側で検出した。掘方は一辺約2.7mの隅丸方形を呈し、井側をほぼ中央に据える。井側は瓦を用いる。井戸瓦は厚さ2.7㎝、幅23㎝を測り、長さは不明である。標高0.5mで湧水したため、それ以上掘削できなかった。

出土遺物 (Fig.14 Ph.17) 101は肥前系陶磁器の碗である。102は青磁の底部片で、精良な灰色の胎土にオリーブ色の釉が厚くかかる。内面には草花文が描かれ、高台内には胎土目が残る。103は朝鮮時代の硬質白磁である。見込みには胎土目が残る。104・105は硯である。104は陶硯で、方形を呈するが、砥面は円形である。105は頁岩製である。ともに砥面には墨が残る。106は細粒砂岩の手持ち砥石である。他に鉄滓が多く出土する。また、哺乳類の骨で作られた櫛 (付編1-877) が出土する。



Ph.18 SE1289 (北西から)

SE1290 (Fig.15 Ph.19・20) 調査区の東側北西壁面で検出した。西側をSE1277、南側をSK1199に削平される。西側の掘方は緩やかな傾斜で掘削されており、井側へ至る。標高1.35m付近で、直径68㎝の掘り込みを確認した。その内部には幅10㎝前後、厚さ約1.2㎝の板材22枚を用いた木桶が高さ77㎝ほど遺存していた。木桶の径は約65㎝である。底面の標高は0.7mを測り、湧水はしない。

出土遺物 (Fig.15) 107は回転糸切り底の土師器の小皿で、外底部には板状圧痕を有する。口径は8.6㎝を測る。108は白磁皿Ⅲ類、109は同安窯系青磁碗である。110は中国陶器の底部片で、高台畳付は蛇ノ目状に削り出される。褐色粒、白色粒を含む紫灰色の胎土に灰緑色釉が全面施釉される。畳付と外底部内には胎土目が残る。111は瓦玉である。両面ともに摩滅するが、凸面はナデ、凹面には細かい布目が残る。重さは8.30gである。112は粘板岩製の手持ち砥石である。砥面にはわずかであるが、擦痕が残る。重さは66.93gである。113は瓦質の平瓦である。灰色を呈し、凸面は縄目叩きを施した後、部分的にナデで調整する。凹面には細かい布目が残る。他に滑石片、鉄滓、羽口が出土

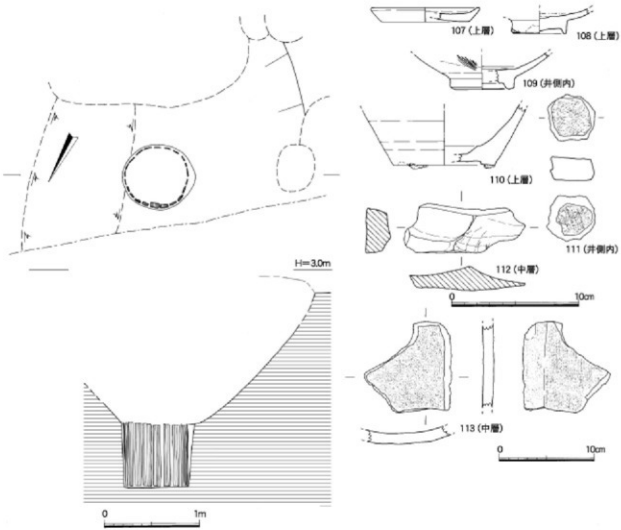


Fig.15 SE1290実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

Ph.19 SE1290（南東から）

Ph.20 SE1290井側検出状況（南東から）

する。井戸の時期は13世紀前半と考えられる。

（2）溝

SD1050（Fig.16 Ph.21） 調査区の南西側で検出した。南側は調査区外へ延び、同方向に走るSD1195と現代の撹乱に削平される。現存長4.5m、幅約1.0mを測り、南北方向（N－28° －W）に走る。断面は逆台形を呈し、深さは12～17㎝を測る。溝の底面は北西側に段をもつが、ほぼ平坦である。

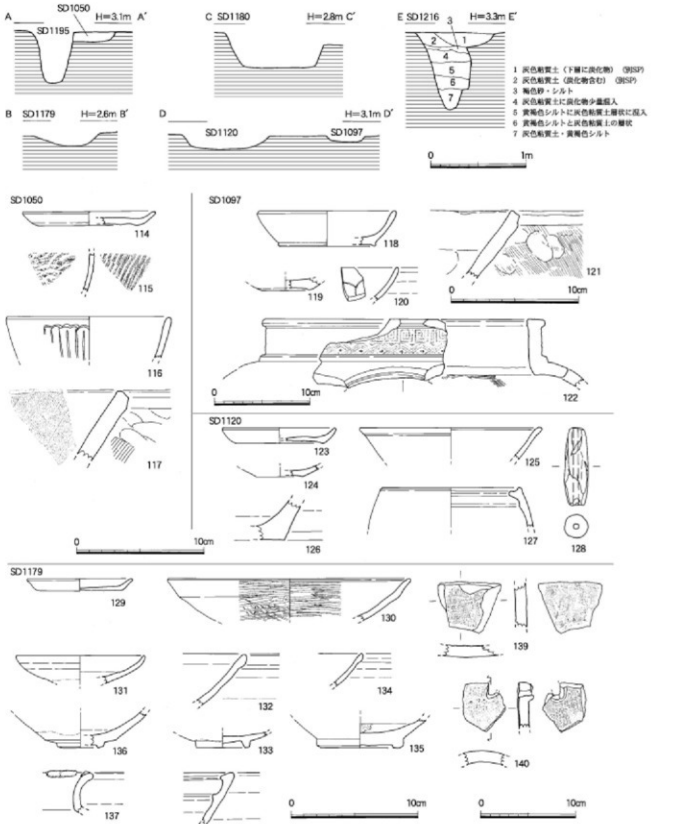


Fig.16 SD1050・1097・1120・1179・1180・1195・1216実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

Ph.21　SD1050（西から）

Ph.22　SD1097・1120（北西から）

Ph.23　SD1180（南から）

Ph.24　SD1216（北東から）

覆土は灰色土を主体とし、水が流れた痕跡はうかがえない。

出土遺物（Fig.16）　114は回転糸切り底の土師器の小皿である。口径は10.6㎝を測る。115は須恵器の胴部片である。小豆色の胎土で、色調は灰色を呈する。116は龍泉窯系青磁碗Ⅳ類、117は瓦質土器の鉢である。他に鉄滓が出土する。溝の時期は15世紀後半と考えられる。

SD1097（Fig.16　Ph.22）　調査区の中央、北西側で検出した。西側は現代の撹乱、東側はSK1199に削平される。現存長4.0m、幅約1.0mを測り、東西方向（N－53°－E）に走る。断面は逆台形を呈し、深さは6.0～14.0㎝を測る。溝の底面は東側が一段低くなっており、約4.0㎝深くなる。覆土は灰色土を主体とし、水の流れた痕跡はうかがえない。

出土遺物（Fig.16）　118は回転糸切り底の土師器の坏である。口径は10.8㎝を測る。119は白磁皿で、外底部の釉は掻き取る。120は白磁小碗で、内面には花文が細線で描かれる。121は土師質土器の鉢、122は瓦質土器の風炉である。時期は14～15世紀と考えられる。

SD1120（Fig16　Ph.22）　調査区の南西側、SD1097の南側に位置する。東側は多数の土坑に削平される。現存長4.9m、幅約0.9mを測り、東西方向（N－63°－E）に走る。溝は直線的に走らず、やや弧を描く。断面は逆台形状を呈し、深さは13.0～17.0㎝を測る。溝の底面は西側にやや傾斜する。覆土は灰色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.16）　123は回転糸切り底の土師器の小皿である。口径は9.0㎝を測る。124は白磁皿Ⅵ類、125は白磁碗Ⅴ類である。126・127は中国陶器で、126は黄灰色～灰緑色の釉、127は褐釉がかかる。128は土錘で、20.70gを量る。以上の出土遺物から溝の時期は12世紀後半と考えられる。

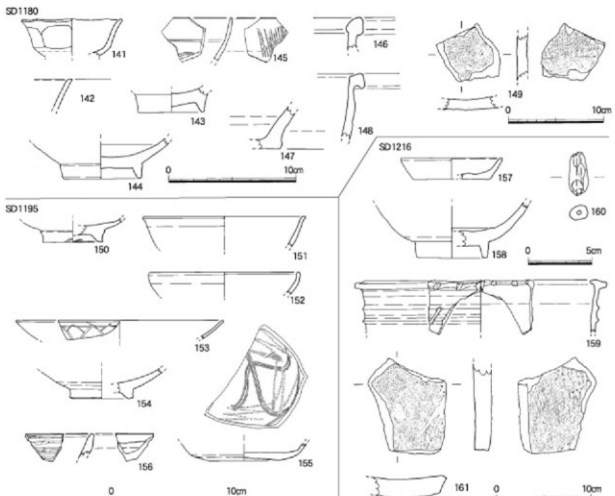


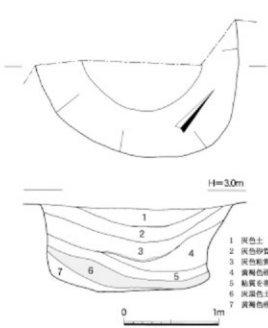
Fig.17 SD1180・1195・1216出土遺物実測図（1/3・1/4）

SD1179（Fig.16） 調査区の南西側、SD1097の北側に位置する。上部をSK1267等の土坑に削平されており、底面部分のみ遺存する状況である。長さ2.8m、幅約75㎝を測り、東西方向（N－49°－E）に走る。断面は「U」字状を呈し、深さは13～30㎝を測る。溝の底面は東側にやや傾斜する。覆土は黄褐色砂に灰褐色土がブロック状に混入する。

出土遺物（Fig.16） 129は回転糸切り底の土師器の小皿である。復元口径は8.4cmを測る。130は楠葉型瓦器椀である。131～135は白磁で、131は皿Ⅷ－1a類、132・133・135は碗Ⅳ類、134はXI－1類である。136～138は陶器で、136は天目茶碗、137は灰緑色の釉がかかり、口縁部内面に胎土目が残る。138は無釉陶器の鉢である。139・140は瓦質の平瓦と丸瓦で、凸面はナデで調整し、凹面には布目が残る。他にウマの歯が出土し、時期は12世紀後半から13世紀前半と考えられる。

SD1180（Fig.16 Ph.23） 調査区の中央、北西壁で検出した。北側は調査区外へ延び、南側はSK1199に削平される。現存長は1.5mである。幅は約1.0mを測り、南北方向（N－20°－W）に走る。断面は逆台形を呈し、深さは35～40㎝を測る。溝の底面は南西側にやや傾斜している。覆土は灰色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.17） 141は明代の白磁で、多角坏である。142～144は白磁碗Ⅴ類、145は同安窯系青磁碗Ⅰ－1類である。146～148は陶器で、146は茶褐色、147は内面に灰オリーブ色、148は化粧土を施した後、灰オリーブ色の釉がかけられる。149は瓦質の平瓦で、凸面は縄目叩きを施し、凹面には細かい布目が残る。他に回転糸切り底の土師器が出土する。時期は15世紀後半と考えられる。



Ph.25　SK1022（南東から）

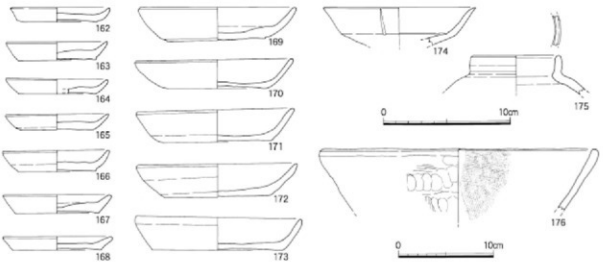


Fig.18　SK1022実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

SD1195（Fig.16）　調査区の南西側で検出した。南側は調査区外へ延びる。現存長4.0m、幅45cmを測り、南北方向（N－28°－W）に走る。断面は「U」字状を呈し、深さは54cmを測る。溝の底面は南側に傾斜する。覆土は上層に灰褐色砂質土が堆積し、その下は黄褐色砂質土と灰色砂が細かな互層を呈する。

出土遺物（Fig.17）　150は朝鮮時代の白磁である。151・152は施釉陶器の碗の口縁部片である。151は白色粒・黒色粒を含む胎土に灰オリーブ色の釉がかかる。152は粘性を帯びた胎土に灰オリーブ色の釉がかかる。153は白磁皿で、外面にヘラで蓮弁が描かれる。154は同安窯系青磁碗、155は同安窯系青磁皿Ⅰ－２ｂ類である。156は柚葉型の瓦器椀の口縁部片である。他に釘が２点出土する。溝の時期は古いものが多く混入するが、16世紀と考えられる。

SD1216（Fig.16　Ph.24）　調査区の中央部に位置する。南西側は現代の撹乱、北東側は土坑に削平される。北側を走るSD1097とほぼ並行しており、SD1097との間隔は4.5mを測る。現存長3.0m、幅約80cmを測り、東西方向（N－53°－E）に走る。断面は「U」字状を呈し、深さは80cmである。溝の底面は北東側に傾斜する。覆土は粘質土、シルト、砂が水平堆積し、上層には炭化物が混入する。

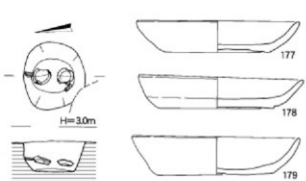
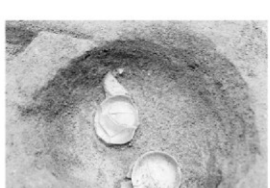


Fig.19 SK1030実測図（1/30）
および出土遺物実測図（1/3）



Ph.26 SK1030（西から）

また、3・4層からは白磁等が出土するが、7層からは須恵器のみの出土であるため、2本の溝が切り合っている可能性もある。

出土遺物（Fig.17） 157は回転糸切り底の土師器の小皿である。158は白磁碗V類、159は施釉陶器の口縁部片である。白色砂粒を多く含む灰色の胎土に化粧土が施される。口縁部上面には貝目が残る。160は土錘で、重さは5.40gを量る。161は瓦質の平瓦で、凸面は縄目叩きを施した後、部分的にナデで調整する。凹面には細かい布目が残る。溝の時期は13世紀後半と考えられる。

（3）土坑

SK1022（Fig.18 Ph.25） 調査区の西側北西壁面に位置する。北側は調査区外へ延びる。平面プランは円形を呈し、東西方向の径は2.15m、深さ80cmを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は灰色土、黄褐色砂を主体とし、2層と3層には焼土が薄く堆積する。また、6層は炭化物と焼土を多量に含む。上層からは土師器が多く出土する。

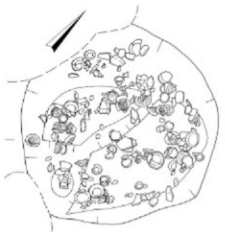
出土遺物（Fig.18） 162～173は回転糸切り底の土師器である。162～168は小皿で、口径は7.9～8.6cmを測り、162・163・167は外底部に板状圧痕を有する。164は灰橙色、他は明橙色を呈する。169～173は坏で、口径は12.2～13.1cmを測り、外底部に板状圧痕を有し、橙色～明橙色を呈する。174は白磁皿で、外面には篦押圧縦線がある。175は中国陶器の壺の口縁部片である。小豆色の胎土に灰褐色の釉がかかる。口縁部上面には目跡が残る。176は瓦質土器の擂鉢である。以上の出土遺物から土坑の時期は13世紀中頃から後半と考えられる。

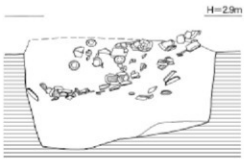
SK1030（Fig.19 Ph.26） 調査区の西側に位置し、西側を一部他の土坑に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径は53cm、短径47cm、深さ25cmを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は灰色土を主体とする。中層からは土師器の坏と皿が出土する。

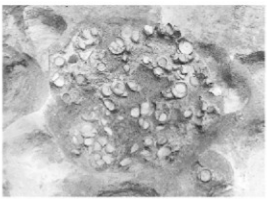
出土遺物（Fig.19） 177～179は回転糸切り底の土師器の坏である。口径は12.8～13.2cmを測る。胎土には金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、177は明橙色、他は橙色を呈する。他に青磁片が出土し、13世紀中頃と考えられる。SK1031と時期に齟齬が出るため切り合いを間違えた可能性が大きい。

SK1031（Fig.20 Ph.27・28） 調査区の西側に位置し、一部他の土坑に削平される。平面プランは円形を呈し、直径は1.55mを測る。深さは60～85cmで、底面は西側が一段深くなっている。覆土は灰色土を主体とし、炭化物が少量出土する。土師器が大量に投棄されており、完形品も見られる。遺物は北東側上位から南西側下位に出土する状況がうかがえる。

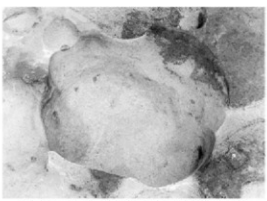
出土遺物（Fig.20・21 Ph.29） 180～213は回転糸切り底の小皿である。口径に比して底径が小さく、高さがあり、底部と体部の境が明瞭なもの（180～187）と前者に比べて底径が大きく、低



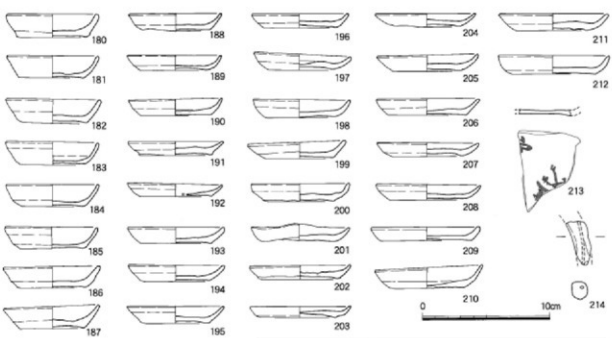




Ph.27　SK1031遺物出土状況（東から）



Ph.28　SK1031完掘状況（南東から）



Ph.29　SK1031出土遺物

Fig.20　SK1031実測図（1/30）および出土遺物実測図①（1/3・1/1）

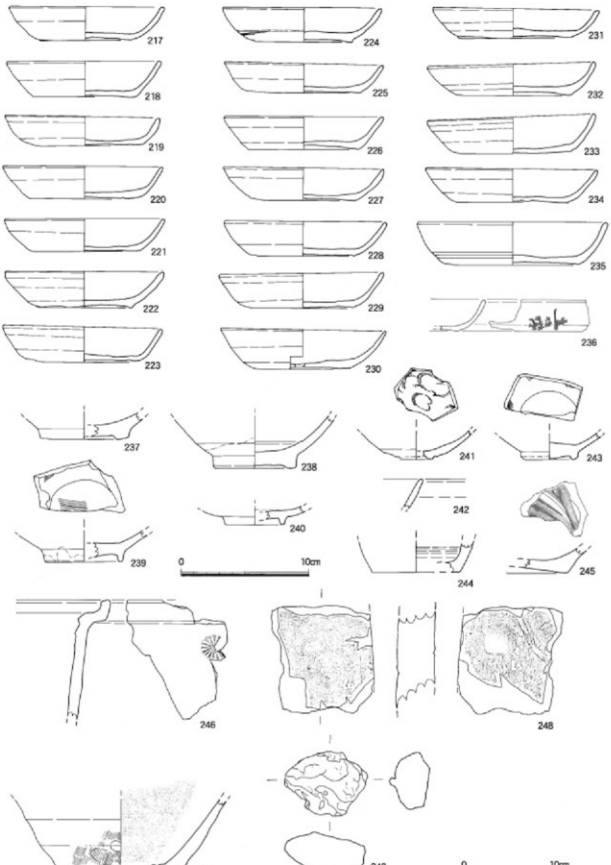


Fig.21 SK1031出土遺物実測図② (1/3・1/4)

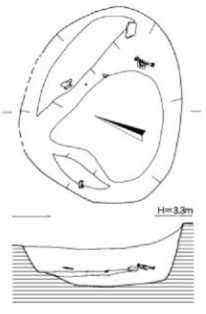
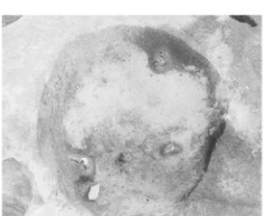


Fig.22 SK1045実測図（1/40）



Ph.30 SK1045（西から）

Ph.31 SK1045遺物出土状況（西から）

いもの（188～212）に分類できる。前者は口径7.0～7.4㎝、底径4.9～5.55㎝、高さ1.65～1.95㎝を測る。183～185の色調は淡橙色を呈し、胎土は精良で少量の赤褐色粒・金雲母を含み、器壁は薄い。他は橙色を呈し、胎土に白色砂粒、赤褐色粒、大量の金雲母を含む。182～185以外の外底部には板状圧痕が残る。後者は口径7.15～8.6㎝、底径5.0～7.1㎝、高さ0.8～1.5㎝を測る。底部と体部の境は不明瞭なものが多く、器形も歪むものが多い。また、体部は底部からそのまま外方へ引き延ばしたものと体部中位でわずかに内湾するものがある。胎土には白色砂粒、赤褐色粒、金雲母を含み、色調は明橙色、橙色を呈する。199・210・212の外底部には板状圧痕が残る。213の外底部には墨書が残る。214は土製品で、1.5㎜の穿孔を有する。215は北宋代の銅銭、「景徳元寶」（初鋳年：1005年）、216は北宋代の銅銭、「元豊通寶」（初鋳年：1078年）である。217～236は回転糸切り底の土師器の坏である。218～223・229・232～234は外底部に板状圧痕が残る。235は大型の坏で、口径14.6㎝、底径10.4㎝、高さ3.4㎝を測る。他は口径11.9～13.2㎝、底径7.2～9.1㎝、高さ2.25～3.2㎝を測る。胎土には白色砂粒、赤褐色粒、金雲母を含み、色調は明橙色～橙色を呈する。230は比較的精良な胎土で、底部中央に焼成前の穿孔をもつ。231は口縁部内外面に煤が付着し、灯明皿として使用する。236は体部外面に墨書を有する。237～240は白磁で、237・238は碗Ⅳ類、239は碗Ⅵ類、240は碗Ⅷ－１類である。241・242は龍泉窯系青磁碗、243は同安窯系青磁碗である。244・245は陶器で、244は無釉壺の底部片、245は盤の底部片で、内面には鉄絵を描く。246は瓦質土器の火舎で、外面には菊文がスタンプされる。247は瓦質土器の鉢の底部片である。248は瓦塼で、強いナデで調整される。249は粘土塊で、スサを多く混入する。重さは138.83gである。以上の出土遺物から土坑の時期は14世紀と考えられる。

SK1045（Fig.22 Ph.30・31） 調査区の西側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径は2.07m、短径1.67mを測る。深さ53㎝を測り、北東側と南東側に段をもつ。覆土は灰色土、灰色砂を主体とする。中位から獣骨、土師器、白磁が出土する。

出土遺物（Fig.23） 250～253は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。口径は

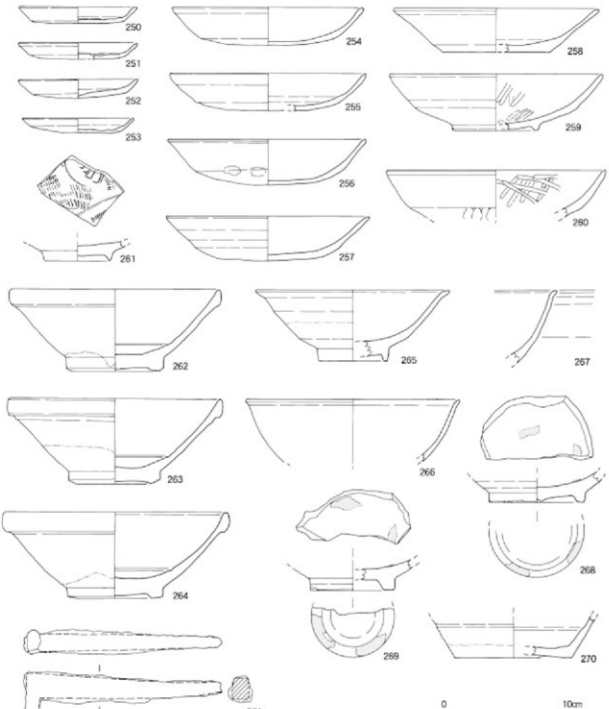


Fig.23 SK1045出土遺物実測図（1/3）

9.0～9.3㎝を測る。254～258は土師器の坏で、口径は15.0～15.9㎝を測る。外底部は254～257が回転ヘラ切り、258は回転糸切りで、254・256・257には板状圧痕が認められる。259・260は瓦器椀で、内面は粗い磨きで調整する。261は青白磁の皿で、見込みにはヘラで文様が描かれる。262～266は白磁で、262～264は碗Ⅳ－1a類、265は碗Ⅴ－2a類、266は碗Ⅴ類である。267～269は越州窯系青磁碗で、268・269はⅢ類である。270は陶器の壺の底部片で、黒色砂粒を含む灰色の胎土に灰オリーブ色の釉がかかる。271は大型の釘で、長さ15.5㎝を測る。他に獣骨が出土する。遺構の時期は出土遺物から12世紀前半と考えられる。

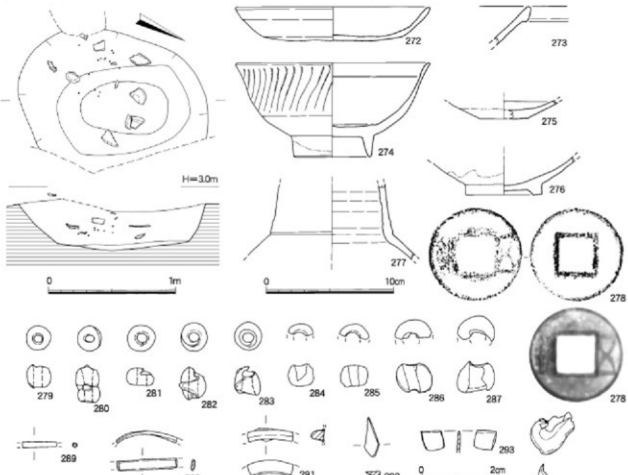


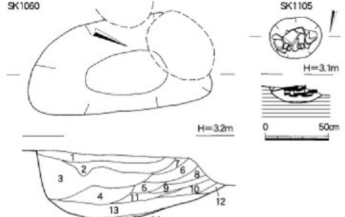
Fig.24 SK1046実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3・1/1）

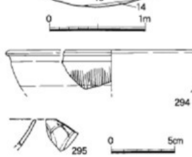
Ph.32 SK1046（西から）

Ph.33 SK1046遺物出土状況（西から）

SK1046（Fig.24 Ph.32・33） 調査区の西側に位置し、東側を現代の撹乱に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径は1.5m、短径1.1＋αmを測る。深さ40cmを測り、中央部が浅く窪む。覆土は灰色土、灰色砂を主体とする。ガラス玉、ガラス片が西側に集中して出土する。

出土遺物（Fig.24 巻頭図版） 272は回転ヘラ切り底の土師器の坏で、口径は15.0cmを測る。273～276は白磁で、273・276は碗Ⅳ類、274は碗Ⅴ－２ｂ類、275は皿Ⅵ－１ｂ類である。277は陶器の壺の頸部片で、砂粒を含んだ灰色の胎土に、灰オリーブ色の釉がかかるが、熱を受け、釉がとんでいる。278は五銖銭である。錆が進んでおり、文字は不鮮明である。279～293はガラス製品である。





1 灰褐色土・黄色砂（炭化物・焼土少量混入）
2 灰色粘質土・黄褐色砂質土（炭化物少量混入）
3 焼土に黄褐色砂と灰色土混入
4 明黄色砂
5 黄色砂・灰黒色シルト
6 灰色土・黄色砂質土に焼土・炭化物少量混入
7 黄褐色砂質土・灰色土に焼土多量に混入
8 黄褐色砂に焼土少量混入
9 灰色土・黄褐色砂質土に焼土・炭化物少量混入
10 灰色土に黄褐色砂・焼土混入
11 黄褐色砂質土
12 黄褐色砂質土に灰色土混入
13 黄褐色砂に灰色土混入
14 灰色粘質土

Fig.25　SK1060・1105実測図（1/40・1/30）および出土遺物実測図（1/3）

Ph.34　SK1105（南から）

分析資料No.		ラベル内容	資料名	報告書Fig	色　調	観　察　所　見	分　析　所　見	種　別
BS	1	SK-1046 R1	小玉	24-279	緑-透明	気泡や介在物が孔を中心に螺旋状に回ることから、巻き付けによる成形と考えられる。	珪素(Si)、鉛(Pb)が非常に強く、次いでカリウム(K)、銅(Cu)のピークが明瞭に認められる。他に鉄(Fe)も有り。	カリウム鉛ガラス
BS	2	SK-1046 R2	小玉片		淡青-半透明	表面に残るガラスの流れた跡や形状から、巻き付けによる成形法と考えられる。孔内には、黒銅色の物質が比較的厚く付着。芯材の離型剤の可能性。	Si,Pbが非常に強く、次いでK、Cuのピークが明瞭に認められる。他にFeも有り。孔内の黒褐色部分は、Feが極端に強く表れる。	カリウム鉛ガラス
BS	3	SK-1046 R3	小玉片		淡青-半透明	形状から見て巻き付けと推定。破断面から見える孔には、淡黄～淡褐色の付着物が見られる(焼土または芯材の離型剤の可能性有り)	Si,Pbが非常に強く、次いでK、Cuのピークが明瞭に認められる。他にFeも有り。孔内の淡褐色部分は、カルシウム(Ca)が強く表れる。	カリウム鉛ガラス
BS	4	SK-1046 R4	小玉片		淡青-半透明	気泡はほとんど無く流れは認めないが、形状等より巻き付けによる成形と考えられる。	Si,Pbが非常に強く、次いでKが明瞭。他にCu,Feもわずかに有り。	カリウム鉛ガラス
BS	5	SK-1046 R5	小玉片		(淡)青-半透明	風化が進み表面に微細な亀甲状の亀裂が多数はいる。巻き付けと考えられるが明確な根拠は無い。小口片面に平らな部分に押し当てたような痕跡有り。	Si,Pbが非常に強く、次いでKが明瞭。他にCu,Feもわずかに有り。	カリウム鉛ガラス
BS	6	SK-1046 R6	小玉片	24-286	(淡)青-半透明	気泡が少なく透明度も低いため流れは見えないが、表面に残るガラスの流れた跡や形状から、巻き付けによる成形法と推測。	Si,Pbが非常に強く、次いでK、Cuのピークが明瞭に認められる。他にFeも有り。	カリウム鉛ガラス
BS	7	SK-1046 R7	小玉	24-283	(淡)青-半透明	ガラスの流れや形状から、巻き付けにより成形されたと考えられる。	Si,Pbが非常に強く、次いでCaのピークが明瞭に認められる。他にK,Cu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス(風化)
BS	8	SK-1046 R8	小玉失敗品	24-288	(淡)青-半透明	小玉製作上の失敗品と見られる。孔などが半開きに角状に突出。一部にNo.3などに見られる黒銅色の付着物が棒状のものを当てたような形で付着。	Si,Pbが非常に強く、次いでCaのピークが明瞭に認められる。他にK,Cu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス(風化)
BS	9	SK-1046 R9	連玉	24-280	淡青-半透明	表面に残るガラスの流れた跡や形状から、巻き付けによる成形法と推測。	Si,Pbが非常に強く、次いでKが明瞭。他にCu,Feもわずかに有り。	カリウム鉛ガラス
BS	10	SK-1046 R10	小玉	24-281	(淡)青-透明	気泡の流れは認めないが、形状より巻き付けによる成形と考えられる。表面には風化により線状の亀裂が入る。	Si,Pb,Caが非常に強く表れる。他にK,Cu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス
BS	11	SK-1046 R11	小玉片		(淡)青-半透明	表面に残るガラスの流れた跡や形状から、巻き付けによる成形法と推測。孔内には、黒銅色の物質が比較的厚く付着。芯材の離型剤の可能性。	Si,Pbが非常に強く、次いでK、Cuのピークが明瞭に認められる。他にFeも有り。孔内の黒褐色部分は、Feが極端に強く表れる。	カリウム鉛ガラス
BS	12	SK-1046 R12	小玉	24-282	淡青-半透明	ガラスの流れや形状から、巻き付けにより成形されたと考えられる。	Si,Pb,Caが非常に強く表れる。他に、K,Cu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス
BS	13	SK-1046 R22	不明片	24-292	(淡)青-半透明	比較的大型の[illegible]になると見られる。玉類ではない。	Si,Pbが非常に強く、次いでKが明瞭。他にCu,Feもわずかに有り。	カリウム鉛ガラス
BS	14	SK-1046 R23	小玉片	24-284	(淡)青-半透明	形状から見て巻き付けと推定。破断面から見える孔には、淡黄～淡褐色の付着物が見られる(焼土または芯材の離型剤の可能性有り)	Si,Pbが非常に強く、次いでKが明瞭。他にCu,Feもわずかに有り。	カリウム鉛ガラス
BS	15	SK-1046 R24	小玉片	24-285	淡青-半透明	形状から見て巻き付けと推定。破断面から見える孔には、淡黄～淡褐色の付着物が見られる(焼土または芯材の離型剤の可能性有り)	Si,Pbが非常に強く、次いでKが明瞭に認められる。他に、Cu,Feも有り。孔内の淡褐色部分はCaが強く表れる。	カリウム鉛ガラス
BS	16	SK-1046 R25	小玉片		淡青-半透明	残存範囲は少ないが、巻き付けにより成形された小玉片と見られる。	Si,Pbが非常に強く表れる。他にK,Cu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス
BS	17	SK-1046 R26	小玉片	24-287	淡青-半透明	ガラスの流れや形状から、巻き付けにより成形されたと考えられる。	Si,Pbが非常に強く、次いでCa,Kのピークが明瞭に認められる。他にCu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス(風化)
BS	18	SK-1046 R27	小玉片		淡青-半透明	表面に残るガラスの流れた跡から、巻き付けによる成形法と推測。	Si,Pbが非常に強く、次いでKが明瞭に認められる。他に、Cu,Feも有り。孔内の淡褐色部分はCaが強く表れる。	カリウム鉛ガラス
BS	19	SK-1192	容器?片	30-357	青-不透明	基質は青色であるが、所々斑状に淡黄色になる。風化によるものか。	青色の未風化部分ではSiが非常に強く、次いでCa,Pb,Cuのピークが明瞭に認められる。他にK,Feも有り。白色の風化部分ではSi以外のピークが相対的に上昇。	カリウム鉛ガラス(風化)
BS	20	SK-1220	丸玉片	37-443	青-半透明	整った球体に復元されるが、気泡の流れが認めず表面にも製作痕跡を示す情報は見られない。	Siが非常に強く、次いでPb,Kが明瞭に認められる。他に、Cu,Al,Feも有り。	カリウム鉛ガラス
RS	1	SK-1046 1層フルイ	容器片?	24-291	淡黄-透明	透明度は比較的高いが、気泡は少なく散在。	Si,Pbが非常に強く、次いでKのピークが明瞭に認められる。他、微細なFeも有り。	カリウム鉛ガラス
RS	2	SK-1046 1層フルイ	小玉片		(淡)青-半透明	形状や表面の痕跡から見て巻き付けと推定。	Si,Pbが非常に強く、次いでKのピークが明瞭に認められる。他、微細なCu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス
RS	3	SK-1046 1層フルイ	小玉片		(淡)青-半透明	表面に残るガラスの流れた跡や形状から、巻き付けによる成形法と推測。孔内には、黒銅色の物質が付着。芯材の離型剤の可能性。	Si,Pbが非常に強く、次いでKのピークが明瞭に認められる。他、微細なCu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス
RS	4	SK-1046 1層フルイ	小玉片一括		(淡)青-半透明	いずれの破片も、形状や外面の痕跡などから巻き付けによる成形と推測される。	Si,Pbが非常に強く、次いでKのピークが明瞭に認められる。他、微細なCu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス
RS	5	SK-1046 1層フルイ	小玉片一括		淡青-半透明	小片のため詳細は不明であるが、14や15とよく似た傾向を示す。	Si,Pbが非常に強く、次いでK、Caのピークが認められる。他、微細なCu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス(風化)
RS	6	SK-1046 1層フルイ	帯・細棒状		淡青-半透明	幅1.35mm、厚さ0.35mm程の帯状のものや、大きさ0.3mm程度の微細な棒状のものなど用途不明品を含む。	Si,Pbが非常に強く、次いでKのピークが明瞭に認められる。他、微細なCu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス
RS	7	SK-1046 1層フルイ	細丸棒	24-289	淡青-半透明	径1.2mm前後を計る。用途不明の断面形丸またはカマボコ状をした棒状資料。	Si,Pbが非常に強く、次いでK、Caのピークが認められる。他Cu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス(風化)
RS	8	SK-1046 1層フルイ	薄板状	24-293	淡青-半透明	幅広の板状で気泡が一定方向に流れる。表面は凸凹して滑らかではない。	Si,Pbが非常に強く、次いでKのピークが明瞭に認められる。他、微細なCu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス
RS	9	SK-1046 1層フルイ	帯状	24-290	淡青-半透明	幅2mm前後、厚さ0.7mm前後の帯状を呈する。用途不明資料。湾曲したものもある。	Si,Pbが非常に強く、次いでK、Caのピークが認められる。他Cu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス(風化)
RS	10	SK-1046 1層フルイ	不明小片		淡青-半透明	板状の小片。風化のためか曇っている。片面には黒色の付着物。	Caが最も強く、次にSi,Pbが有り。他、K,Cu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス(風化)
RS	11	SK-1046 2層フルイ	帯状		淡青-半透明	幅2mm前後、厚さ0.3mm前後の帯状を呈する。断面は飛行機の翼の断面とよく似た形状。	Si,Pbが非常に強く、次いでK、Caのピークが認められる。他Cu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス
RS	12	SK-1046 2層フルイ	小玉片?		淡青-半透明	他の小玉と同じ様な玉の破片と見られるが、細片のため詳細不明。	Si,Pbが非常に強く、次いでCa,Kのピークが認められる。他Cu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス(風化)
RS	13	SK-1046 2層フルイ	薄板状		淡黄緑-半透明	細片のため詳細不明。	Si,Pbが非常に強く、次いでK、Caのピークが認められる。他Cu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス
RS	14	SK-1046 2層フルイ	不明角状		淡青-半透明	細い紐状に成形されたガラスが1本、絡みつくように融着した形状。	Si,Pbが非常に強く、次いでKのピークが明瞭に認められる。他、微細なCu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス
RS	15	SK-1046 3層フルイ	不定形塊		(淡)青-半透明	空気が入って薄く膨らんだ部分が折れて融着したような形状。	Si,Pbが非常に強く、次いでCa,Kのピークが認められる。他Cu,Feも有り。	カリウム鉛ガラス(風化)

※色調や透明度の判断は主観的なもの　　※一括資料は1片のみを任意に選定して分析

※微細資料の計測はデジタルビデオマイクロスコープを使用

Tab.1　ガラス製品一覧表

ガラス玉、未製品、失敗品、板状のガラス製品の小片がみられる（Tab.1参照）。他に須恵質の格子目叩きを有する瓦、獣骨、魚骨が出土する。土坑の時期は12世紀前半と考えられる。

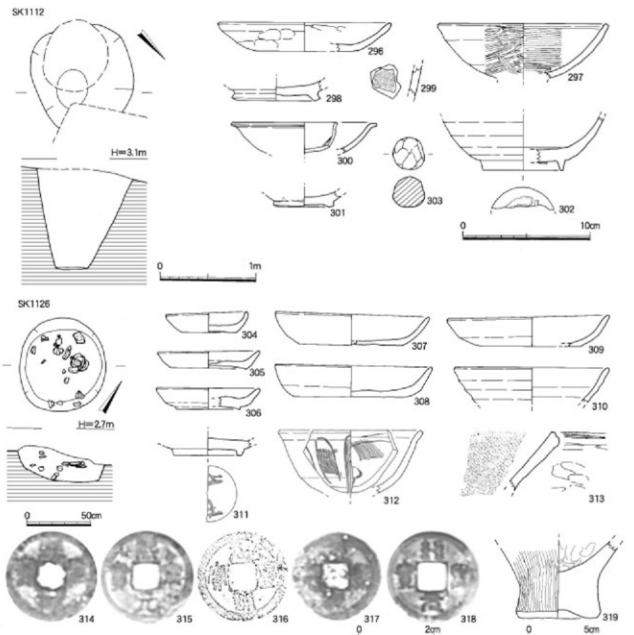


Fig.26　SK1112・1126実測図（1/40・1/30）および出土遺物実測図（1/3・1/1）

Ph.35　SK1126（南東から）

SK1060（Fig.25）　調査区の西側に位置し、東側をSD1195に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径1.93m、短径1.0m、深さ75cmを測る。土層から南側を一部、新たに掘削している状況がうかがえ、そこには焼土が大量に堆積する。底面は船底状を呈し、灰色粘質土が薄く溜まる。

出土遺物（Fig.25）　294は同安窯系青磁碗で、外面には細かい縦の櫛目文を有する。295は白磁碗XI－4類である。他に回転糸切り底の土師器、瓦器椀、白磁碗V類が出土し、時期は12世紀後半と考えられる。

SK1105（Fig.25　Ph.34）　調査区の中央に位置する。

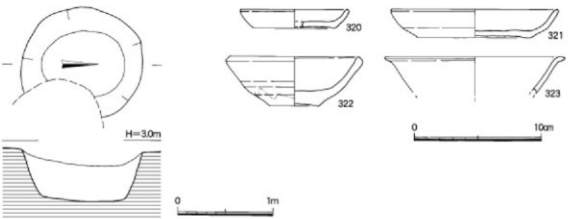


Fig.27　SK1133実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

平面プランは楕円形を呈し、長径は40㎝、短径32㎝、深さ12㎝を測る。内部には石が入るが、敷いている状況ではない。石に混入して、縄目叩きを有する須恵質の平瓦、陶器片が出土するが、他に遺物がなく時期は不明である。

SK1112（Fig.26）　調査区の中央に位置し、北側をSK1199に削平される。平面プランは円形を呈し、直径1.2m、深さ1.05mを測る。底面は長径40㎝、短径30㎝の小さな楕円形を呈する。覆土は灰色土を主体とする。

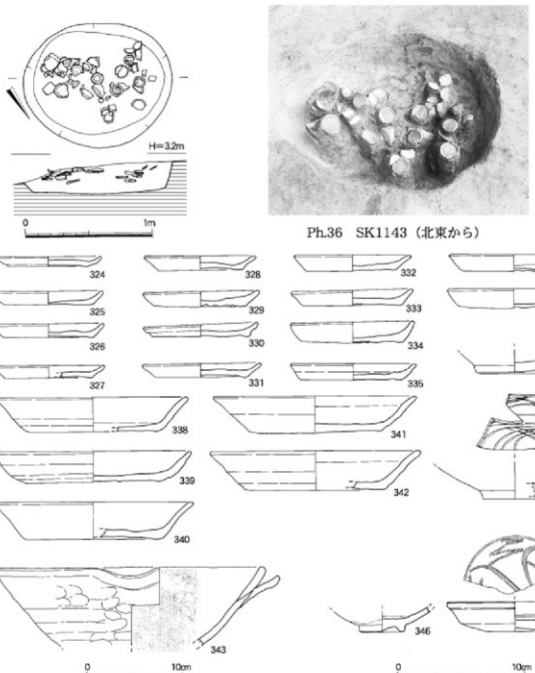
出土遺物（Fig.26）　296は回転ヘラ切り底の土師器の坏である。口径は13.6㎝を測る。金雲母を含み、橙色を呈する。内面は丁寧なナデ、外面は指押さえで調整される。297は楠葉型の瓦器椀で、内面は密な線状の研磨、外面はやや粗な磨きが施される。298は緑釉陶器の底部片である。灰白色の胎土に明緑色の釉が全面にかかる。299は製塩土器の小片で、内面に細かい布目が残る。300は白磁皿Ⅳ類、301は白磁小椀の底部片、302は越州窯系青磁椀Ⅲ類である。303は石球で、重さは17.27gを量る。他に縄目叩きを有する瓦片、滑石片が出土する。時期は12世紀前半と考えられる。

SK1126（Fig.26　Ph.35）　調査区の西側に位置し、一部他の土坑に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径73㎝、短径65㎝、深さ26㎝を測る。底面は船底状を呈する。散在した状況で土師器が出土する。また、銅銭が北側に集中して５枚出土する。

出土遺物（Fig.26）　304～309は回転糸切り底の土師器である。304～306は小皿で、口径は6.5～8.2㎝を測る。307～309は坏で、口径は12.1～12.8㎝を測り、307・308は外底部に板状圧痕を有する。310は大内系の坏で、体部はラッパ状に開く。口径は12㎝を測る。胎土は精良で、金雲母を含み、色調は橙色を呈する。311は白磁碗の底部片で、外底部に墨書があるが、判読できない。312は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－６a類、313は瓦質土器の鉢である。314～318は北宋代の銅銭で、銹着した状況で出土した。314は「天聖元寶」（初鋳年：1023年）、315は「熙寧元寶」（初鋳年：1068年）、316・317は「元豊通寶」（初鋳年：1078年）、318は「紹聖元寶」（初鋳年：1094年）である。319は弥生土器の底部片で、混入と考えられる。他に滑石片、羽口、鉄滓が出土し、14世紀前半と考えられる。

SK1133（Fig.27）　調査区の西側に位置し、一部他の土坑に削平される。平面プランは円形を呈し、直径は1.25m、深さ55㎝を測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。覆土は灰色土、灰褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.27）　320・321は回転糸切り底の土師器である。320は小皿で、口径8.6㎝、321は坏で、口径13.2㎝を測る。322は陶器の坏で、砂粒を含んだ褐色の胎土に灰緑色の釉がかかる。323は白磁碗Ⅴ類である。他に縄目叩きを有する瓦質の瓦が出土し、時期は13世紀前半と考えられる。



Ph.36　SK1143（北東から）

Fig.28　SK1143実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

SK1143（Fig.28　Ph.36）　調査区の中央南側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径1.17m、短径1.0m、深さ24cmを測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。覆土は灰色土を主体とし、炭化物が少量含まれる。土師器が大量に投棄されており、完形品も見られる。

出土遺物（Fig.28）　324～342は回転糸切り底の土師器で、外底部に板状圧痕を有する。324～337は小皿で、口径は8.3～10.2cmを測り、底部から体部は大きく外側に開く。色調は灰橙色～橙色を呈する。338～342は坏で、口径は14.7～16.6cmを測る。339の体部は内傾気味に開くが、他は大きく外側に開く。色調は橙色～明橙色を呈する。343は瓦質土器の片口の擂鉢で、すり目は5条を一単位とする。344は白磁碗Ⅳ類、345は白磁碗の底部片で、底部は小さく、外底部は露胎である。見込みにはヘラで文様を描く。346は同安窯系青磁小碗と思われ、見込みの釉は輪状に削られる。347は同

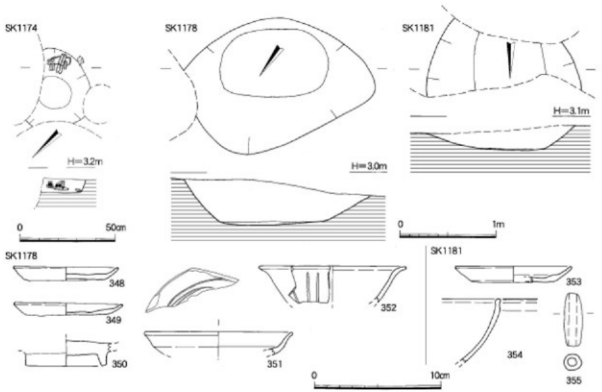


Fig.29 SK1174・1178・1181実測図（1/20・1/40）および出土遺物実測図（1/3）

Ph.37 SK1174遺物出土状況（南から）

安窯系青磁皿Ⅰ－２ｃ類である。他に龍泉窯系青磁片、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類が出土する。以上の出土遺物から土坑の時期は12世紀後半と考えられる。

SK1174（Fig.29 Ph.37） 調査区の西側に位置し、東側と北側を他の遺構に削平される。平面プランは円形を呈し、直径は38㎝、深さ7.0㎝を測る。南東側に獣骨等が出土するが、他に遺物がなく時期は不明である。覆土は灰褐色砂質土である。

SK1178（Fig.29） 調査区の西側に位置し、東側を他の土坑に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径は1.0m、短径0.7m、深さ47㎝を測る。底面はほぼ平坦である。覆土は灰色土を主体とする。

出土遺物（Fig.29） 348・349は回転系切り底の土師器の小皿で、口径は8.1㎝、9.2㎝を測る。胎土に金雲母・赤褐色粒を含み、色調は明橙色を呈する。350は白磁碗Ⅳ類、351は龍泉窯系青磁皿、352は青磁の小碗で、口縁部は大きく屈曲する。体部外面は縦方向にヘラで施文する。他に縄目叩きを有する瓦片、滑石片が出土する。土坑の時期は13世紀中頃と考えられる。

SK1181（Fig.29） 調査区の西側に位置し、北側を現代の撹乱、南側をSK1045に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径は80＋αcm、短径80㎝、深さ30㎝を測る。底面はほぼ平坦である。覆土は灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.29） 353は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、口径は9.0㎝を測る。金雲母、白色砂粒を含み、明橙色を呈する。354は白磁碗Ⅴ－３類である。355は土錘で、重さは8.68gである。以上の出土遺物から土坑の時期は12世紀中頃と考えられる。

SK1192（Fig30） 調査区の西側に位置し、SD1050に削平される。平面プランは楕円形を呈し、

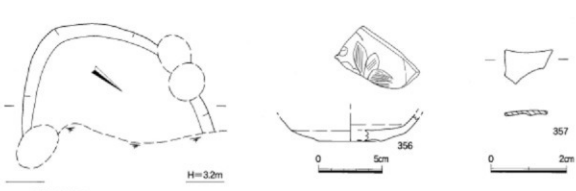
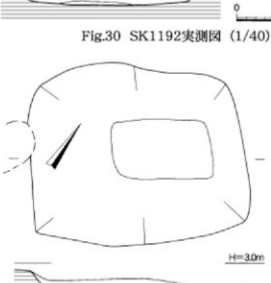
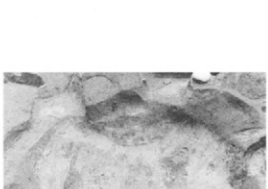


Fig.30 SK1192実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/1）





Ph.38 SK1199（北東から）

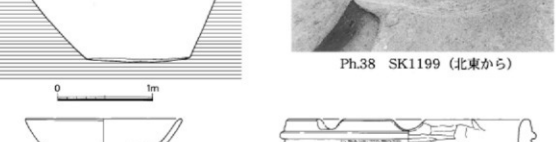


Fig.31 SK1199実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

長径1.2＋αm、短径2.0m、深さ30㎝を測る。底面はほぼ平坦で、覆土は灰褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.30 巻頭図版） 356は白磁皿Ⅷ－２ｂ類、357は板状のガラス製品で、不透明な青色を呈する。いずれも破面であり、わずかに弧を描く。凹面には焼き膨れがみられる。分析では珪素、

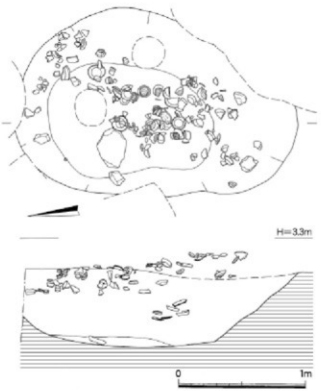


Fig.32 SK1200実測図（1/30）

Ph.39 SK1200（東から）

カルシウム、鉛、銅が検出されるカリウム鉛ガラス（Tab.1参照）である。他に回転糸切り底の土師器、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類が出土し、土坑の時期は12世紀後半と考えられる。

SK1199（Fig.31 Ph.38） 調査区の中央に位置する。平面プランは長方形を呈し、長辺は2.3m、短径1.83m、深さ1.0mを測る。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は灰褐色土、灰色土を主体とする。

出土遺物（Fig.31） 358は回転糸切り底の土師器の坏で、口径は12.2㎝を測る。359は瓦質土器の火舎である。360・361は朝鮮時代の陶磁器である。360は粉青沙器の碗で、内面には沈線を巡らし、刷毛で白化粧を施す。361は底部片で、粘性を帯びた小豆色の胎土で、内外面の色調は光沢のある灰色を呈する。他に滑石片4点、砂岩製の砥石が1点出土する。時期は15～16世紀と考えられる。

SK1200（Fig.32 Ph.39） 調査区の中央に位置し、一部他の土坑に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径は2.2m、短径1.45m、深さ60㎝を測る。底面は船底状を呈する。覆土は灰色土を主体とし、炭化物が混入する。土師器が大量に出土し、完形品もみられる。遺物が浮いた状況になることから、掘り込み面は、約20㎝上からと思われる。

出土遺物（Fig.33） 362～373は回転糸切り底の土師器の小皿で、367・370～373は外底部に板状圧痕を有する。口径は7.6～8.6㎝を測り、口径に比して底径が小さく、体部は底部から大きく外に開く。胎土は金雲母、赤褐色粒を含み、色調は370・371が明橙色、他は橙色を呈する。374は緑釉陶器の底部片で、砂粒を含んだ淡橙色の胎土に淡緑色の釉を全面に施釉する。375～387は回転糸切り底の土師器の坏で、375・378・382・383・386は外底部に板状圧痕を有する。375は深みがあり、高さは3.7cmを測る。胎土に金雲母を多く含み、色調は橙色を呈する。376～387は口径11.9～13.2㎝を測り、小皿同様、体部が底部から大きく外に開く。胎土は金雲母、赤褐色粒を含み、色調は橙色を呈する。388～392は白磁で、388・389は碗Ⅳ類、390は碗Ⅴ類、391は小碗、392は皿である。393・394は陶器である。393は盤の口縁部片で、内外面に化粧土が施され、内面に灰オリーブ色の釉がかかる。394は壺の口縁部片で、砂粒を多く含んだ灰色の胎土に褐釉がかかる。395は瓦質土器の鉢である。396は土錘で、16.01gを量る。397は瓦質の平瓦で、凸面は縄目叩きの後、強いナデで調整する。凹面はわずかに布目が残り、ナデで仕上げる。398～402は北宋代の銅銭である。398～

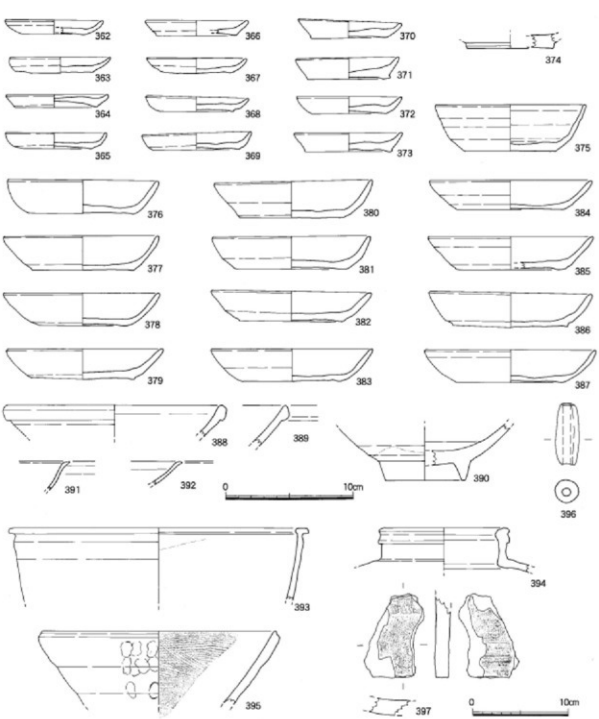


Fig.33 SK1200出土遺物実測図（1/3・1/4・1/1）

400は３枚銹着した状況で出土した。398は「明道元寶」（初鋳年：1023年）、399は「元祐通寶」（初鋳年：1093年）、400は「崇寧通寶」（初鋳年：1102年）、401は「治平元寶」（初鋳年：1064年）、

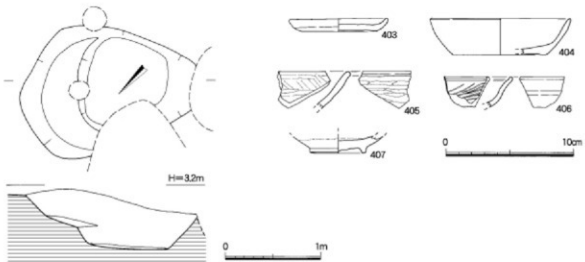


Fig.34 SK1201実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

402は「紹聖元寶」（初鋳年：1094年）である。他に滑石小片、獣骨が出土し、土坑の時期は13世紀後半と考えられる。

SK1201（Fig.34） 調査区の中央に位置し、一部他の土坑に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径は1.8＋αm、短径1.4mを測る。北東側に段を有し、深さ60㎝を測る。底面は平坦である。覆土は灰色土を主体とし、炭化物が少量混入する。

出土遺物（Fig.34） 403・404は回転糸切り底の土師器の小皿と坏である。405は瓦器椀、406は土師器の坏で、口縁部内面には沈線が巡り、体部内面には斜方向に暗文状の磨きを施す。407は白磁皿Ⅲ類である。土坑の時期は14世紀頃と考えられる。

SK1214（Fig.35 Ph.40・41） 調査区の中央に位置し、一部他の土坑や撹乱に削平される。平面プランはやや歪な長方形を呈し、長辺は2.4m、短辺2.0m、深さ30㎝を測る。底面は平坦である。西側隅に高さ約8.0㎝ほどの焼土を検出した。土層から５層より上層は再掘削後の堆積の可能性がある。また、３層の灰黒色粘質土は縦方向に入っており、板状のものが立てられていた状況が考えられる。覆土はシルト、砂を主体とし、粘質土や焼土が層状に堆積する。炭化物は少量出土する。

出土遺物（Fig.35） 408は白磁碗Ⅴ類、409は白磁碗Ⅳ類である。410は陶器の盤で、底部内面に灰黄色の釉がかけられ、鉄絵が描かれる。胎土は黒色粒、白色砂粒を含む。他に回転糸切り底の土師器、石球が出土し、土坑の時期は12世紀後半と考えられる。

Ph.40 SK1214（北から）

Ph.41 SK1214土層（東から）

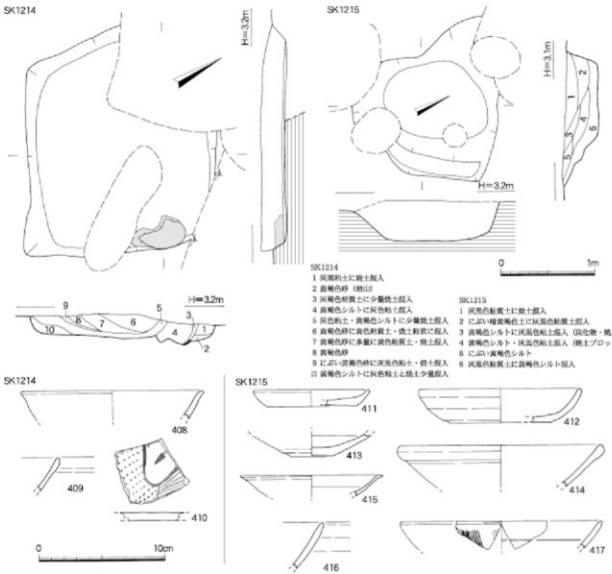


Fig.35 SK1214・1215実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

Ph.42 SK1215（東から）

Ph.43 SK1215土層（北東から）

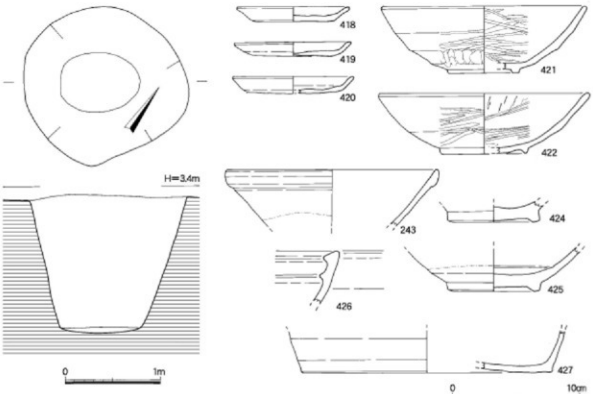
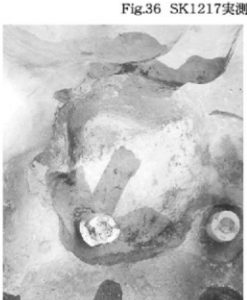


Fig.36 SK1217実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）



Ph.44 SK1217（北東から）

SK1215（Fig.35 Ph.42・43） 調査区の東側に位置する。覆土はSK1214に類似し、同じ性質の土坑であると思われる。不整形な平面プランを呈しており、南北方向の幅1.5m、東西方向の幅1.65mを測る。東側に段を有し、深さは43㎝を測る。断面は逆台形を呈し、底面は平坦である。1・2層は再掘削後の堆積とみられる。

出土遺物（Fig.35） 411・412は回転糸切り底の土師器の小皿と坏で、411は外底部に板状圧痕を有する。復元口径は9.2㎝、12.8㎝を測る。413は白磁皿、414は白磁碗Ⅳ類、415は青白磁の皿である。416は龍泉窯系青磁碗、417は同安窯系青磁碗である。他に瓦質土器の鉢が出土し、土坑の時期は12世紀後半と考えられる。

SK1217（Fig.36 Ph.44） 調査区の中央に位置し、平面プランは円形、直径は1.7mを測る。深さは1.45mであり、底面は東西方向に長い楕円形を呈する。覆土は炭化物を少量含み、灰色土、灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.36） 418～420は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。口径は8.6～9.3㎝を測り、色調は418が灰橙色、他は橙色を呈する。全て胎土に金雲母を含み、419は赤褐色粒も多く含む。421・422は瓦器椀で、やや粗な磨きで調整する。422は内面にコテ当て痕が残る。423～425は白磁碗Ⅳ類である。426は無釉陶器の鉢の口縁部片、427は施釉陶器の盤の底部片で内面に灰黄色の釉がかかる。他に緑釉陶器が出土する。土坑の時期は12世紀中頃と考えられる。

SK1220（Fig.37） 調査区の中央に位置し、東側と西側を現代の攪乱に削平される。平面プラン

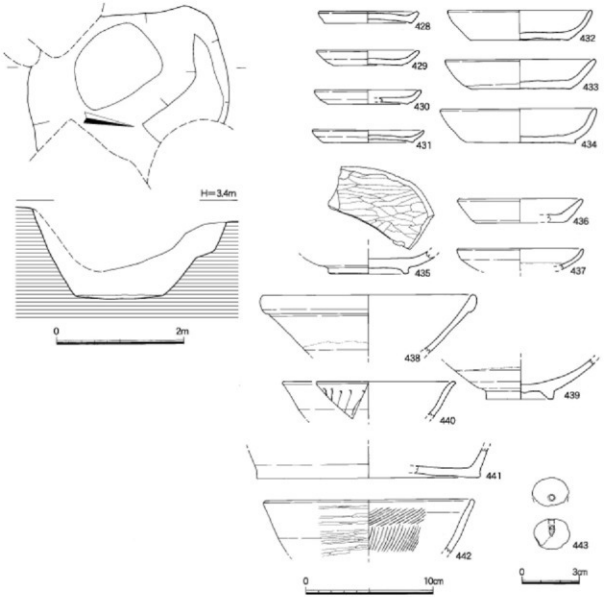
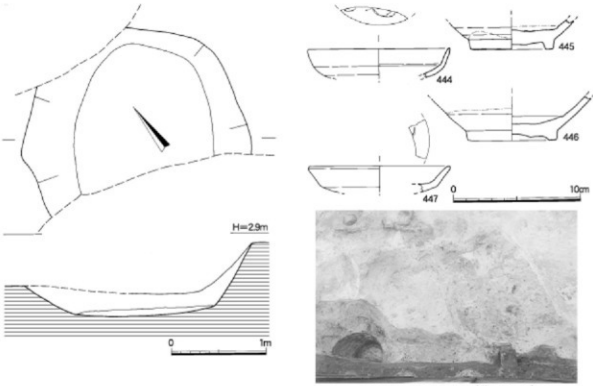


Fig.37 SK1220実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/3・1/2）

は隅丸方形を呈すると考えられ、南北方向の幅3.15m、東西方向の幅2.2＋αm、深さ1.45mを測る。北側に段を有し、底面はほぼ平坦である。覆土は灰褐色砂質土を主体とし、わずかに炭化物を含む。ガラス玉が1点出土する。

出土遺物（Fig.37 巻頭図版） 428～434は回転糸切り底の土師器で、428・431・432は外底部に板状圧痕を有する。428～431は小皿で、口径は7.9～8.8cmを測り、色調は429が明橙色、430が灰橙色、他は橙色を呈する。432～434は坏で、口径は11.4～12.4cmを測り、色調は橙色である。435は瓦器椀で、見込みには太い磨きが施され、銀化する。436は龍泉窯系青磁の皿である。437～440は白磁で、437は皿Ⅷ類、438は碗Ⅳ類、439は碗Ⅱ類、440は碗Ⅴ類である。441は陶器の盤の底部片で、内面に灰黄色の釉がかかる。442は土師器の坏で、内外面ともに横方向の研磨で調整し、内面には斜方向・縦方向の暗文状の磨きを施す。443はガラス玉で、半分欠損する。1.9cmの球形を呈し、両面から直径4.0mmの穿孔を施す。青色を呈しており、分析では珪素、鉛、カリウムが明瞭に認められるカリウム鉛ガラス（Tab.1参照）である。他に砂岩の砥石片2点、滑石片4点、獣骨が出土する。土坑の時期は13世紀後半と考えられる。



Ph.45　SK1267（北西から）

Fig.38　SK1267実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK1267（Fig.38　Ph.45）　調査区の中央に位置し、西側を現代の撹乱に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径1.7＋αm、短径2.25m、深さ0.7mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は灰褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.38）　444～446は白磁である。444はⅧ－２a類、445は碗Ⅷ類、446碗Ⅵ類である。447は龍泉窯系青磁皿である。他に回転糸切り底の土師器、同安窯系青磁が出土する。以上の出土遺物から土坑の時期は12世紀後半と考えられる。

SK1282（Fig.39）　調査区の中央に位置し、南東側をSK1294に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径は3.45m、短径2.9m、深さ1.63mを測る。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は灰色土、灰褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.39）　448は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。口径は8.6cmを測り、内面は雑なナデで調整する。胎土に金雲母・白色砂粒を含み、色調は橙色を呈する。449は「て」の字状口縁を有する土師器の小皿である。胎土に金雲母を含み、色調は白橙色を呈する。450は回転ヘラ切り底の土師器の坏で、外底部に板状圧痕を有する。胎土に赤褐色粒、金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。451は回転糸切り底の土師器の坏の底部片である。胎土に金雲母を多量に含み、色調は灰橙色～橙色を呈する。底部外面には墨書が残るが、遺存状況は悪い。452は黒色土器A類の底部片である。453・454は瓦器椀の底部片で、454の底部外面にはヘラで浅く、分割線のような刻線が入れられる。455～458は白磁である。455は碗Ⅱ－３b類、456は碗Ⅱ類、457はⅢ－２類、458は皿である。459は越州窯系青磁小碗の底部片である。全面施釉され、高台内面には目跡が残る。また、内面はヘラにより片彫り風の文様が描かれる。460～463は中国陶器である。460は壺の口縁部片で、灰色の胎土に暗緑色の釉がかかる。461は壺の口縁部片で、灰色の胎土に灰オリーブ色の釉がかかる。頸部上半には釉がかからず、露胎で、露胎部分は褐色に発色する。口縁部には胎土目が残る。

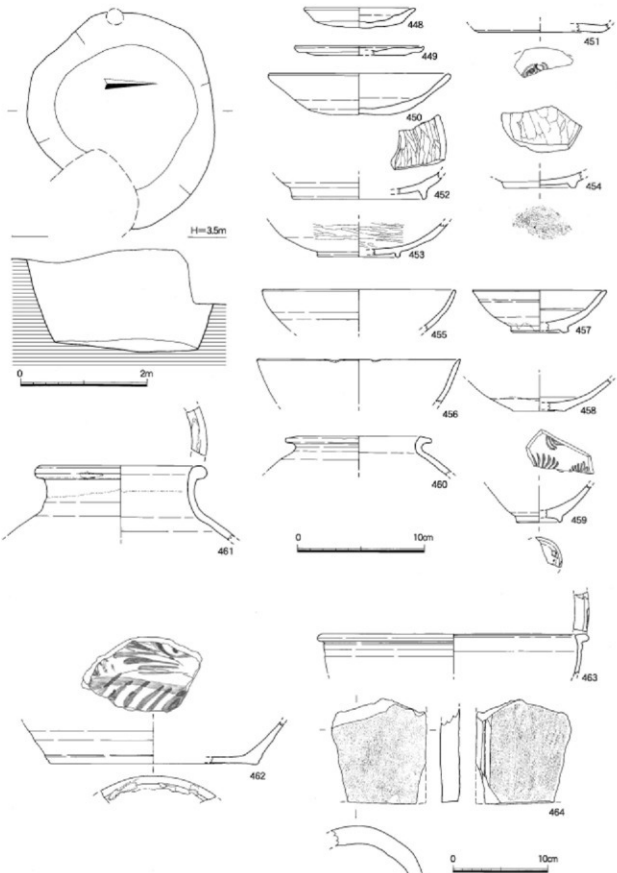


Fig.39 SK1282実測図（1/60）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

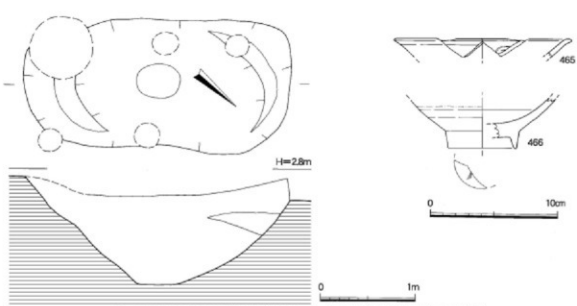


Fig.40 SK1294実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

462は底部片で、砂粒を多く含む灰色の胎土に、内面には灰緑色の釉がかかり、鉄絵が描かれる。外面露胎部分は褐色を呈し、底部には胎土目が残る。463は口縁部片で、粗な灰白色の胎土に化粧土が施され、内面にはオリーブ色の釉がかかる。464は瓦質の丸瓦で、凸面は縄目叩きを行ったのち、丁寧なナデで調整する。凹面は細かい布目が残る。土坑の時期は12世紀中頃と考えられる。

SK1294（Fig.40） 調査区の中央に位置する。平面プランは長方形を呈し、長辺2.8m、短辺1.4m、深さ1.13mを測る。南西側と北東側に段を有する。底面は小さく、長径45㎝、短径35㎝の楕円形を呈し、壁は底面に向かってほぼ直線的に傾斜する。覆土は灰色土を主体とし、炭化物が少量混入する。

出土遺物（Fig.40） 465は白磁碗Ⅴ－４類、466は白磁碗Ⅴ類である。他に回転ヘラ切り底の土師器、同安窯系青磁、縄目叩きを有する須恵質の瓦片が出土する。時期は12世紀後半と考えられる。

SK1310（Fig.41） 調査区の中央に位置し、一部を他の土坑に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径1.3＋αm、短径1.6m、深さ1.0mを測る。底面はほぼ平坦である。覆土は灰色土を主体とする。

出土遺物（Fig.41） 467～478は回転糸切り底の土師器で、467・473・475・476・478の外底部は板状圧痕を有する。467～471は小皿で、口径は7.7～8.3cmを測る。胎土に金雲母、赤褐色粒を含み、色調は471が灰橙色、他は橙色を呈する。472～478は坏で、口径は11.3～13.1㎝を測る。胎土に金雲母、少量の赤褐色粒を含み、473・475は明橙色、他は橙色を呈する。479は白磁皿、480は陶器の底部片である。土坑の時期は13世紀後半と考えられる。

SK1311（Fig.42） 調査区の中央に位置し、一部他の土坑に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径1.5＋αm、短径1.3m、深さ0.6mを測る。底面はほぼ平坦である。壁面は直線的に底面へと至る。覆土は灰色土を主体とする。

出土遺物（Fig.42） 481～489は回転糸切り底の土師器で、485は外底部に板状圧痕を有する。481～488は坏で、口径は11.8～16.2㎝を測る。色調は481が明橙色、482・483・487はにぶい橙色、他は橙色を呈する。488の底部は焼成後、打ち欠きによる穿孔を有する。489は小皿で、口径は8.1㎝を測る。胎土に金雲母を含み、色調は橙色を呈する。490は龍泉窯系青磁皿、491は白磁皿で、見込みに花文を描く。492は白磁碗Ⅵ類である。時期は13世紀後半と考えられる。

SK1313（Fig.42） 調査区の中央に位置し、北西側をSK1199、南東側をSK1317に削平される。平面プランは隅丸方形を呈しており、一辺は0.95m、深さは38㎝を測る。底面は船底状を呈する。覆

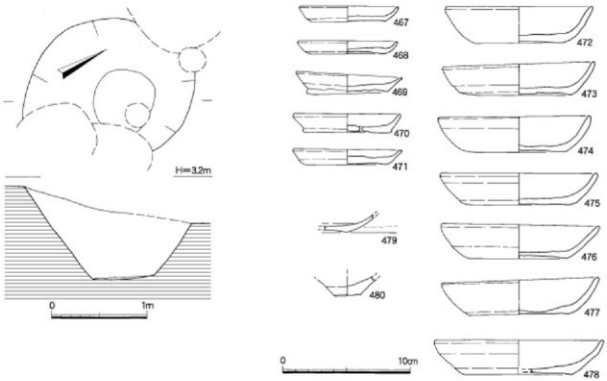


Fig.41 SK1310実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

土は灰褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.42） 493～497は回転糸切り底の土師器で、493・495・497は外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を含み、色調は橙色を呈する。493～496は坏で、口径は12.7～13.6㎝を測る。497は小皿で、口径は8.6㎝を測る。498は土錘で、半分欠損する。重さは3.30gである。499～501は白磁である。499は皿、500は碗Ⅴ類、501は碗Ⅳ類で、口縁部上端は輪花風に窪んでいる。502は中国陶器の底部片で、明橙色の胎土に化粧土を施し、褐色～褐緑色の釉がかかる。503は滑石石鍋の口縁部片で、外面には煤が多量に付着する。504・505は北宋代の銅銭で、504は「成平元寶」（初鋳年：999年）、505は「政和通寶」（初鋳年：1111年）である。他に縄目叩きを有する瓦片が出土する。土坑の時期は13世紀前半から中頃と考えられる。

SK1316（Fig.42） 調査区の中央に位置し、北西側をSK1317に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径1.5m、短径1.25m、深さ45㎝を測る。北側に段を有し、底面はほぼ平坦である。覆土は灰色土を主体とする。

出土遺物（Fig.42） 506・507は回転糸切り底の土師器の坏で、ともに口径は12.4㎝を測る。胎土に金雲母を多く含み、色調は明橙色を呈する。508は白磁碗Ⅴ類、509は同安窯系青磁皿Ⅰ－2b類、510は中国陶器の口縁部片で、粗な小豆色の胎土に褐色釉がかかる。13世紀中頃と考えられる。

SK1317（Fig.43） 調査区の中央に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径1.25m、短径1.15m、深さ60㎝を測る。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は灰色土を主体とする。

出土遺物（Fig.43） 511～513は回転糸切り底の土師器で、513は外底部に板状圧痕を有する。胎土に少量の金雲母、赤褐色粒を含み、色調は511が明橙色、他は橙色を呈する。511は小皿で、口径7.8㎝を測る。512・513は坏で、口径は12.4㎝、12.6㎝を測る。514は瓦器椀、515は混入の土師器の坏で、口縁部内面に1条の沈線を巡らせ、ナデと磨きで調整した後、内面に斜方向の暗文を施す。516は白磁碗Ⅳ類、517は白磁碗Ⅷ類、518は天目茶碗である。519は土師質の丸瓦片で、凸面は縄目

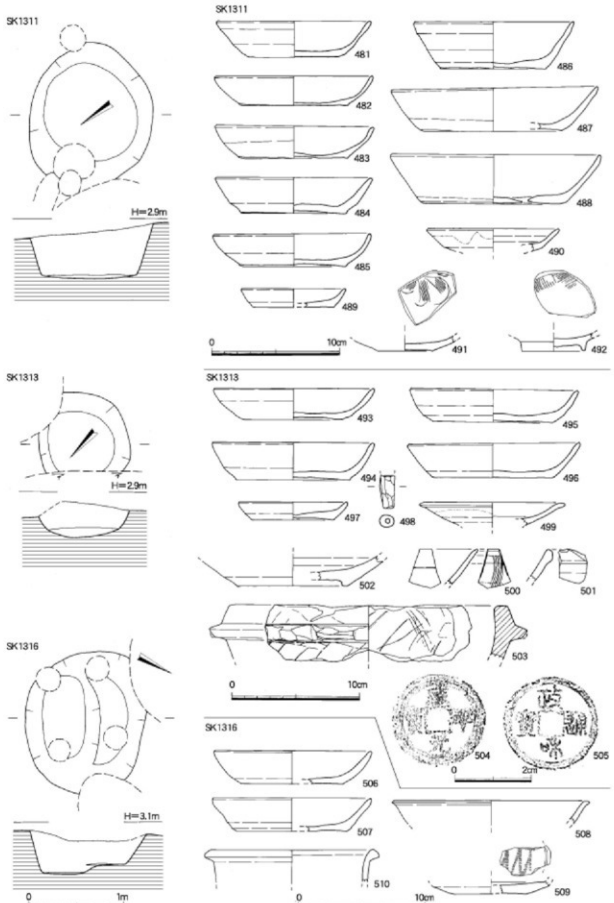


Fig.42 SK1311・1313・1316実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/1）

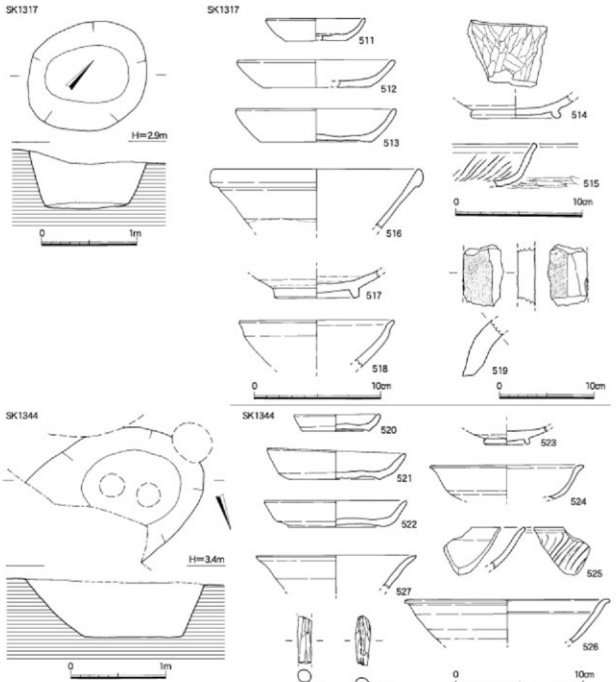


Fig.43 SK1317・1344実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

叩きの後ナデで調整する。土坑の時期は14世紀前半と考えられる。

SK1344（Fig.43） 調査区の西端に位置し、西側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径1.3＋αm、短径1.45m、深さ58㎝を測る。東側壁面は緩やかに傾斜するが、西側は急である。底面はほぼ平坦である。覆土は灰色土、灰色粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.43） 520～522は回転糸切り底の土師器である。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は明橙色を呈する。520は小皿、521・522は坏で外底部に板状圧痕を有する。523～526は白磁で、523・524は明代のものと思われる。527は天目茶碗である。528は土製品で、直径約1.0㎝の円柱状を呈する。529は土錘で、重さは4.43gである。土坑の時期は15～16世紀と考えられる。

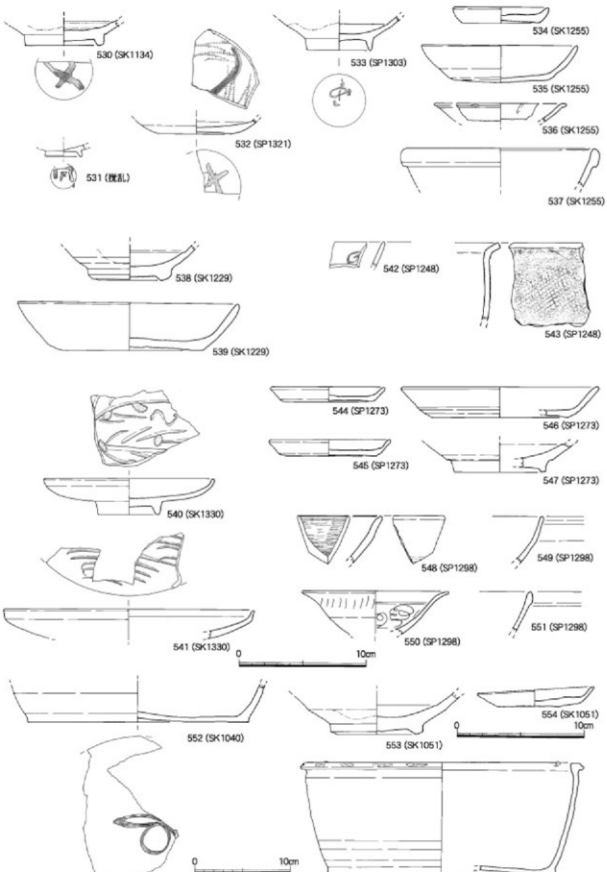


Fig.44 中世のその他の出土遺物実測図① (1/3・1/4)

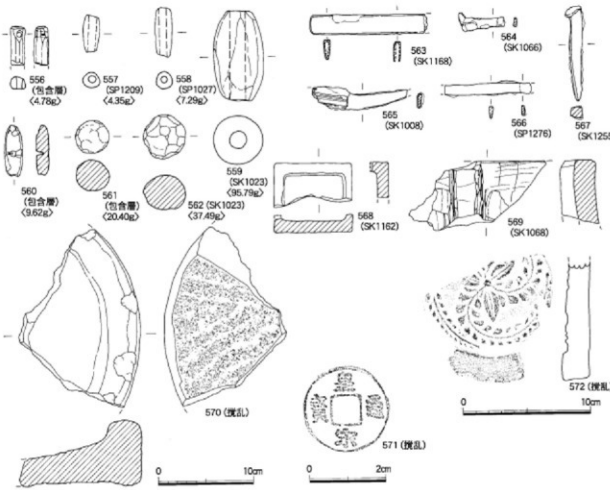


Fig.45　中世のその他の出土遺物実測図②（1/3・1/4・1/1）

（4）中世のその他の遺物（Fig.44・45）

530～533は墨書土器である。530は白磁碗Ⅷ類、531は中国陶器の底部片、532は同安窯系青磁皿、533は白磁小碗である。534～537はSK1255出土。534・535は回転糸切り底の土師器の小皿と坏で、535は外底部に板状圧痕を有する。536は白磁皿Ⅳ－２b類、537は白磁碗Ⅳ類である。538・539はSK1229出土。538は白磁碗Ⅳ類、539は回転糸切り底の土師器の坏で、外底部に板状圧痕を有し、口径は17.4㎝を測る。540・541はSK1330出土。540は白磁の坏で、全面施釉後、畳付の釉を掻き取る。見込みには胎土目が５カ所残る。541は龍泉窯系青磁坏である。542・543はSP1248出土。542は龍泉窯系青磁皿、543は土師質土器の甕である。544～547はSP1273出土。544～546は回転糸切り底の土師器で、外底部に板状圧痕を有する。547は白磁碗Ⅳ類である。548～551はSP1298出土。548は楕乗型瓦器椀、549は白磁碗XI類、550は白磁碗Ⅴ－２bc類、551は白磁碗Ⅳ類である。552はSK1040出土で、中国陶器の盤の外底部に墨書が残る。553～555はSK1051出土で、553は白磁碗Ⅳ類、554は回転ヘラ切り底の土師器の小皿、555は中国陶器の盤である。556は有孔土錘、557～559は管状土錘で、559は大型品である。560は石錘で、中央部に穿孔を有するが、貫通はしない。穿孔部と裏面には横方向に浅い溝が入る。561・562は石球である。563・564は青銅製品で、563は小柄である。565～567は鉄製品で、565・566は刀子、567は釘である。565は木質が残る。568は赤間関硯で、砥面の隅には墨が残る。569は滑石石鍋で、外面には煤が付着する。570は石臼で、挽り目は不明瞭である。571は北宋代の銅銭で、「皇宋通寶」（初鋳年：1039年）である。他に包含層中から銅銭「寛永通寶」が１点出土する。572は黒田家の家紋である藤巴文を瓦当文様に用いた軒丸瓦である。

2）古代の遺構と遺物

（1） 竪穴住居跡

SC1350（Fig.46　Ph.46）　調査区の東側に位置し、大部分を中世の遺構や現代の撹乱に削平され、遺存状況は極めて悪い。平面プランは方形を呈し、東西方向4.1m、南北方向3.7＋αmを測る。壁面の高さは最も遺存状況が良好な箇所で28cmである。床面は平坦であり、柱穴等は確認できなかった。覆土は灰褐色砂質土、黄褐色砂を主体とする。

出土遺物（Fig.47・48）　573～589は須恵器である。573～577は坏蓋で、573・574は器高がやや高く、口縁端部は内方へ屈曲させる。天井部は平らで、天井部外面1/2～2/3に回転ヘラ削り調整を行う。573は扁平なつまみが残る。ともに白色砂粒を多く含み、色調は灰色を呈するが、重ね焼きのため口縁部付近は灰黒色を呈する。575～577は天井部が低く、口縁端部は下方へ折り曲げる。575はつまみを有し、天井部外面は回転ナデで調整し、576・577は天井部外面1/2に回転ヘラ削り調整が残る。胎土に白色砂粒を含み、576・577は金雲母も少量含む。色調は577が灰白色、他は灰色を呈し、重ね焼きのため口縁部が灰黒色となる。578～582は高台付坏である。体部は直線的に底部から延び、端部がわずかに外反する。高台は低く、体部と底部の境よりやや内側に付く。底部外面はナデで調整する。578は白色砂粒を含む小豆色の胎土で、内外面はにぶい灰色を呈する。579・581は少量の金雲母、白色砂粒を含み、灰色を呈する。580は胎土が精良であるが、焼成が悪く灰白色を呈する。582は大型の坏で、口径は16.8cmを測る。胎土に白色砂粒を多く含み、灰色を呈する。583は坏身である。底径は小さく、不定方向の雑な削りで調整する。白色砂粒、黒色粒を含む胎土で、色

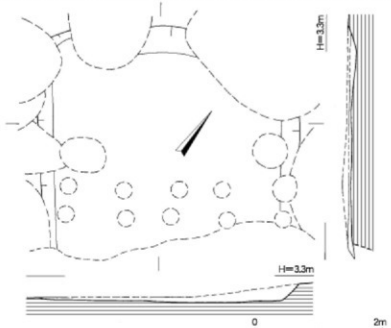
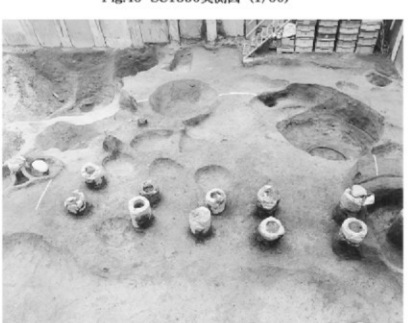


Fig.46　SC1350実測図（1/60）


Ph.46　SC1350（南東から）

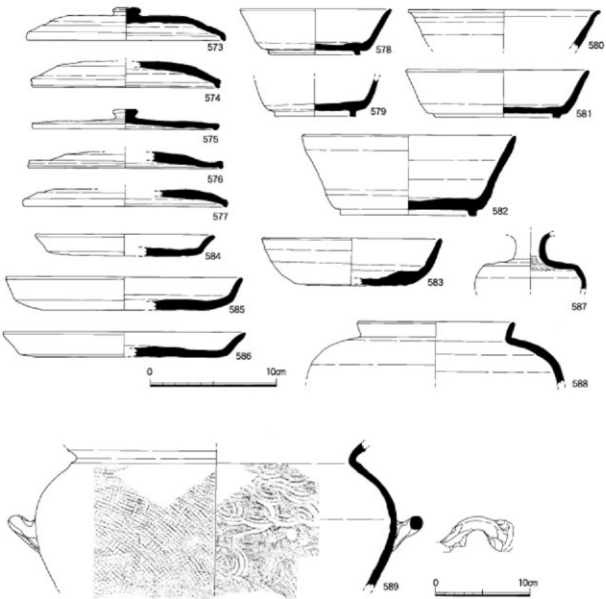


Fig.47 SC1350出土遺物実測図① (1/3・1/4)

調は灰色を呈する。584～586は皿で、胎土に白色砂粒を含み、585は明橙色、他は灰色を呈する。587は小壺で、平らな肩部の中央に小さな頸部が付き、口縁部は強く外反すると思われる。回転ナデで調整され、頸部内面にはしぼり痕が残る。白色砂粒を多く含み、外面は灰色から黒色を呈し、部分的に灰をかぶる。588・589は壺である。588は短頸壺で、胎土に砂粒を含み、灰色を呈する。肩部外面に灰をかぶる。589は体部片で、口縁部は体部から大きく外反する。体部外面は格子状の叩き、内面は同心円状当て具痕が残る。白色砂粒を多く含み、色調は灰色、外面は一部灰黒色を呈する。590～596は土師器である。590は坏で、体部は丸みを持ち、口縁部へと至る。内面と口縁部外面は回転ナデ、体部外面は指ナデで調整する。外底部にはヘラ記号のような刻線を有する。591は高坏の坏部である。回転ナデで調整した後、磨きを施す。白色砂粒、赤褐色粒、金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。592～596は甕である。592～594は小型の甕で、体部が張らず、体部内面と口縁部の境に明瞭な稜線をもち、口縁部は強く外反する。外面は縦方向の刷毛目調整を行った後、部分的に指ナデを施す。体部内面は斜方向の削りで調整する。595・596は口径26.6㎝、28.6㎝を測り、体部はわず

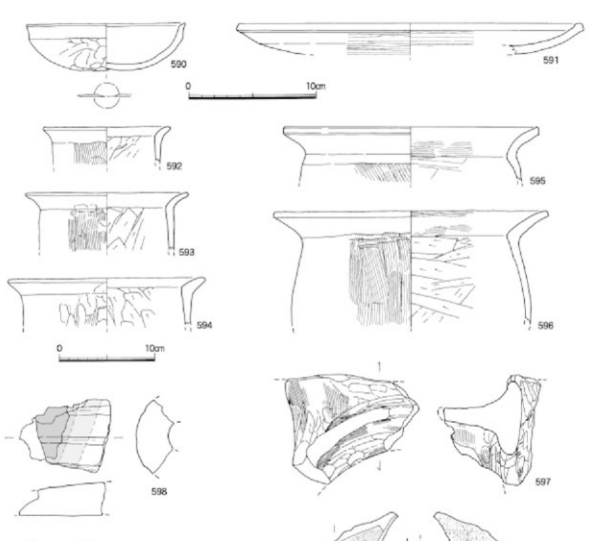


Fig.48 SC1350出土遺物実測図② (1/3・1/4)

かに膨らみ、口縁部はやや丸みをもって「く」の字に外反する。体部外面は縦方向の刷毛目、内面は斜方向の削りで調整する。口縁部内面は横方向の刷毛目調整を行った後、横ナデを施す。597は竈で、受部から底にかけての小片である。受部の外面と庇の内外面は刷毛目を行った後、雑な指ナデ、押さえで調整する。内面は指押さえで調整する。庇内面がわずかに黒変する。598は羽口の小片である。先端部は欠損し、ガラス質滓が付着する。強い被熱により橙色～明橙色の胎土から黄灰色、灰色に変色する。内面も還元し、帯状に灰褐色へと変色する。外面はヘラ削りを行った後、指ナデで調整する。内面は長軸方向に何条も沈線が入り、擦痕が残る。599・600は鉄製品である。599は鏃の茎部、600は釘で、頂部は円形、身部の断面は方形を呈する。601は瓦質の平瓦である。凸面は縄目叩きを行った後、部分的にナデ消し、凹面には細かい布目が残る。他に黒色土器A類、製塩土器、軽石、椀型鍛冶滓を含む鉄滓61gが出土する。以上の出土遺物から竪穴住居跡の時期は8世紀後半と考えられる。

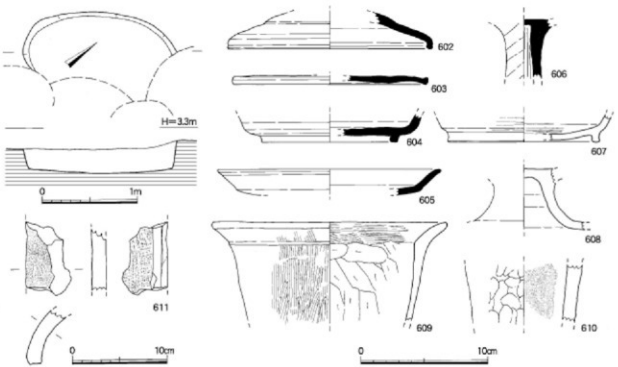


Fig.49 SK1328実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

（2） 土坑

SK1328（Fig.49） 調査区の東側に位置し、南側をSK1340、SK1341等の土坑に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径は1.6m、短径0.7＋αm、深さ25㎝を測る。底面はほぼ平坦で、壁面は直線的に底面に至る。覆土は灰色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.49） 602～606は須恵器である。602は坏蓋で、器高がやや高く、口縁端部は内方へ屈曲させる。天井部は欠損しているため、不明である。胎土に細かい白色砂粒を含み、灰黒色を呈し、外面には灰をかぶる。603は扁平な天井部を有した坏蓋で、回転ナデで調整する。口縁端部は下方へ折り曲げる。胎土に白色砂粒を多く含み、灰色を呈する。604は高台付坏である。高台は低く、体部と底部の境よりやや内側に付く。底部外面はナデで調整する。白色砂粒を含む橙色の胎土で、内外面の色調は灰色を呈する。605は皿の小片で、口縁部は緩やかに外反する。胎土に少量の黒色粒、白色砂粒を含み、灰白色を呈する。606は高坏の脚部片で、胎土に白色砂粒を含み、灰白色を呈する。607～609は土師器である。607は高台付坏で、底部内外面は回転ナデで調整した後、部分的に研磨調整を行う。胎土に金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。608は高坏の脚部片である。太く短い脚が、裾部で大きく開く。胎土に金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。609は甕で、胎土に金雲母を含み、色調は橙色を呈する。610は製塩土器、611は丸瓦で、凸面は粗いナデで調整し、凹面は目のまばらな布目が残る。他に羽口１点、鉄滓６点が出土する。時期は８世紀中頃から後半と考えられる。

SK1329（Fig.50） 調査区の東側に位置し、大部分を近世の井戸や土坑に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径は1.8＋αm、短径1.1m、深さ13㎝を測る。底面はほぼ平坦である。覆土は灰色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.50） 612～617・619・620は須恵器である。612～614は宝珠状のつまみを有する坏蓋、615は壺蓋、616は輪状のつまみを有する蓋である。612・613は器高が高く、612～614は天井部外面1/2に回転ヘラ削り調整を行う。615は天井部際まで回転ヘラ削り調整を行う。616は回転

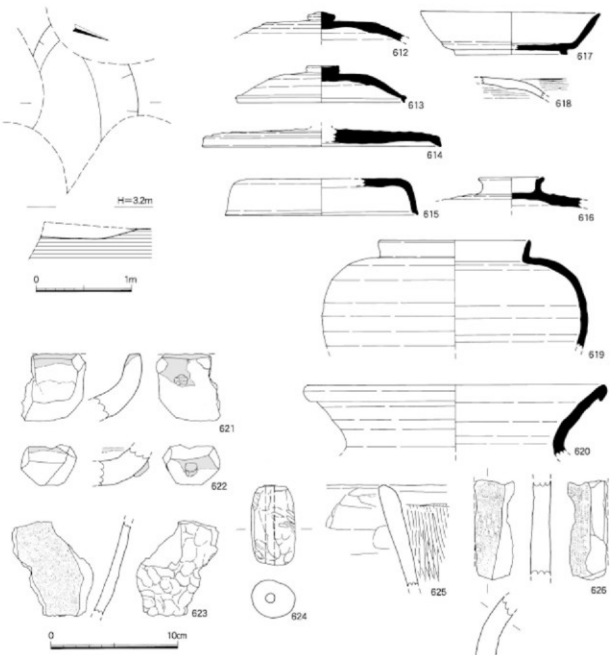


Fig.50 SK1329実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

ナデで調整される。色調は612が灰白色、616が灰褐色、他は灰色を呈する。617は高台付坏で、体部は直線的に底部から延びる。高台は低く、体部と底部の境よりやや内側に付く。底部外面はナデで調整する。白色砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は灰色を呈する。618は土師器の蓋である。天井部は回転ヘラ削りを残し、内外面ともに部分的に研磨調整を行う。619は短頸壺である。白色砂粒を含む灰色の胎土で、外面は灰をかぶり、部分的に緑色に発色する。620は甕の口縁部片で、内外面ともにナデで調整する。621・622は坩堝（付編２参照）である。621は口縁部片で、胎土は白色砂粒を多く含み粗雑である。器壁は1.0～1.8㎝を測り、ナデで調整する。口縁部上端から内面1.5cm下にはガラス質に溶融したものが付着する。内底部には少量付着するにとどまる。外面は一部赤色、白色に変色するが、長時間熱を受けている状況ではない。622は体部片で、器壁は1.7㎝前後である。胎土、色調ともに621に類似する。内面は底部際までガラス質に溶融したものが付着する。外面は緑青の塊

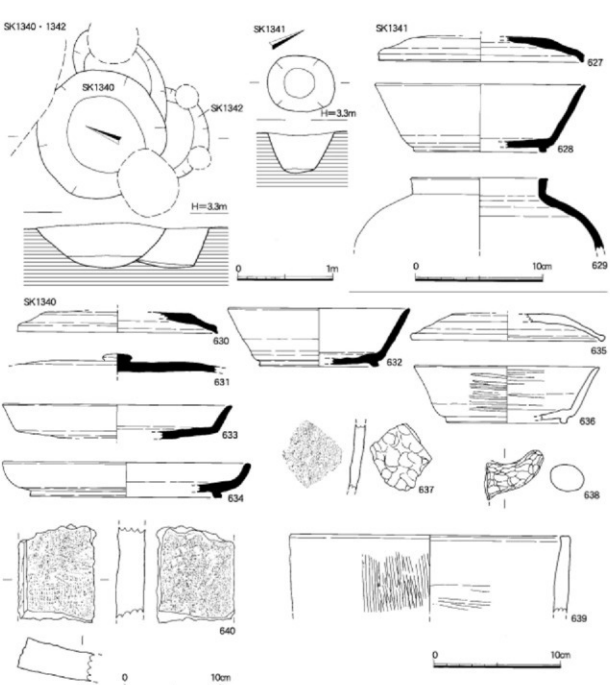


Fig.51 SK1340・1341・1342実測図（1/40）およびSK1340・1341・1342出土遺物実測図（1/3・1/4）

が付着し、一部赤色、白色に変色する。623は製塩土器、624は管状土錘で、重さは72.51gである。625は竈の受部で、内面は煤が付着する。626は丸瓦で、凸面は縄目叩きの後、部分的にナデ消し、凹面には粗な布目が残る。他に羽口３点、鉄滓４点が出土する。８世紀中頃から後半と考えられる。

SK1340（Fig.51）　調査区の東側に位置し、北側を近世の井戸、南側をSK1341に削平される。平面プランは円形を呈し、直径は1.35m、深さ43㎝を測る。壁面の傾斜は緩く、底面は船底状である。覆土は灰色土、灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.51）　630～634は須恵器である。630・631は坏蓋で、天井部は回転ヘラ削りの後、部分的にナデで調整する。色調は淡灰色、630の端部は重ね焼きのため灰黒色を呈する。632は高台付坏、633は皿である。634は高台付皿で、底部外面は回転ヘラ削りで調整する。635・636は土師器の坏蓋と高台付坏である。ともに明橙色を呈し、636の内外面は部分的に研磨で調整される。637は製塩土器、638・639は甕である。640は須恵質の平瓦で、凸面は格子目の叩きの後、ナデで調整する。他に羽口３点、鉄滓１点が出土する。８世紀後半と考えられる。

SK1341（Fig.51）　調査区の東側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径は70㎝、短径60㎝、深さ40㎝を測る。底面はほぼ平坦である。覆土は灰色土を主体とする。

出土遺物（Fig.51）　627～629は須恵器である。胎土に白色砂粒、少量の金雲母を含み、淡灰色を呈する。627の口縁部付近は重ね焼きのため灰黒色を呈する。627は坏蓋で、天井部外面1/2に回転ヘラ削り調整を行う。628は高台付坏で、低い高台が端部付近に付く。外底部はヘラ切り未調整である。629は短頸壺で、回転ナデで調整される。他に土師器の甕、製塩土器、羽口１点、鉄滓１点、土師質の平瓦が出土する。土坑の時期は８世紀後半と考えられる。

SK1342（Fig.51）　調査区の東側に位置し、北西側をSK1340、SK1341に削平される。平面プランは円形を呈すると思われ、現存で東西方向の径は0.95mを測る。深さは約40㎝、断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.51）　641・642は須恵器で、胎土は白色砂粒を含み、641は白灰色、642は灰色を呈し、ともに重ね焼きのため口縁部付近が灰黒色を呈する。641は坏蓋で、天井部外面2/3に回転ヘラ削り調整を行う。642は高台付坏で、低い高台が中心よりに付く。643は土師器の坏身で、外底部は回転ヘラ削り、内外面は丁寧な研磨で調整する。胎土に赤褐色粒、金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。他に製塩土器が出土し、土坑の時期は８世紀中頃と考えられる。

SK1343（Fig.52）　調査区の東側北西壁に位置し、北西側は調査区外へ延びる。南西側をSE1247に削平される。平面プランは楕円形を呈すると思われ、東西方向1.4＋αm、南北方向1.1＋αm、深さ33㎝を測る。底面はほぼ平坦である。覆土は灰色土を主体とする。

出土遺物（Fig.52）　644～648・652・653は須恵器である。644・645は坏蓋である。644は扁平なつまみを有し、天井部は回転ヘラ削りで調整される。胎土に少量の金雲母、白色砂粒を含み、外面は灰色、内面は灰褐色を呈する。645は器高が低く、天井部際まで回転ヘラ削りで調整する。白色砂粒を含み、灰色を呈する。646は坏身、647・648は高台付坏で、底部外面はナデで調整する。白色砂粒を含み、灰色を呈する。648は外底部中央に「凡」の墨書を有する。649～651は土師器である。649は坏で、体部はＳ字状を呈し、口縁端部は内側につまみ出す。内外面ともに丁寧な回転ナデで調整し、内面には斜方向の暗文を施す。650は高台付皿で、内外面ともに不明瞭な研磨で調整し、内面に縦方向の暗文を施す。651は片口の鉢で、外面には煤が多量に付着する。体部外面は刷毛目、体部内面はヘラ削りで調整する。652・653は須恵器の壺である。652の体部外面は平行叩き、内面は同心円状当て具痕が残る。653の体部外面は平行叩き、内面は同心円状当て具痕が残るが、部分的にナデ消す。654は須恵質の丸瓦で、凸面は縄目叩きの後、部分的にナデで調整し、凹面は細かい布目の上から斜方向のヘラナデで調整する。他に須恵器の長頸壺、高坏、羽口４点、鉄滓が出土し、土坑の時期は８世紀中頃から後半と考えられる。

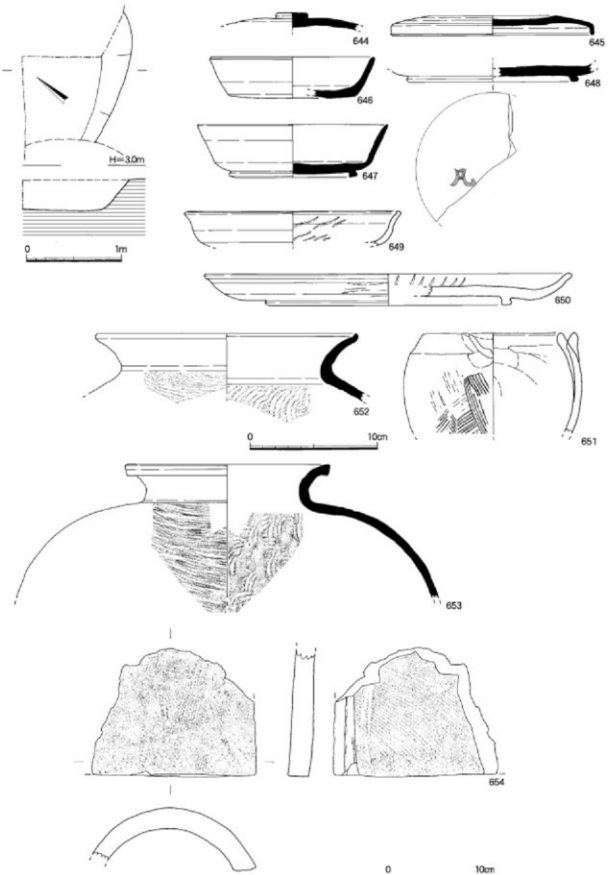


Fig.52 SK1343実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/4）

SK1352（Fig.53　Ph.47～49）　調査区の東側に位置し、大部分を竪穴住居跡や他の土坑に削平される。覆土は地山である砂丘と非常に類似しており、遺構検出時には確認できなかった。遺物が出土するため、トレンチを入れ、壁面の立ち上がりを確認した。平面プランはやや歪な南北方向に長い長方形を呈し、長辺は6.6＋αm、短辺4.3mを測る。北側には検出面からの深さ10～20㎝の不整形の段を有し、南側の底面へと至る。南側の深さは40㎝を測る。底面はほぼ平坦である。段上の底面では、直径25㎝前後、深さ10～23㎝のピットを３基と直径50㎝、深さ7.0㎝の平面プランが円形の土坑、長径90㎝、短径65㎝、深さ25㎝の楕円形の土坑を検出した。また、北東側の壁面に直交する溝を検出した。溝は長さ80㎝、幅17㎝、深さ5.0㎝を測る。覆土は上層が黄褐色砂、灰色砂、下層は黄褐色砂、灰黒色砂がトラ縞状に堆積し、炭化物が混入する。また、部分的に焼土の塊がみられた。大量の遺物が廃棄された状況であった。

出土遺物（Fig.54～58　Ph.50・51）　655～681は須恵器である。655～659はつまみを有する蓋で、天井部外面2/3に回転ヘラ削り調整を行う。色調は655が灰色、656は灰黒色、659は紫灰色、他は灰白色を呈する。660～669は高台付坏で、高台は体部と底部の境よりやや内側に付き、高台端を外傾させて整形する。669の底部外面は回転ヘラ削りを行うが、他はナデで調整する。体部は直立気味に立ち上がり、緩やかに外反するものもみられる。色調は663・666が灰白色、664・667が淡灰色、他は灰色を呈する。胎土には少量の金雲母を含むものがある。670・671は坏身で、底部外面はナデで調整する。色調は暗灰色、灰白色を呈する。672・673は皿で、672は高台を付す。ともに底部外面はナデで調整する。672が灰色、673が灰白色を呈する。674は壺蓋で、つまみを欠損する。天井部は回転ヘラ削りの後、部分的にナデで調整する。675は短頸壺、676は壺の底部片、677は鉢である。678～681は甕の口縁部片で、680は頸部外面にヘラ記号を有する。681の体部外面は平行叩き、679～681の体部内面には同心円状当て具痕が残る。682～692は土師器である。682・683は蓋で、天井部は回転ヘラ削りの後、内外面ともに部分的に研磨調整を施す。胎土に金雲母を含み、明橙色を呈する。684～687は坏で、686・687は高台を付す。684の外底部は不定方向の強いヘラナデ、他は部分的にナデを施す。胎土に金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。686の内外面と687の外面は粗い磨きで調整する。688は浅鉢の口縁部片で、回転ナデで調整される。689・690は高坏である。坏部の内外面は研磨調整されるが、689の内面は不明瞭である。689の脚部はしぼり痕が残り、690の脚部は丁寧な回転ナデで調整される。691・692は甕である。691は体部内面上位から口縁部にかけてと外面に一部煤が付着する。693～699は製塩土器である。693～696は胎土のつなぎ目が明瞭に残り、雑な仕上げである。外面は雑な指押さえ、内面は粗な刷毛目で調整される。口縁部は体部からやや内湾気

Ph.47　SK1352東西土層（北から）

Ph.48　SK1352遺物出土状況（南から）

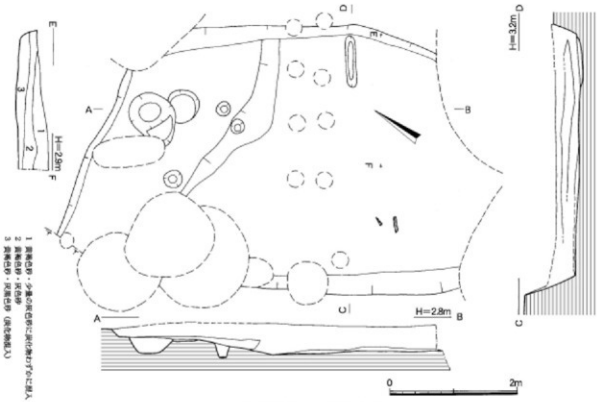


Fig.53 SK1352実測図（1/60）

Ph.49 SK1352（北西から）

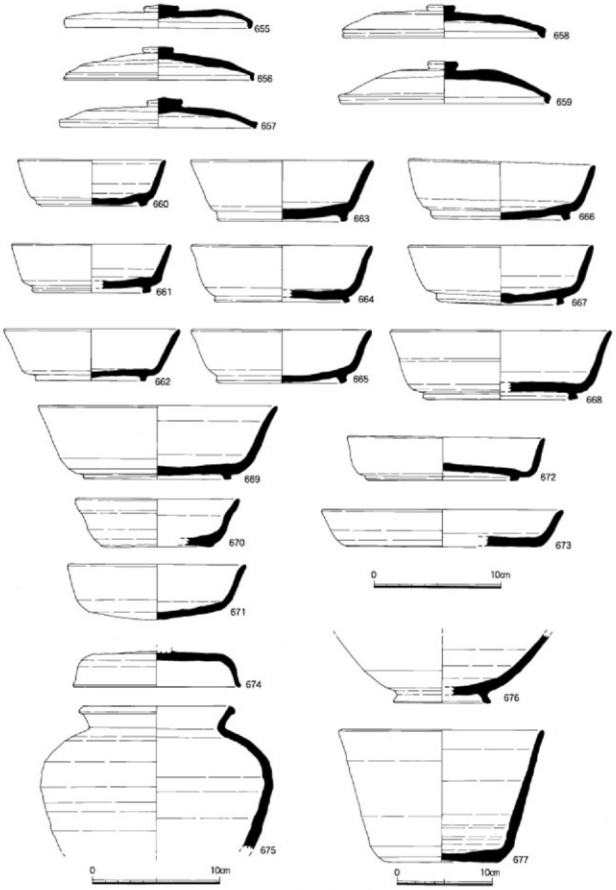


Fig.54 SK1352出土遺物実測図① (1/3・1/4)

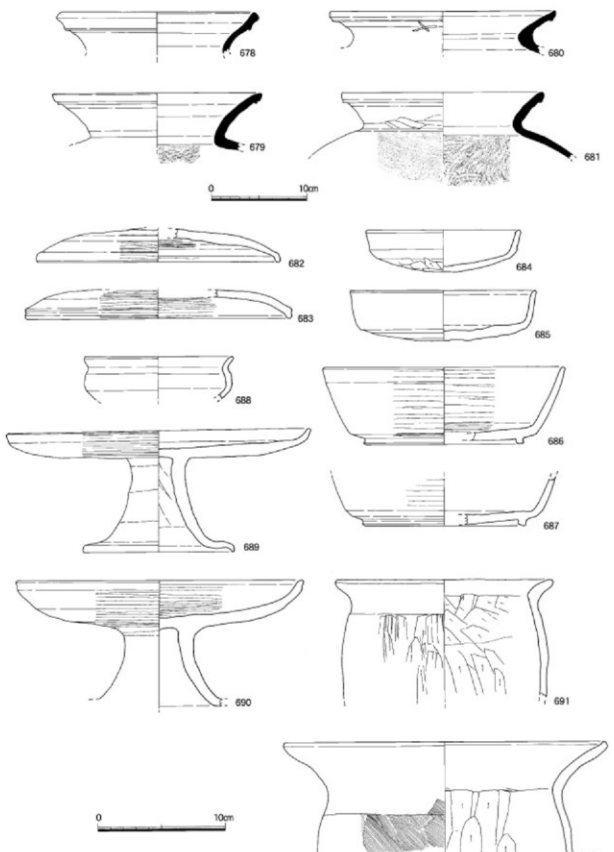


Fig.55 SK1352出土遺物実測図② (1/3・1/4)

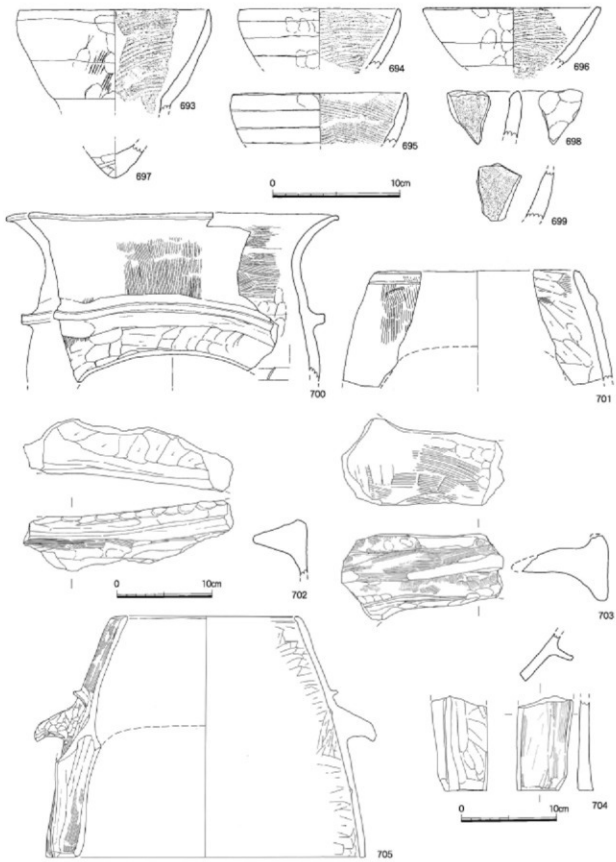


Fig.56 SK1352出土遺物実測図③ (1/3・1/4・1/6)

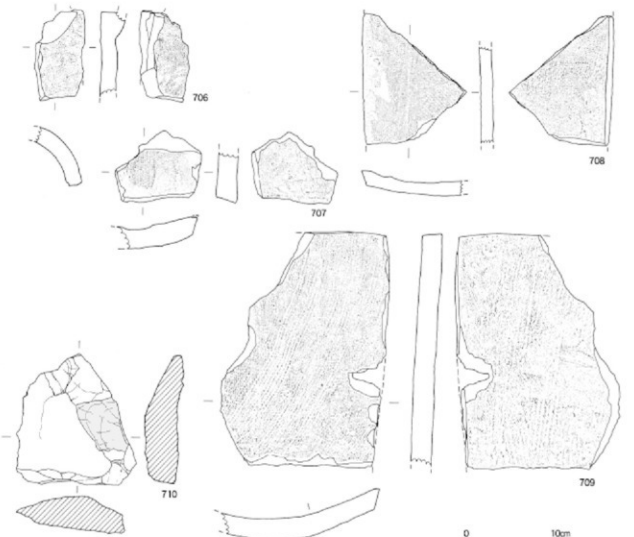


Fig.57 SK1352出土遺物実測図④ (1/4)

Ph.50 SK1352出土遺物①

味にそのまま引き延ばす。697は底部片で、尖底を呈する。698・699は内面に細かい布目が残る。700～705は竈である。700は破片復元のため明確でないが、受部径に比べ、焚口部が大きい。706～709は瓦である。706は須恵質の丸瓦で、凸面は強い指ナデと押さえで調整する。707～709は須恵質の平瓦である。凸面は縄目叩きの後、部分的にナデ消して調整する。凹面には細かい布目が残るが、709は布目の上から斜方向の粗いナデを施す。710は凝灰岩である。一部分が褐色に変色し、錆が付着している。この土坑からは多量に鉄滓が出土することから鍛冶に伴う金床石の可能性が考えられる。711～719は鉄製品である。712は刀子、713は釘、714は鎌茎である。711・715・718・719は板状、716は針状、717は棒状を呈する。720～722は羽口である。720・721の先端部はガラス質の溶融したものが付着し、被熱のため黄色、暗赤色に変色する。722は橙色の胎土が被熱により灰色へと変色する。723～728は鉄滓である。723・724の表面は緑色、黒色を呈し、ガラス化する。723の裏面

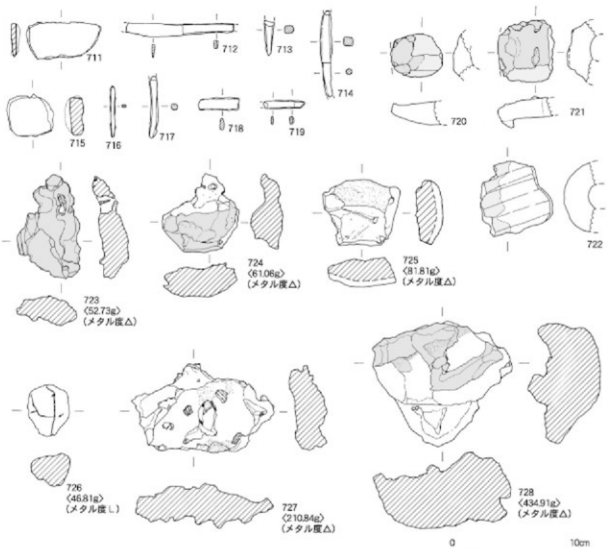
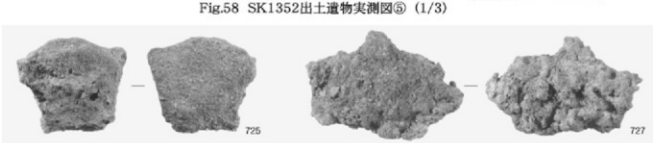


Fig.58 SK1352出土遺物実測図⑤ (1/3)



Ph.51 SK1352出土遺物②

は砂粒を少量噛み、凸凹状を呈し、幅4.0㎜程の木炭痕が2カ所にある。725の表面の破面には気泡がみられ、酸化土砂が付着する。また、724・725の裏面には炉底の粘土が付着する。726は鉄塊系遺物で、全体に酸化土砂が付着し、黄褐色を呈する。幅1.0㎜程の木炭痕、鍛造剥片が付着する。クラックが入り、その部分は錆化が進んでいる。727・728は椀型鍛冶滓である。727の色調は全体に褐色を呈し、幅5.0㎜程の木炭痕がみられる。表面には酸化土砂と幅1.0～5.0㎜の鍛造剥片が少量付着する。728は椀型鍛冶滓が二段となっている。表面は一部ガラス化する。裏面には酸化土砂が大量に付着し、幅1.0～5.0㎜の木炭痕がみられる。鍛造剥片は観察できない。土坑からは椀型鍛冶滓を含んだ鉄滓が他に4.78kg出土する。土坑の時期は8世紀中頃～後半と考えられる。

SK1353（Fig.59～62　Ph.52～66）　調査区の東側に位置し、北東側は調査区外へ延び、西側はSK1282、SK1294に削平される。SK1352同様、覆土が地山の砂丘と類似していたため、遺構検出時に平面プランを確認できなかった。トレンチを入れ、床面から壁を追っていく掘り方となってしまった。そのため、中央に土層ベルトを設定できず、遺構検出面から床面までの土層はSK1282、SK1294とのベルト部分（Fig.61土層①）で記録した。平面プランは隅丸長方形を呈し、長径は4.5＋αm、短径4.75mを測る。黄褐色砂質土、黄白色砂、灰色砂質土、白色砂質土を主体に各層がトラ縞状に堆積する。部分的に炭化物を混入した灰黒色土、灰黒色砂質土が堆積する。10層より上はやや細かく堆積しており、鉄滓・土器等が多量に出土する。この頃は廃棄坑として使用されている。獣骨（付編１参照）は床面より10～15㎝浮いた状況で集中し、獣骨の底面は10層中にあたる。獣骨はウマ・ウシのもので、４体分の頭蓋骨は確認できるが、４頭とも解体された可能性があるため、埋葬ではないと思われる。鍛冶操業に伴った祭祀に関連する可能性が考えられる。床面では鍛冶炉を検出した。鍛冶炉はほぼ中央部に設けられる。炉本体は検出時に東西方向に長い楕円形を呈していると思われたが、土層と床面の焼土の状況から東側は一部壊され、本来は直径70㎝の円形を呈していたと考えられる。覆土は灰褐色粘質土、砂質土で鉄滓が多く出土し、再結合滓もみられた。北側と南側の壁面は被熱し、砂が褐色を帯びていた。被熱部分は薄く、1.0㎝にも満たない。床面、東側と西側の壁面は黄褐色を呈し、砂質土であった。炉壁に使用される粘土等はみられない。再結合滓は炉の西側と南側でも出土した。西側では再結合滓の下から直径30㎝前後の円形プランのピットが２基検出され、深さは6.0㎝であった。これは、下が砂であるため、再結合滓の重みでピット状に沈み込んだものとも考えられる。覆土は灰黒色砂質土で、炭化物が混入する。炉に遠い方のピットからは多くの鉄滓が出土した。南側でも再結合滓の付近で、２基のピットを検出した。切り合っているが、長径60㎝と70㎝、短径40㎝の楕円形を呈しており、深さは20㎝前後である。覆土は灰黒色砂質土で、炭化物を含む。上屋のための柱穴等は確認できなかった。炉の断面を切った際に５層と６層が不整合に堆積（Fig.62）していたため、床面

Ph.52　SK1353獣骨検出状況（北東から）

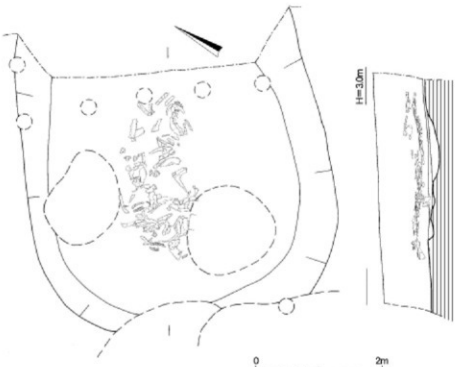


Fig.59 SK1353獣骨検出状況実測図①（1/60）

Ph.53 SK1353獣骨検出状況（北東から）

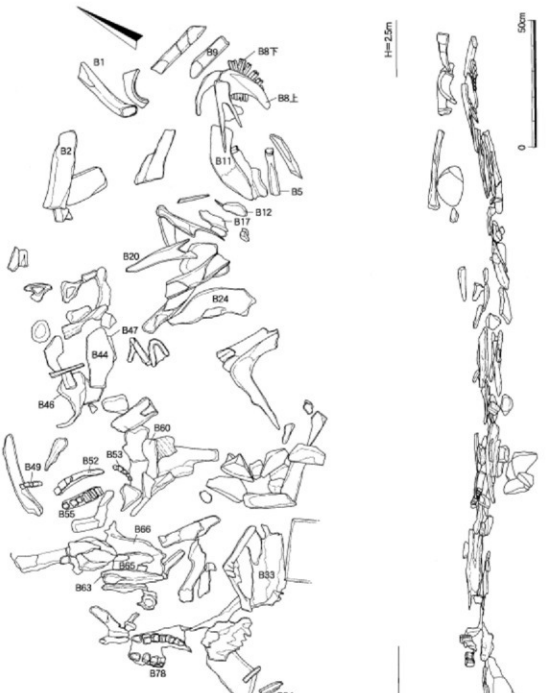
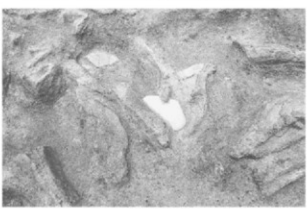


Fig.60 SK1353獣骨検出状況実測図② (1/15)

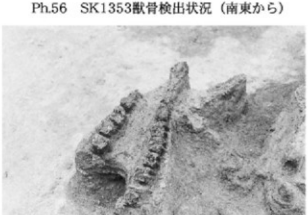
Ph.54　SK1353獣骨検出状況（南東から）

Ph.55　SK1353獣骨検出状況（南東から）

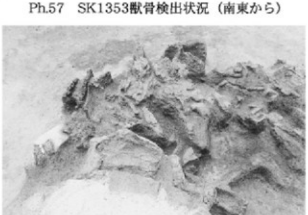
Ph.56　SK1353獣骨検出状況（南東から）



Ph.57　SK1353獣骨検出状況（南東から）



Ph.58　SK1353獣骨検出状況（南東から）



Ph.59　SK1353獣骨検出状況（南東から）

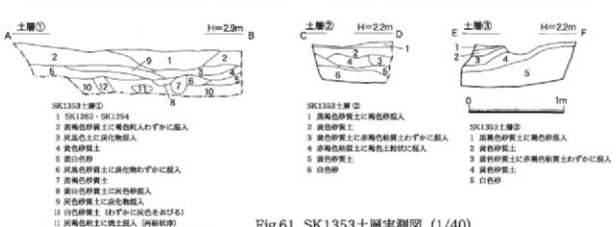


Fig.61　SK1353土層実測図（1/40）

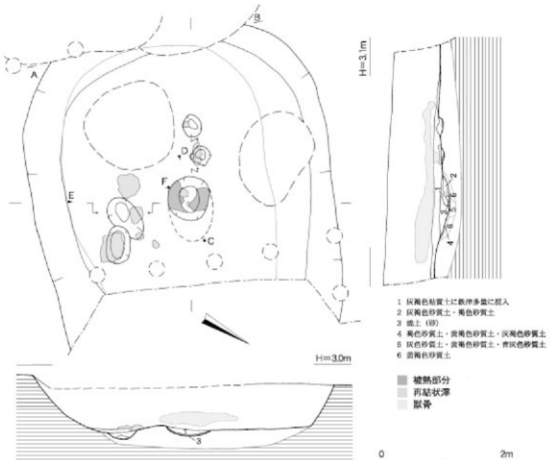


Fig.62 SK1353実測図（1/60）

Ph.60 鍛冶炉完掘状況（北東から）

Ph.61 SK1353鍛冶炉検出状況（北東から）

Ph.62 SK1353鍛冶炉土層（北東から）

Ph.63 K1353鍛冶炉床面検出状況（北東から）

Ph.64 SK1353掘方完掘状況（北東から）

Ph.65 SK1353南側土層（北東から）

Ph.66 SK1353掘方東西土層（北西から）

にトレンチ（Fig.61土層②）を入れた。わずかであるが、遺物が出土し、３層では黄色砂質土に赤褐色粘質土、４層では赤褐色粘質土に褐色土が粒状に混入していた。当初、鍛冶炉を構築する際の炉床と考えたが、砂丘という環境からして上層で幾度となく踏みしめられ、遺物等が沈んだ結果と考えられる。鉄滓はSK1352近くで多く出土した。また、鍛造剥片や粒状滓を床面付近で確認したため、床面付近だけであるが、土を採取し、洗浄を行った。SK1353は鍛冶の操業を終えた後、散骨を使用した祭祀が行われ、その後は土器・鉄滓等の廃棄土坑として使用されたと考えられる。

出土遺物（Fig.63～71　Ph.67～69）　729～783は須恵器である。729～741は坏蓋で、器高がやや高く、口縁端部は内方へ屈曲させるもの(729～736)と天井部が低く、口縁端部は下方へ折り曲げるもの(737～739)に分類できる。741はつまみをもたない。いずれも天井部外面2/3に回転ヘラ削り調整を行う。胎土に729・731・736は少量の金雲母、729・730・732・734・735～741は黒色粒を含む。色調は731・737が青灰色、733がにぶい灰色、734が暗灰色、736が灰白色、738が紫灰色、他は灰色を呈する。729・730・734・738は重ね焼きの痕跡が残る。742は返りを有する坏身で、口径は11.5㎝を測る。胎土に少量の金雲母を含み、灰色を呈する。743～745は坏身で、胎土に金雲母、白色砂粒を含み、744は灰白色、他は灰色を呈する。外底部はヘラ切りで、745は部分的にナデを行う。746～758は高台付坏である。高台は低く、体部と底部の境よりやや内側に付く。高台の接地面は平らなものとやや外傾するものがみられる。体部は緩やかに外反しながら立ち上がるものが多く、749のようにＳ字状を呈するものもみられる。751は底部外面にヘラ削りが行われるが、他はナデで調整する。747・749・753・754は白色砂粒を多量に含み、747・752・756は黒色粒、750・751・755は少量の金雲母を含む。色調は752が青灰色、753が灰白色、754が暗灰色、758が淡灰色を呈し、他は灰色である。747は伏せて焼かれたため、外面に多量の灰をかぶる。また、749の外底部にはヘラ記号、750の外底部にはヘラ記号と墨書を有する。759は大型の坏で、口径は19.2㎝を測る。色調は灰白色を呈する。760・761は高台付皿である。胎土に黒色粒を含み、色調は760が灰色、761は淡灰色を呈する。760の外底部はヘラ記号と思われる浅い線刻を有する。762～765は皿である。胎土に白色砂粒を多く含み、少量の金雲母、赤褐色粒を含む。色調は762が淡灰色、763が青灰色、他は灰色を呈する。766～772は高坏である。766は坏部の口縁端部を丸く仕上げ、胎土に黒色粒、赤褐色粒を含み、色調は黄橙色を呈する。767～769の口縁端部は平坦に仕上げられる。色調は769が淡灰色、他は灰色であるが、767は重ね焼きのため、内面の一部が灰黒色を呈する。768は外面に灰をかぶる。770～772は脚部片で、770は灰色、771は灰白色、772は光沢のある灰色を呈する。773～775は蓋である。773は大型のもので、天井部外面4/5に回転ヘラ削り調整を行う。774は天井部に輪状のつまみを有する。外面は灰をかぶり、光沢のある灰褐色を呈する。775は天井部外面をヘラ削りで調整する。重ね焼きの痕跡が残り、色調は灰色～灰黒色を呈する。776～780は壺である。776は小壺の体部片、777は肩部片で、突帯が巡る。778は口縁部片、779・780は長頸壺の体部片で、779はにぶい褐色を呈する。781は鉢で、体部中位から下半は回転ヘラ削りで調整される。色調は淡灰色を呈する。782・783は甕で、体部外面は格子目叩き、体部内面には同心円状当て具痕が残る。782の口縁部内面と体部外面は多量の灰をかぶる。784～795は土師器である。784・785は皿と高坏で、胎土に金雲母、赤褐色粒を含み、明橙色を呈する。784の器面は荒れているため不鮮明であるが、体部内面に斜方向、内底部に曲線で描かれた暗文がみられる。786～791は甕で、787・790・791の内面には焦げ、789・790・791の外面には煤が付着する。792～795は甑である。794は内面に底部から3.0㎝の幅、795は内面に口縁部から3.5㎝下方に煤が付着する。796～805は瓦である。796～798は須恵質の丸瓦で、凸面は工具による強いナデで調整し、凹面には細かい布目が残る。798は淡灰色、他は灰橙色を呈する。

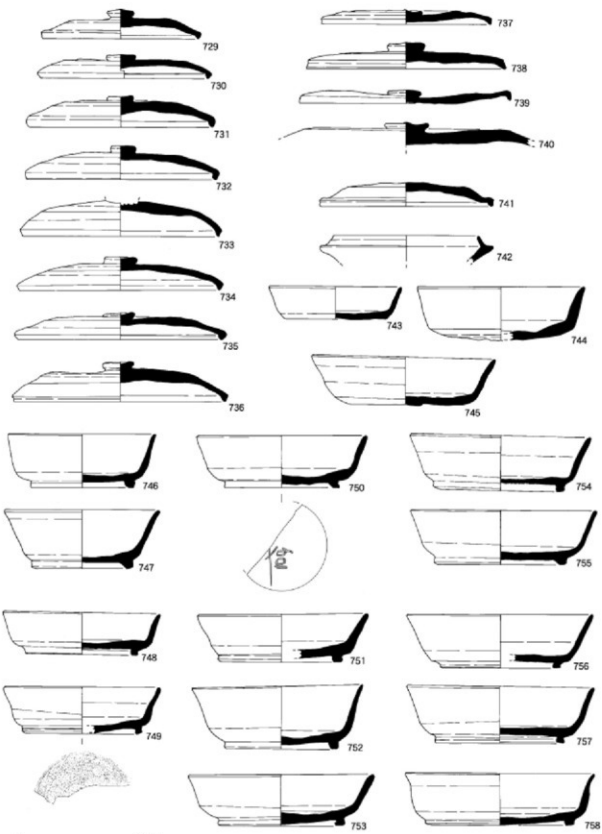


Fig.63 SK1353出土遺物実測図①（1/3）

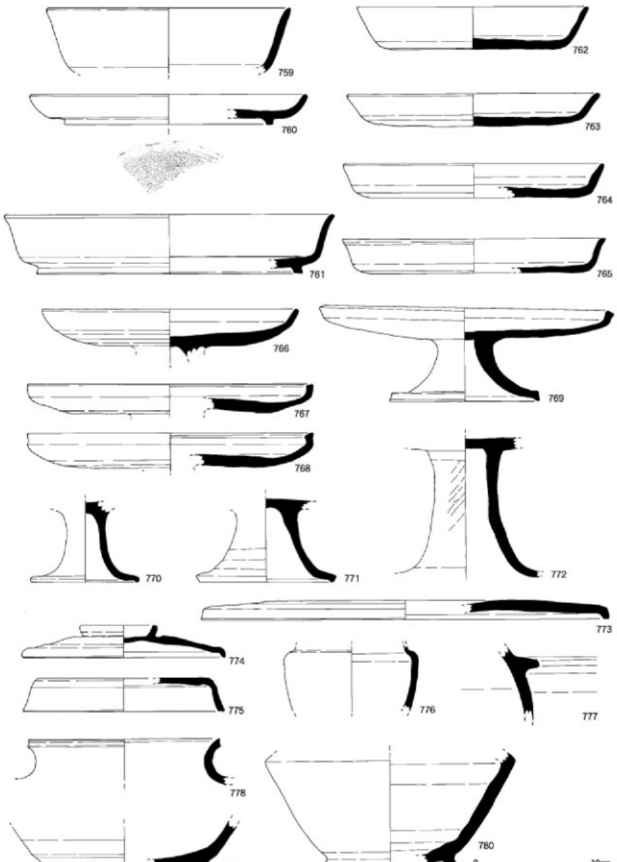


Fig.64 SK1353出土遺物実測図② (1/3)

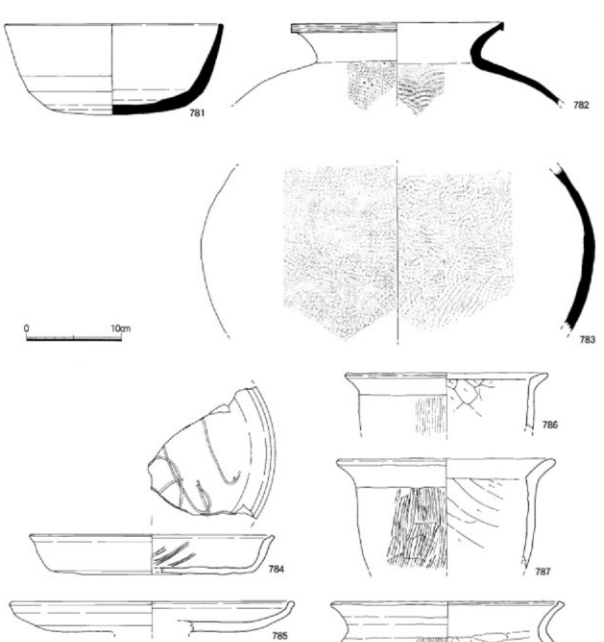


Fig.65 SK1353出土遺物実測図③ (1/3・1/4)

799～805は須恵質の平瓦である。799～801の凸面は工具による強いナデ、802～805は縄目叩きを行った後、部分的にナデで調整する。凹面は全て細かい布目が残るが、801～803・805はヘラ状の工具で部分的にナデを行う。色調は799～801が灰橙色、他は灰色を呈する。806～830は製塩土器である。完形品はなく、全て破片での出土である。雑な作りで、粘土のつなぎ目をそのまま残し、口縁端部はそのまま内側に摘み上げる。形状は円錐形を呈するものが主体を占める。胎土には1.0～5.0㎜

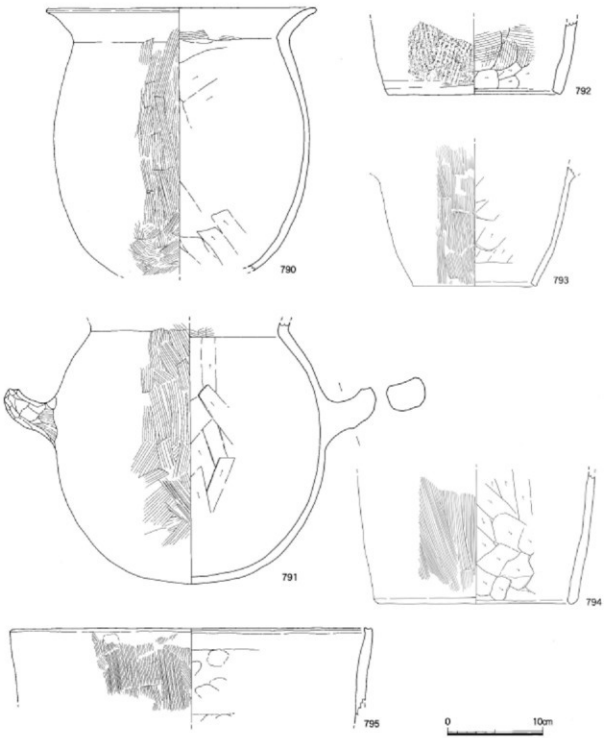


Fig.66 SK1353出土遺物実測図④ (1/4)

大の白色砂粒を多く含み、他に赤褐色粒、金雲母もみられる。内面の調整は比較的明瞭に残り、外面も熱を多量に受けた痕跡はうかがえない。806～814(A) は内面に刷毛目調整を行ったもので、底部付近は指ナデで調整する。811・814は細かい刷毛目、他はやや粗い刷毛目を有する。刷毛目は口縁端部まで残っており、端部をナデ等で仕上げを行った痕跡はうかがえず、雑なつくりである。外面はつなぎ目をそのまま残し、指押さえで調整される。器形は円錐形を呈し、直線的に延びるものと、813のようにやや内湾気味のものがみられる。815～823(B) は内面を工具・指ナデで調整したもの

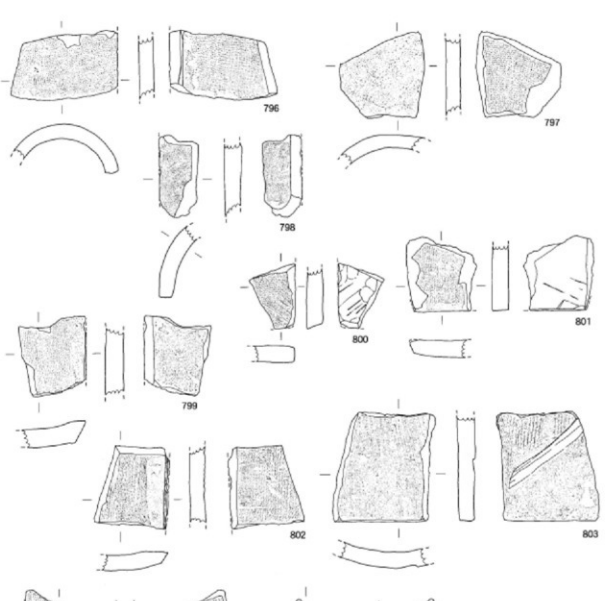


Fig.67 SK1353出土遺物実測図⑤ (1/4)

である。内面には工具痕が残る。815・817は粘土のつなぎ目を残すが、他はみられない。器形は円錐形のものと817のように器高が高く、底部に丸みを有するものがある。819は口縁部を上からみると、角をもっており、方形になる可能性もあるが、破片のため不明である。824は底部片である。825～830(C) は内面に布目を有し、外面は指押さえで調整される。825～827は円錐形を呈し、内面はやや粗い布目が残る。粘土のつなぎ目はみられないが、口縁端部は内側に摘み上げただけで、波打っている。828～830は円筒状を呈し、内面には非常に細かい布目が残る。831は土製の紡錘車で、

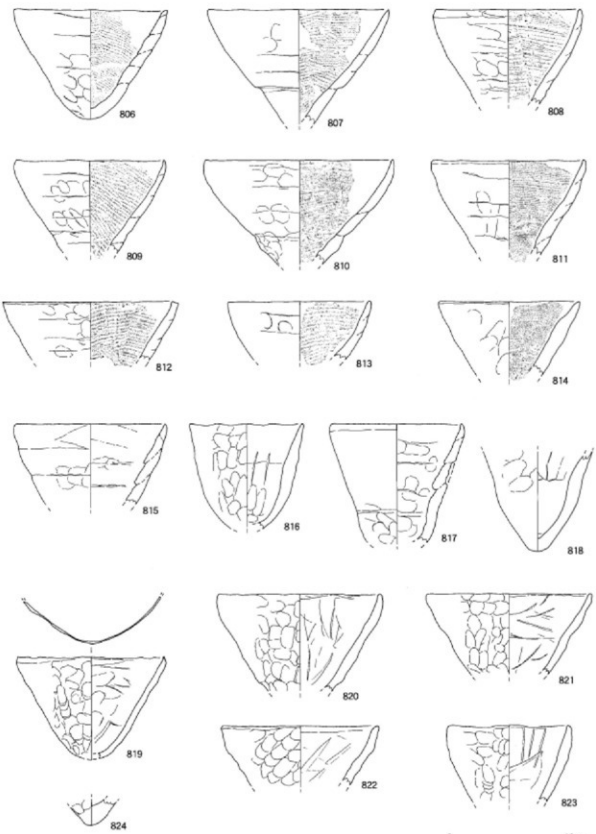


Fig.68 SK1353出土遺物実測図⑥ (1/3)

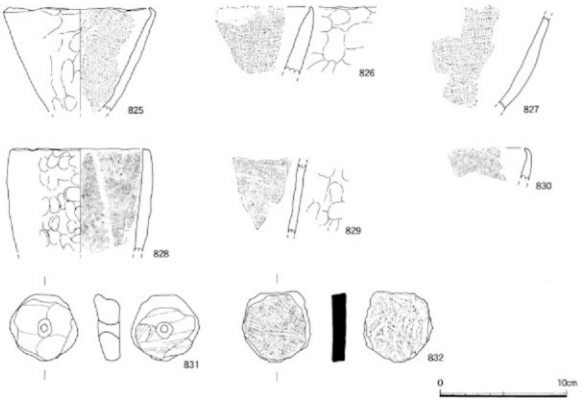
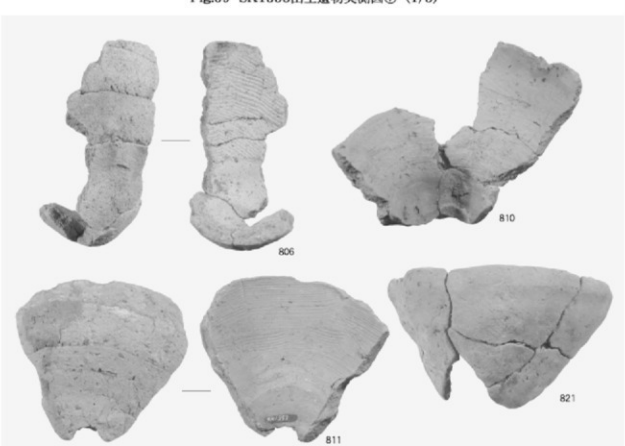


Fig.69 SK1353出土遺物実測図⑦ (1/3)



Ph.67 SK1353出土遺物①

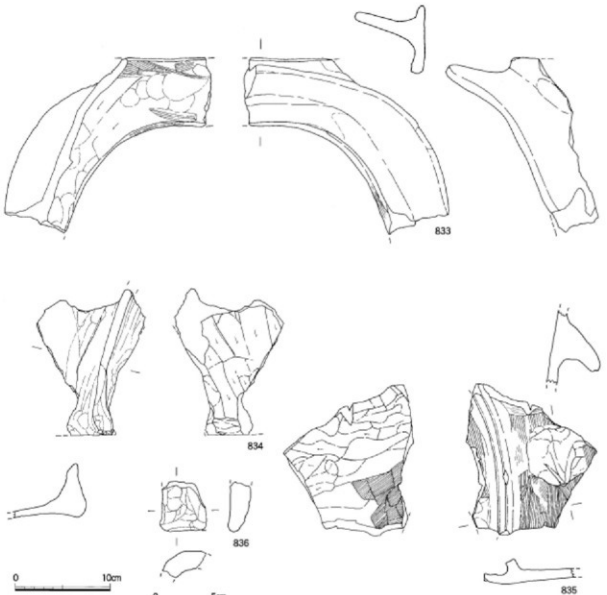
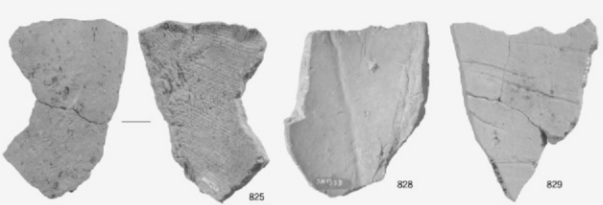


Fig.70 SK1353出土遺物実測図⑧ (1/3・1/4)



Ph.68 SK1353出土遺物②

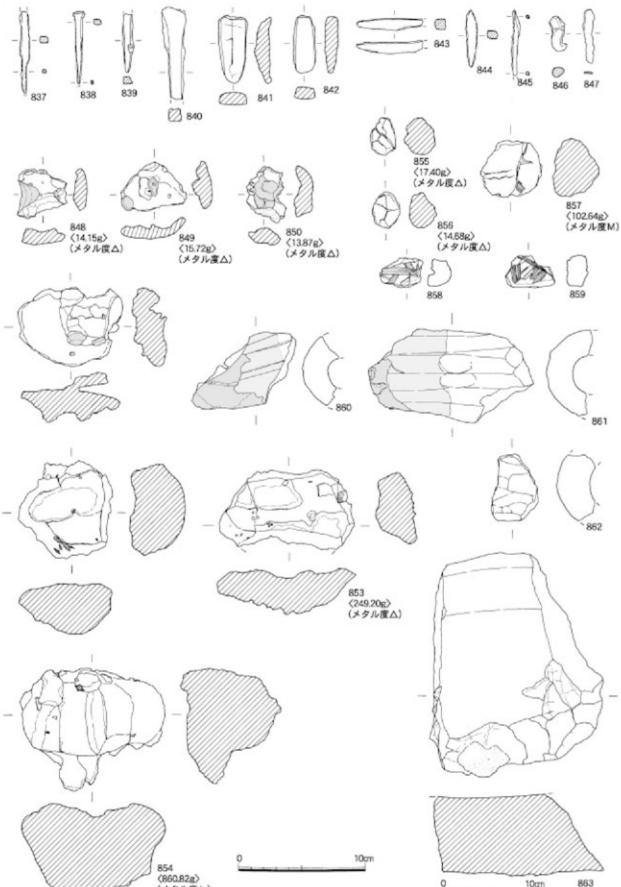
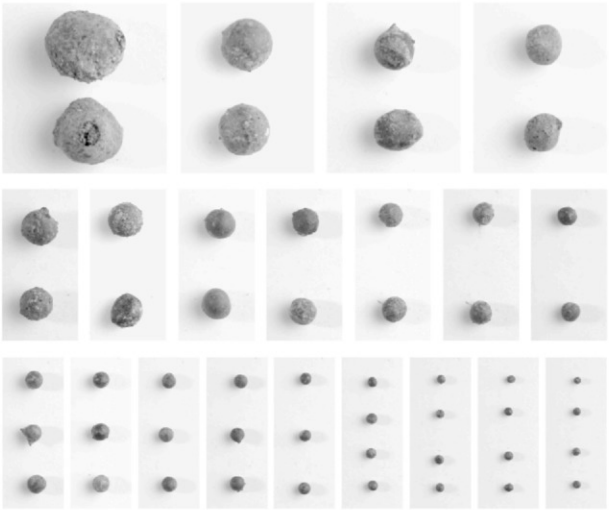
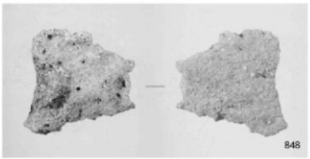
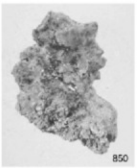
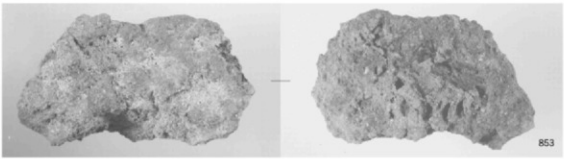


Fig.71 SK1353出土遺物実測図⑨ (1/3・1/4)









Ph.69 SK1353出土遺物③

49.47gを量る。832は須恵器のめんこで、周囲は打ち欠きによって調整する。凸面には格子目叩き、凹面には同心円状当て具痕が残る。833～836は竈である。833は受部と焚口、834は焚口、835は焚口と把手が遺存する。部分的に煤が付着する。837～847は鉄製品である。837は鏃茎、838～840は釘、841・842は楔状の鉄器、843は工具と考えられるが、断面は方形を呈する。844は板状、845は針状、846は棒状、847は薄板状を呈する。848～857は鉄滓である。848・849の表面は緑色、黒色を呈し、ガラス化し、裏面には炉底の粘土が付着する。849の表面には白色を呈した部分もみられる。850～854は椀型鍛冶滓である。850は表面が緑色、黒色を呈したガラス質滓で、裏面には砂が付着する。851の色調は表面が灰白色～褐色、裏面は褐色を呈する。表面は滓があめ状にガラス化し、その上と裏面を酸化土砂が覆う。幅1.0㎜程の木炭痕があり、破面には気泡がみられる。852は表面に多量の酸化土砂が付着しているため、色調は褐色を呈する。また、少量の鍛造剥片と幅5.0㎜の木炭が付着する。裏面は比較的滑らかである。853は1/5程を欠損する。表面は酸化土砂と幅1.0～5.0㎜の多量の鍛造剥片、幅1.0㎝程の木炭が付着する。裏面も酸化土砂とともに多量の木炭と鍛造剥片が付着する。破面には気泡がみられる。854は椀型鍛冶滓が二段になっている。表裏に多量の土砂と滓が付着する。表面は幅5.0㎜程の鍛造剥片と1.0～6.0㎜程の木炭がみられる。裏面にも鍛造剥片と多量の木炭が付着し、径1.5㎝程の滓も結合しているため、部分的に凸状を呈する。855～857は鉄塊系遺物で、やや長い球状を呈する。全体に酸化土砂が付着し、黄褐色を呈する。幅1.0㎜程の木炭痕、鍛造剥片が付着する。857は幅7.0㎜程の木炭痕が付着する。いずれもクラックが入り、その部分は錆化が進んでいる。858・859は粘土塊で、内外面にスサの圧痕を有する。胎土には白色砂粒、赤褐色粒を含む。860～862は羽口である。860・861の先端部はガラス質の溶融したものが付着し、被熱のため灰色へと変色する。ガラス質滓は内面にも付着する。外面はヘラナデ、指ナデで調整する。内面は860に短軸方向、861は長軸方向に擦痕が残る。863は金床石と考えられ、重さは1.4kgを量る。花崗岩で大部分は欠損する。上面は滑らかで、わずかに窪んでいるが、敲打痕や熱を受けた痕跡はみられない。下面、破面には滓等の付着物がみられるが、上面は全くみられない。このことからも鍛錬鍛冶に使用したものと考えられる。他に再結合滓が床面に見られ、一固体の再結合滓の重さは2.48kgを量る。中に鍛造剥片や炭化物が多量に含まれる。土坑からは椀型鍛冶滓を含んだ鉄滓が他に13.92kg出土する。また、敷骨取り上げレベルから鍛冶炉検出床面までの埋土を全量採取・洗滓の後、磁選したところ鍛錬鍛冶作業で排出される鍛造剥片・粒状滓を2665ｇ確認した。ふるいによって選別し３㎜角以上の鍛造剥片（サンプル測定の厚みは0.2～0.4㎜が主体）554.12ｇ、３㎜以下の鍛造剥片（サンプル測定の厚みは0.15～0.3㎜が主体）2082.91ｇを選別した。また粒状滓は径５～７㎜が6.91ｇ、３～５㎜が11.55ｇ、１～３㎜が9.71ｇ、１㎜以下が0.71ｇを測る。全体に光沢が強く、小型で薄手の鍛造剥片が多く、極小の粒状滓も見られることから、これらの遺物は鍛錬鍛冶工程の最終段階で派生したものと考えられる。以上の出土遺物から土坑の時期は８世紀中頃から後半と考えられる。

（３） 古代のその他の遺物（Fig.72　Ph.70）

864～867は包含層出土の墨書土器である。864は須恵器の坏蓋である。天井部が低く、口縁端部は下方へ折り曲げる。天井部外面2/3に回転ヘラ削り調整を行う。灰色を呈し、口縁部付近は重ね焼きのため、灰黒色を呈する。内面に「万」の墨書が薄く残る。865は須恵器の高台付坏の底部片である。色調は灰白色を呈し、外底部に「大」の墨書が残る。866は須恵器の底部片である。灰色を呈し、外底部に「田△」の墨書が残る。867は高台付坏で、1/3の遺存である。胎土に金雲母を含み、灰色を呈する。外底部に墨書が残る。868はSK1224出土の須恵器の坏身である。返りを有し、口径10.0㎝を測る。胎土に金雲母、白色砂粒を含み、灰色を呈する。869はSP1349出土の越州窯系青磁碗Ⅱ類の底部片である。胎土に黒色粒を含み、胎土は灰色を呈する。化粧土を施し、露胎部は暗赤色を呈し、

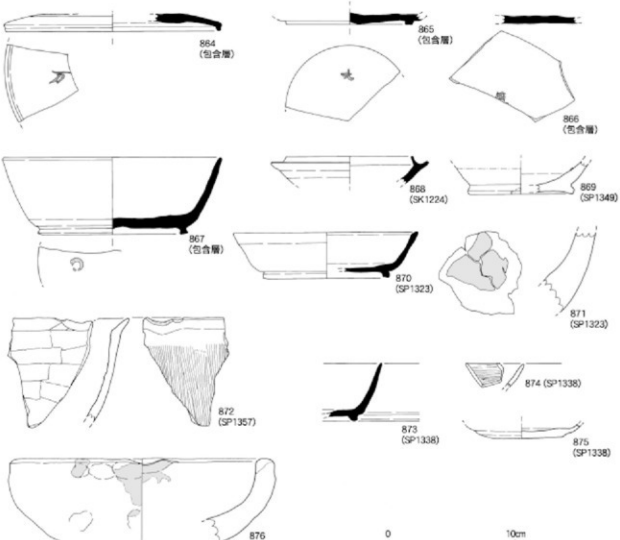
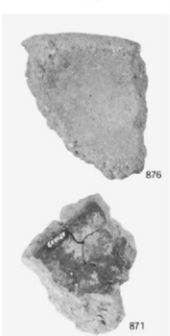


Fig.72　古代のその他の出土遺物実測図（1/3）



Ph.70　古代の出土遺物

見込みと高台に胎土目を有する。870・871はSP1323出土である。870は須恵器の高台付坏で、灰色を呈する。871は坩堝(付編２参照)で、内面は銅の付着物がみられ、赤銅色、黒色、白色を呈する。底部に近い体部片で、器壁は1.6～2.3㎝を測る。胎土に白色砂粒を多く含み、外面の色調は淡橙色を呈する。わずかに赤く発色する部分が見られるが、大量に熱を受けた痕跡はみられない。872はSP1357出土の土師器の甕である。873～875はSP1338出土で、873は須恵器の高台付坏、874は黒色土器A類で、内面に線状の細かい磨きが施される。875は土師器の坏の底部片で、内底部には墨が付着し、器面が滑らかなことから硯として使用した可能性がある。876は包含層出土の片口の坩堝の口縁部片(付編２参照)である。復元口径19.4㎝、器壁は1.5～2.0㎝を測る。胎土は白色砂粒を多く含み粗雑である。外面は被熱のためか、やや荒れており凸凹状を呈する。にぶい灰色であるが、口縁部付近にから中位にかけて赤色を呈した部分がある。口縁部から内面2.0㎝下まではガラス質の銅が付着する。内面の器面もあれている。

Ⅳ. まとめ

最後に今回の調査区の主要な検出遺構と出土遺物の時期的な位置づけおよび若干の考察を行う。まず、遺物としては、弥生時代中期の土器が1点(Fig.26-319)出土しているが、この時期の遺構は検出されていない。本調査区での遺構の初現は奈良時代で、主たる遺構の時期は8世紀中頃から後半の奈良時代と12世紀前半から14世紀にかけての平安時代末から鎌倉時代である。

奈良時代の遺構は竪穴住居跡・土坑・柱穴を調査区の北東側で検出したが、南西側は後世の遺構により破壊されたと考えられる。8世紀中頃から後半のSK1353は一辺約5.0mを測る隅丸方形の竪穴遺構である。底面で鍛冶炉を検出し、周辺からは鍛造剥片・粒状滓が出土した。SK1353に先行するSK1352からも多量の土器・鉄滓が出土し、SK1353より前段階から鍛冶は始まっていたと考えられる。東側の第43次調査区では9世紀代の鍛冶が確認され、西側の第126次調査区でも8世紀中頃から後半の土坑から鍛造剥片が出土する。鍛冶操業が8世紀中頃から9世紀にかけて繰り返し行なわれていた様相が伺える。SK1353からはウマ・ウシの骨が数頭分出土しており、鍛冶工房に関連する祭祀行為が行われたと考えられる。また、多量の須恵器、土師器とともに製塩土器・鉄滓・鉄製品が出土し、廃棄土坑としても使用される。製塩土器はいわゆる焼塩壺とされているものである。今回の調査区から出土した製塩土器は、内面に布目を残し、円筒形丸底を呈する六連式製塩土器も少量出土するが、大半を占めるのは断面円錐形で、尖底を呈したものである。断面円錐形を呈した製塩土器は、洞海湾沿岸や大宰府等の官衙関連遺跡でも出土しており、固形塩の運搬にも使用されたものである。内面の調整には、ヘラナデ、指ナデ、貝殻条痕、布目圧痕が残るもの(Fig.68・69-B・C)があるが、今回の調査区では、内面に刷毛目調整(Fig.68-A)がされており、本遺跡ではこれまでのところ確認されていない。また、他の地域からも出土例がないことから、この内面刷毛目調整で作られた製塩土器は本遺跡で製作され、他に運搬されることなく、この地で使用されたと考えられる。調査区周辺で塩を多量に使用する何らかの施設があったと考えられるが、今後の出土例を待ち、検討を加えていきたい。また、同時期であるSK1329と包含層からは、銅が付着した坩堝が出土している。分析の結果(付編2参照)、ヒ素が検出され、長門長登銅山産原料との共通性が指摘される。銅の工房の存在が伺える。

本遺跡での奈良時代の遺構は、Fig.73に示すとおり、博多湾の南北約70m、東西50mの範囲に広がっている。本調査地点はその北側縁辺に位置し、北側は博多湾に面していた。中世に発展をとげる息濱は当時砂洲状であり、生活に適した環境ではなかった。しかし、息濱の第119次調査地点で、鏡・銙帯が出土し、墓域として利用していたことが指摘されている。本調査地点の南側、50m離れた地点では、8世紀前半から中頃の掘立柱建物とそれに並行する溝が検出され、銙帯・皇朝十二銭・越州窯系青磁・長沙窯水注・イスラム陶器片等の一般集落では出土例の少ない遺物が出土することから官衙関連の遺構があったのではないかと想定されている。この区画溝周辺と北側では、竪穴住居跡・井戸・土坑が検出される。井戸は前半に1基、中頃から後半に3基、後半から末に9基を検出する。竪穴住居跡は前半に2基、中頃から後半に3基、後半から末に11基を数える。ただし遺物は、銙帯・皇朝十二銭・円面硯・湧鼈館式軒丸瓦等が出土し、官衙関連遺構に推定されているエリアと遜色ないものが出土している。このことから北側は官人の居住地及び種々の工房があったものと推定されている。今回の発掘調査では、この工房跡の存在を裏付けたといえよう。

9世紀代の遺構は検出されず、再び生活が確認されるのは12世紀前半の平安時代末になってからである。SK1046はガラス製品や未製品、失敗品を多く出土し、付近にガラス製作の工房があったことが伺える。なお、この土坑からは五銖銭が出土し、博多では15例目の出土となる。その後、13世紀後半まで集落は継続するが、鎌倉時代後期の14世紀になると遺構は減少傾向となる。これは、14世紀に街区が形成され、都市として発展していく息濱の盛行と関連するものと思われる。

Fig.73 奈良時代の主要遺構分布図（1/4000）

＜付編１＞

博多遺跡群第158次調査出土の動物遺存体について

福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課　　屋山　洋

第158次調査地点は現住所で博多区店屋町に位置し、博多濱の北西端部に位置する。今回の報告の中心はSK1353から出土した動物遺存体である。土の水洗選別等は行っていない。調査では出土した骨の下の土を柱状にのこし、乾燥させてから骨ごとに取り上げた。この遺構の時期は８世紀で、この時期の遺構としては博多濱南側砂丘に東西南北の1辺100mを測る区画が確認されている。その中で大型の掘立柱建物などが調査されており、何らかの官衙があったと考えられている。官衙の北西側には掘立柱建物、竪穴式住居、井戸などが点在し、石帯等が出土するため、官人の住居域と思われる。本調査地点は住居域の更に北側に位置し、砂丘の落ち際にあたる。

SK1353は砂丘の基盤面で検出された方形の土坑で長径4.5＋αm、短径4.75mを測る。近世の瓦組井戸に切られている。最下面で鍛冶炉が出土した。これまで博多遺跡では古墳時代前期以降の製鉄関連の遺構と遺物が多く出土してきたが、これだけ大きな掘り込みを伴う遺構は数少ない。埋土中にも鉄滓を多く含んでおり、この炉が廃棄された後も周辺で鍛冶が行われたと考えられる。動物遺存体はこの土坑の中心部分の2.7×1.3mの範囲で、底面から10～15cm浮いた状態で出土した。乾燥のため骨の遺存状態は悪い。調査後乾燥させる課程でさらに細片化が進んだため、種の同定は困難な状況であり、出土状況の写真と実測図に同定結果を加えて報告するものである。

写真と実測図からほとんどがウシ・ウマの大型獣の四肢骨と思われるが、その中で同定できたもの(Tab.２）は以下の通りである。B78とB-53･55･56はウマ上顎である。後者も白歯と切歯の位置が定位置を保つ。両方とも上下逆である。B44とB8-下はウマ下顎でB-63･65･66はウシの頭蓋骨頭頂部である。上下逆さまで出土した。B33も頭蓋骨であるがウシ、ウマの区別は出来ない。B33も上下逆である。B8-上、B11、B24、B46はウシ下顎である。B8はウシとウマの下顎が重なった状態で出土しており、これらから、少なくともウシ･ウマの中で2頭が同時に廃棄されたことが判る。又、SK1353上層でウマの左右下顎が出土しており、ウシ・ウマの頭蓋と下顎が2頭分ずつ(B33をウシとすると)揃うことになる。出土状況としては各個体とも連結していると思われる部分はなく、埋葬ではなく解体された可能性が高い。出土した骨はFig.59(P66)からわかる様に、レベルがほぼ同じでほとんど時間を置かずに廃棄されたものと考えられる。ウシ・ウマなどの大型獣が少なくとも４頭同時に死ぬことは日常的には希であると思われ、また解体された可能性が高いことや、頭骨を逆さまにしてまとめて置いていること、製鉄遺構に伴うことなどから製鉄関連の祭祀による供食の可能性を考えたい。また、もし４頭を事故等による同時死とすると『養老令』の中の厩牧令の規定により皮を剥ぎ、肉を取った後に廃棄したものか。今回は骨の遺存状態が極端に悪いため

1．解体痕の有無が分からないため、実際に解体されたのか、死んで関節がバラバラになった遺体を集めて埋めたものか確定できない。

2．４頭分以上出土していないのか、また4頭分全ての骨が廃棄されたのか、枝肉や骨角器の材料として持ち出された分がないのか。

など、重要な点が不明のまま残るのは残念である。これらが判明することにより古代における大型家畜のウシ・ウマの肉や骨角器材料、または祭祀としての利用が明らかになるものと思われる。今後の調査で類例が出土することに期待したい。

ほかの遺構からの出土としては877（Fig.74）は骨角製の模様である。SE1289(近世井戸)から出土した。櫛は片端が欠損し歯が全て折れているが、現状で長さ10.8cm、幅2cm、厚さ3.5mmを測る。歯は

幅2.5㎜、歯と歯の間の隙間は鋸引きによるもので0.5~0.8㎜前後とかなり狭く梳き櫛と思われる。櫛の大きさから材料としてウシもしくはウマの四肢骨を使用している。文様・彩色等はみられない。遺存状態は悪く、表面は剥落しかけている。

このほかSK1046からはイノシシ(ブタ)の肩甲骨、SK1081・SK1177では小型イルカ類の椎骨が出土しており、博多遺跡群の他の調査地点同様にイノシシやイルカ類を利用していたことが分かる。またSK1046(12世紀)からは小型魚類の骨が多く出土した。同定が済んでいないので種は不明であるが、出土しているのはほとんどが頭部骨であり、椎骨が少ない。解体時に頭を切り落として廃棄した可能性が考えられる。

Tab. 2

	遺構	層位	大分類	小分類	部位名	左右	部分1	部分2	成長度	切痕	火熱	備考	時代
1	1~2面包		魚類	サメ類(アオザメ属)	歯		1本						奈良~近世
2	SE1247	上層	哺乳類	シカ	中手・中足骨		幹部のみ	細片化	不明	不明	なし	他の骨も混じるがいずれも細片化しており分類不能	12世紀中頃
3	SE1289	井側内下層	哺乳類	骨角器	横櫛							原料ウシ・ウマ四肢骨	近世
4	SK1021	下層	哺乳類	イルカ類	椎骨		椎体のみ	一部上面欠損	椎頭部化骨化済み	あり	不明		近世
5	SK1045	R1	哺乳類	シカ大腿骨		左	近位部		化骨化済み	不明	不明		12世紀前半
6	SK1046		魚類		内臓骨		多量	椎骨も若干含む					12世紀前半
7	SK1046	R19	哺乳類	イノシシ	肩甲骨	右	遠近両端欠損						12世紀前半
8	SK1046	R20	哺乳類	イノシシ・シカ	上腕か大腿骨		近位部			不明	不明		12世紀前半
9	SK1081	攪乱	哺乳類	小型イルカ類	椎骨		椎体のみ		椎頭部化骨化済み	不明	なし		近世
10	SK1177	下層	哺乳類	小型イルカ類	椎骨		椎体のみ	左側弓状突起の一部	化骨化済み	なし	黒色化		近世
11	SK1177	下層	哺乳類	小型イルカ類	頭蓋骨小片				不明	なし	なし		近世
12	SK1352	北西側	哺乳類	ウシ	下顎歯		M3 1本		歯冠高5.4cm				8世紀中頃~後半
13	SK1353	B5	哺乳類	ウシ?	中足骨		遠位部		遠位端欠損	不明	不明	ウシにしては細い	8世紀中頃~後半
14	SK1353	B8	哺乳類	ウシ	下顎	右	M1~M3の歯と下顎体			不明	不明		8世紀中頃~後半
15	SK1353	B8	哺乳類	ウマ	下顎		P2~M3	歯のみ	若~成獣	不明	不明	歯だけ定位置で並んでいる	8世紀中頃~後半
16	SK1353	B9	哺乳類	ウシ・ウマ	中手・中足骨?		近位部		不明	不明	不明		8世紀中頃~後半
17	SK1353	B11	哺乳類	ウシ	下顎								8世紀中頃~後半
18	SK1353	B12	哺乳類	ウマ	脛骨	右	遠位端		化骨化済み	不明	不明		8世紀中頃~後半
19	SK1353	B16	哺乳類	ウシ・ウマ	長骨		幹部のみ						8世紀中頃~後半
20	SK1353	B17	哺乳類	ウマ	切歯		3本		歯冠高3.86cm以上	不明	不明		8世紀中頃~後半
21	SK1353	B17	哺乳類	ウマ	脛骨	右	遠位部	遠位端欠損	化骨化済み	不明	不明		8世紀中頃~後半
22	SK1353	B18	哺乳類	ウシ・ウマ	長骨								8世紀中頃~後半
23	SK1353	B20	哺乳類	ウシ・ウマ	長骨								8世紀中頃~後半
24	SK1353	B24	哺乳類	ウシ	下顎	左							8世紀中頃~後半
25	SK1353	B28	哺乳類	ウシ・ウマ	長骨								8世紀中頃~後半
26	SK1353	B34	哺乳類	ウマ	左上顎歯		1本						8世紀中頃~後半
27	SK1353	B44	哺乳類	ウマ	下顎	右?			歯冠高4.97cm以上	不明	不明		8世紀中頃~後半
28	SK1353	B47	哺乳類	ウシ・ウマ	上腕骨	左?			化骨化済み				8世紀中頃~後半
29	SK1353	B48	哺乳類	ウシ・ウマ	長骨								8世紀中頃~後半
30	SK1353	B49	哺乳類	ウマ	切歯	右	I1~I3	歯のみ				歯のみ定位置で並ぶ	8世紀中頃~後半
31	SK1353	B52	哺乳類	ウマ	上顎	右?							8世紀中頃~後半
32	SK1353	B53	哺乳類	ウマ	切歯		上顎?			不明	不明		8世紀中頃~後半
33	SK1353	B55・56	哺乳類	ウシ・ウマ	長骨				不明	不明	不明	細片化	8世紀中頃~後半
34	SK1353	B60	哺乳類	ウマ	下顎	左			歯冠高5.3cm以上	不明	不明	細片化	8世紀中頃~後半
35	SK1353	B63・65・66	哺乳類	ウシ	上顎				成獣			ウシの頭蓋骨丸ごと	8世紀中頃~後半
36	SK1353	B78	哺乳類	ウマ	上顎		右P2~M3 左P4~M3		若獣				8世紀中頃~後半
37	SK1353	上層	哺乳類	ウマ	下顎	左						下顎骨全体	8世紀中頃~後半
38	SK1353	上層	哺乳類	ウマ	下顎	右							8世紀中頃~後半

877

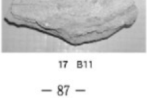
Fig.74 骨製横櫛実測図 (2/3)

10 イルカ類椎骨

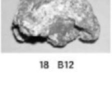
27 B44

14 B8

15 B8-下



17 B11



18 B12

36 B78

＜付編２＞

博多遺跡群第158次調査出土坩堝類の分析

比 佐 陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

博多158次調査で出土した坩堝について、何に用いられたのかを推測することを目的として、材質調査を行った。分析装置はエネルギー分散型微小領域用蛍光Ｘ線分析装置（EDAX：Eagle-μprobe）を使用。４点の坩堝を対象として、微小領域用（分析範囲が0.3㎜φ）の特性を活かし、特徴的な箇所を幾つか選定して分析を行ったが、いずれの部分でもほぼ同じ様な結果が得られている。まず、アルミニウム(Al)、珪素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)などは坩堝胎土に起因すると見られる。鉄(Fe)は土壌にも豊富に含まれる元素であり、坩堝胎土に関係するものか、坩堝を用いた作業で加工された金属に起因するものか、今回の分析では判断が付きかねる。

次に金属加工に関係すると見られる元素について、個別に見ていきたい。

SP-1323出土資料では、赤銅色の部分、黒色部分、白色部分をそれぞれ狙った分析を行ったが、最も強いピークとして銅(Cu)が検出され、その他、ヒ素(As)または鉛(Pb)と見られる極微弱なピークが認められる結果は、全てに共通している[註1)]。つまり、見た目の色調の違いは特に分析結果には反映されていない。

SK-1329下層出土の資料では、外面に付着した緑青の塊部分と、赤色の付着物部分を分析したが、やはり金属加工作業に関連すると見られる元素としては、銅が顕著であり、僅かにヒ素または鉛と見られるピークが認められる。

SK-1329上層出土資料の内面緑青部分、１面包含層東側出土資料の赤色部分と白色部分も、上記と同様の結果である。

以上の結果から、これらの資料は銅の加工に関わる作業に用いられたものと推測される。その具体的用途であるが、仮に鋳造に用いられるものであれば、通常、銅－錫、または銅－錫－鉛の合金である青銅が用いられる。しかし、分析の結果、いずれの資料、いずれの部分からも錫や鉛は検出されていない[註2)]。純銅を溶解して、鍛造等の作業に供するための用具とも考えられなくはないが、今回の分析は坩堝の上半部に対して行ったもので、比重の重たい素材が底の方に溜まっているという可能性を想定する必要があるのかもしれない。その解釈は類例の増加など今後の研究の進展を待つべきであろう。なお、ヒ素の検出であるが、古代の銅製品にはヒ素を少量含むものが多く、長登産原料との共通性が指摘されており（成瀬2001）、資料の時代的な要素とも齟齬を来すものではない。

註

１）ヒ素と鉛の主要蛍光Ｘ線であるＫα線とＬα線は、ほぼ同じエネルギー値であり、それぞれの元素を判別するには、２番目に強いヒ素のＫβ線、鉛のＬβ線の存在を見るしかない。しかし、本資料の場合、これら元素からの蛍光Ｘ線が微弱であり、Ｋβ、Ｌβ線はほとんど見ることができず、判別は非常に困難である。ただ、一部の分析箇所では、僅かにヒ素のＫβ線部分に隆起が見られるものもあり、これらの微弱ピークはヒ素である可能性が強いと考えられる。

２）鉛の可能性があるピークは微弱に検出されているが、このピークはヒ素の可能性が強く、仮に鉛であったとしても、青銅に関与する程のものとは言えない量である。

参考文献

成瀬正和2001「正倉院宝物と長登銅山－化学的調査結果などから－」『古代の銅生産－『古代の銅生産シンポジウムin長登』資料集－』美東町・美東町教育委員会

報告書抄録

ふりがな	はかた　ひゃくじゅうきゅう
書名	博多119
副書名	博多遺跡群 第158次調査報告
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第989集
編著者名	屋野 惠美
編集機関	福岡市教育委員会
発行機関	福岡市教育委員会
発行年月日	西暦2008年3月31日
作成機関ID	
郵便番号	810-8621　　電話番号　092-711-4667
住所	福岡県福岡市中央区天神1-8-1

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査期間	調査面積	調査原因
博多遺跡群（はかたいせきぐん）	福岡県福岡市博多区店屋町（ふくおかけんふくおかしはかたくたなやまち） 66番1,66番2,67番,68番	40130	0121	33° 35′ 45″	130° 24′ 37″	2006.1.26 ～ 2006.3.17	331.6㎡	ビル建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
博多遺跡群	集落（都市）	古代／中世／近世	竪穴住居跡　1 鍛冶炉　1 井戸　14 溝　10 土坑・柱穴　多数	土師器・須恵器・黒色土器A・B類・瓦塼・国産陶磁器・白磁・龍泉窯系青磁・同安窯系青磁・青白磁・染付・中国陶器・朝鮮陶磁器・瓦・土製品・石製品・ガラス製品・金属製品・鋳造関連遺物・獣骨・魚骨	

要約

第158次調査では、弥生時代中期の土器が1点出土するが、この時期の遺構は検出されていない。本調査区での遺構の初現は奈良時代で、主たる遺構の時期は8世紀中頃から後半の奈良時代と12世紀前半から14世紀にかけての平安時代末から鎌倉時代である。奈良時代の遺構は竪穴住居跡・土坑・柱穴・鍛冶炉を検出した。鍛冶炉からは、数体分のウマ・ウシの骨が出土し、鍛冶に関連する祭祀が行われたと考えられる。また、銅の付着した坩堝が出土することから銅の工房があったことが伺える。9世紀代の遺構は検出されず、再び生活が確認されるのは12世紀前半の平安時代末になってからである。この時期の土坑からは五銖銭と共にガラス製品や未製品、失敗品が出土し、付近にガラス製作の工房があったことが伺える。その後、13世紀後半まで集落は継続するが、鎌倉時代後期の14世紀になると遺構は減少傾向となる。

博　多　119

－博多遺跡群 第158次調査報告－
福岡市埋蔵文化財調査報告書第989集

2008年（平成20年）3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号

印　刷　巧文社印刷株式会社
福岡市博多区古門戸町9－16